
エルリオール～異界の勇者達?～

フリージア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルリオール〜異界の勇者達？〜

【Nコード】

N5089N

【作者名】

フリージア

【あらすじ】

えゝまず自己紹介からはじめよう。俺の名前は赤夜^{あかや} 涼一^{りょういち}、高校3年、成績普通、運動神経はちよつと自信有り、ただ髪の毛が銀髪なのと後1点を除けばごく普通の学生だと思う。まあ、この後1点てのが厄介なんだけどな。

そんな俺が異世界で大暴れ、ごめん暴れるかどうかは分からない、とにかくやりたいように適当にやっていこうかな。

エルリオールの二作目です。更新は前作同様不定期マツタリやって

いきます。

序章 異端の少年

えゝまず自己紹介からはじめよう。俺の名前は赤夜^{あかや} 涼一^{りょういち}、高校3年、成績普通、運動神経はちょっと自信有り、ただ髪の毛が銀髪なのと後1点を除けばごく普通の学生だと思う。

まあ、この後1点てのが厄介なんだけどな。

実は俺の親父は吸血鬼だ、といっても頭がおかしくなったとしか思われないだろう、だがそう言う設定だ文句は受け付けん。母親は人間で俺は吸血鬼と人間の混血ってことになる、しかも俺は血を吸う必要が無く吸血鬼の苦手とする物をまったく意に介さない、なのに力は吸血鬼のもの、つまり吸血鬼の力を持った人間だ。

吸血鬼の力って言っても書物や伝承に有るのとは違ってるから細かいことは追々語るとしよう。

と、普通の人間として生活している俺はこの目立つ髪の色でよくガラの悪い連中に絡まれるのだけど吸血鬼の力としてハンパ無い身体能力で返り討ちにしてる、問題は最近俺の噂が広まっているらしいことだ。

人間程度が束になってかかって来たところでまったく問題ないんだけど、高校にまで押しかけてくるのは止めて欲しい、いや、まじで三階の教室の窓側の席から校門の方にガラの悪い連中が集まっているのが見える。

「おるらあああ！！赤夜ああ！！出て来いやああああ！！！！」

くそ、名前まで知られてるのか。てゝか呼ぶな暇人、普通に生活させてくれ。

「ああああああやあああああああ！！」

うるせえ、て、うわ、教室中の視線を独り占め？みんなこっち見てるよ・・・

教師、お前もこっち見てないで校門のごみ共片付けて来てくれよ・・・って、無駄か。

「はあ、（普通の生活）諦めるか」

いろいろ諦めた俺は一番近い窓の鍵を開け窓も開け放ち窓枠に足をかける。

「ちょ、赤夜君？」

「あゝ先生、いろいろ諦めました。行ってきます。あと、学校も辞めるんで、んじゃ」

慌てて声をかけてきた先生にそう言って俺は窓から飛び降りた。

「「「きゃあああー」」」

教室から女子共の悲鳴が聞こえてくるが無視だ、クラスメイトが飛び降りたことでトラウマを植えつけられようとも知ったことじゃない。それにこれくらいの高さどうってことは無い。

「くだらねえ、俺にこの世界は合ってねえ」

（駄目です！その命僕が預かった！！）

「はあ！？」

俺の中に少年の声響いた、着地に備えていた俺は意表をつかれ思わ

ず驚いた声を上げる。

あれ？地面に付かない？おいおい。

「どこだよここ？」

黒だ回りは真っ黒い空間だった。俺は昼の教室から飛び出したはずだぞ。

（ここは、世界の狭間ですよ、お兄さん）

黒い空間に光が生まれ俺の1mほど前の空間に12歳くらいの少年が姿を現す。

黒髪黒目の以下にも日本人的な顔立ちの少年だ。

「で？」

（え？）

「ここがどこかは聞いた、世界の狭間とか言われても分かるか！今の状況を納得できるようにさっさと説明を続けろ」

（ええっと、お兄さんいま飛び降りましたよね？）

「ああ、飛んだな」

（駄目ですよ命を無駄にしちゃ）

・・・ほう、このガキ、俺が飛び降り自殺したとも思ってるのか？あれ位の高さでどうにかなるわけねえんだが。まあいいとりあえず合わせとこう。

「そうだな、命は大事にしなきゃな」

(それですね、お兄さんの捨てた命僕にください！)

「ほう、お前は死神か？」

吸血鬼が居るんだ死神が居てもおかしくは無いな

(違います！僕はある世界の神様の分身です。

今、このある世界の神様が不在で分身の僕だけじゃ世界を平和に導けなくなってきたんです。

様々な種族の混在するその世界エルリ・・・)

吸血鬼が(r y

異世界に不在の神様ねゝ多岐にわたる種族に魔物、魔法とかも有るのか・・・

まあ、魔法っぽいことなら俺も出来るが。

(・・・そこで、お兄さんに世界を救ってもらいたいのですよ、心配りません
必要な力は神の分身の僕にでも・・・)

熱く語ってくれてる所申し訳ないが(別に申し訳ないとは思っていない)そろそろ止めよう。

「・・・まず、言っておく。俺は別に飛び降り自殺した訳じゃない、あれ位の高さなら俺は怪我一つ無く着地できる」

(・・・は?)

お、焦ってるのか？だんだん顔が青くなってきたな。

（もしかして、僕、間違えました？）

「まあ、そうなるな」

お、今度はだんだん顔が紫になってきた、大丈夫か？あ、泣きそう。

（ど、どうしましょう僕あの場所からあなたのこと消しちゃいましたよ！神隠しですよ！）

「まあまあ、そう焦るな、面白そうだな、その異世界って行ってもいいぞ、元の世界よりは退屈しなさそうだしな」

（ふえ？い、いいんですか！？）

「世界を救うってのにはイマイチぴんとこないけどな・・・」

（いいですよ、地球の人は居るだけでもエルリオルの未来に影響を与えますから。

後はお兄さんが少しだけ世界を救うことを考えてくれれば、世界は少しでもいい方へ向かいます）

「まあ、俺の退屈な日常を終わらせてくれたお礼だ、それぐらいは任せとけ。

んじゃ早速連れてってくれよ、その異世界エルリオルってやつによ」

（はい。あ、その前にお兄さんに何か力をあげないといけませんね、

魔物とかは結構危険ですから、
何でも言っておきたい、お兄さんの希望に出来るだけ応えますよ」

「あゝ、いいや、いらね、俺普通の人間とは違うからな、危険ななんてほとんど感じないと思うぞ」

（うゝん、そうは言っても、事故にせよ僕の意思にせよ、
地球からエルリオールに向かう人には、何か力を与えているので何も与えないわけにも・・・）

「んじゃ、もし何か困ったことがあったら1回だけ助けてくれよ」

（えゝと、はい！それじゃあもしお兄さんに力が必要になったら
その時僕がお兄さんに力を与えますね！）

「おう、頼んだぜ」

（それじゃあお兄さん、準備はいいですか？）

「いつでも」

（それじゃ、行ってらっしゃい）

神の少年に見送られ俺はその場から落下し始めた

~~~~~

一人で離宮を抜け出して夜の散歩をするのは私の唯一の楽しみでし

た、離宮の中とは違った森の澄んだ空気、夜の静寂、清々しい気分になれる、だけど、今宵、私は一人森に踏み入ったことを後悔していました。

必死になって奴の腕の動きに剣を合わせ爪の攻撃を受け流し避ける、出来ればすぐさま背を向けて逃げ出したのですがその3mの巨体にもかかわらず奴のほうが私より動きが早い、今までこの森にこんな大型の魔物の出た話は聞いたことが在りませんでした。

「あっ！」

今まで何とかギリギリで凌いできましたが、奴の力に耐え切れずに剣を手放してしまいました。

「（もう、駄目なんですか？でも、もういいかもしれません）生きててもなにも、良い事なんて無いんだし」

「

」

覚悟を決めて目を閉じじっと最後の時を待ちます。

「グゴオオオオオオオオオオオ！」

「だあああ！くそ！痛ってええ！！・・・あ、やべえ身体強化忘れてた、意識が飛ぶ・・・」

ずしん、どさりと、二つの叫びと倒れる音、いつまで経っても私に最後の時は来ません。

ゆっくりと目を開けると頭を9割ほど身体にめり込ませ絶命している奴と気を失って倒れている銀髪の男の子が居ました。

「私、助かったの？」

誰にとも無く呟きます。安心感からその場に座り込んでしまいましたが、まだ他の魔物が居ないとも限りません、男の子の手当てをしたいところですがここではほんとに診るくらいしか出来ません。少し大変ですけど男の子を背負い離宮に戻るため歩き出します。

あら？私、こんなに人の近くに居るのはほんと久しぶりなのではないでしょうか？

ふと見上げると空に紅い月が浮かんでいました。

「今宵は魅魔の紅月、月の魔力が奇跡をくれたの？」

・  
・  
・  
フフ、なんて、私に魔力の力なんて何の意味も無いのにね・  
・

## 序章 異端の少年（後書き）

は、やちまったぜ！

いいんだ、自己満足？ご都合主義？上等だ！

やりたいように詰め込んでいくぜ！

## 一章1話 異世界

身体の痛みで意識が覚醒する、どうやら足が折れてるみたいだ。

まあ、空から落ちてきて骨折だけで済んだのは下になんかクッションになる物があったからなんだけど、咄嗟の事で身体強化を忘れたのがいけなかったな、してりやどうってことなかったのに・・・

「(とりあえず、自己治癒強化)」

しばらくしたら歩けるようになるだろう、さて・・・

「ここはどこだ？」

今俺が居るのはやたら高そうなベッドの上だ、少し周りを見るとだいたい10畳くらいの広さの部屋なんだが全体的に高級そうな調度品で調えられていた。

外国じゃなくて、ここ異世界だよな？誰か現状を説明できる奴いねえの？

おっ、骨折の治療終わった、いつもより早いな、ん？あゝ足手当てして有るな・・・気づかなかった。

まあいいや、とりあえず外して、よし、腹減ったし探索するか。

ここは、厨房か？何か食い物もらえないかな・・・てか、ここでの俺ってどういう扱いだ？

怪我の手当てとか寝かされてた場所から見ても敵対されてる訳じゃないみたいけど、まあ、どうでもいいか。敵対したら全部ぶっ飛ばせばいいだけだ。

「あれ？どうしたんですか？」

厨房からエプロンをつけた男の子がこっちに気付きやって来た。

「何か食いもん無い？出来れば肉がいい」

「食べ物ですか・・・もう皆さんの昼食は終わっているのですけどもな物は残っていないんですけど、ボクたちの賄いでよかったら一緒に作りますよ」

賄いか・・・まあ食えればなんでもいいか。

「んじゃ頼む」

「はい！ちょっと待っててくださいね」

近くにあったテーブルに着き厨房の様子を見る、

見たことの無い野菜や見覚えの有る野菜が次々と切り刻まれていく、野菜が空中でどんどん細かくなっていく。白い液体、ドレッシングかな？がかけられて多分サラダが完成した。

次に厨房の隅に有る鉛色の箱からでかい肉の塊・・・ハムか？を取り出して薄くスライスしていく。皿に盛り付けて完成か？

で、アレはパンか？塊、一斤丸々取り出してこれも食べ易いように切っていく、完成。

「出来ましたよ」

おお、見事な包丁捌きだったな。でもコイツ切る以外の調理をやつてねえ・・・まあ、とりあえず今は食えればいいか。そのうちエリオールの食材や調理法を調べとかなきゃいけないな。

腹を満たし男の子にお礼を言い探索を再開する。

見た感じは西洋の城、結構歩いているのにさっきの男の子以外の人に出会わないのは何故だろう？ただ単に人が少ないだけか？適当な部屋をチョイス・・・

開く、閉じる！

しまった、中に着替え中の女の子が居た、迂闊に扉を開けた自分を殴りたい、とりあえず女の子の悲鳴が聞こえる前に逃げ出そう。

だが俺が焦って逃げ出した後に悲鳴が響くことは無かった。

今は昨日の・・・足を骨折していた筈なのにどうして動けるの!?

急いで着替えを終えて、逃げて行った彼の後を追う。

彼は何処に行った? この離宮、働いてる人は少ないけど結構広い、まずは彼を寝かせていた部屋を見に行ってみようかな・・・

部屋はもぬけの殻だった、彼の寝ていたベッドの上には治療した時に使った包帯などが乗っていた。

後は適当に探すかここで待つかだけど・・・彼がここへ戻ってこれるかどうか・・・

魔法の作用しないここで、どうやって怪我を治したのかも気になるし・・・うん、探しに行こう。

えゝ何事も無く逃げられていたかと思えます。ただ・・・

「迷った、ここ何処だ?」

建物の外に出てしまった。この建物の近くに銀色の城が見える、ここは離宮とかかな? で、俺が今居るって・・・



「誰だ？兵士以外がここで何してる？」

あきらかに兵士な人に声をかけられた。まあ、訓練所っぽい所だから兵士が居ても可笑しくないな、せつかく出会えた人間だ、とりあえず話をしよう。

「あゝここ何処だ？」

「どこだって、まず質問に答えろ、お前は誰だ、ここで何してる」

ち、めんどくせえ奴に当たったな、ぶっ飛ばしたくなってきたが、ここは大人しくしておくか・・・

「赤夜<sup>あかや</sup> 涼一<sup>りょういち</sup>、迷子だ！」

あ、言ってる情けなくなってきた・・・この歳で迷子ってどうだよ。

「ふむ、やはり知らん名だな・・・侵入者ってことか、拘束しておくか」

待ておっさん、こらこら丸腰相手に剣を抜くな！キレるぞ！

「<sup>アイアンブラッド</sup>  
(鉄血)」

俺の右腕が鋼色変化する、俺の持つ能力、身体能力強化の1つ身体  
の硬質化で腕から手の先を強化して兵士の剣を掴む。

ただの脅しで剣を抜いただけなんだろうな、俺の手には傷1つ付かなかった。そのまま力を込める。

「な！動かん！」

必死に剣を引つ張る兵士が笑える、まあ、何時までもこんなおっさんに付き合ってる気は無いため、おっさんが剣に引く力を込めた瞬間に手を離す。

尻から盛大に転びやがった、内心爆笑しつつ足に強化をかけ建物内に隠れる、俺が突然消えておっさんは辺りを見回しているが、何時までもおっさんを観察している趣味は無い、再び適当にうろつくことにする・・・迷子？さあ？どうにかなるだろ。

「はい、銀髪の男の人なら先程来ましたよ、何か食べたいって言うんで賄いを一緒に食べましたけど・・・もしかしてあの人大事なお客様ですか！？どうしようボク賄なんて出しちゃって！」

「あ、大丈夫よ別に客って訳じゃないから（正体不明だしね）・・・」

彼の目撃者を探して離宮内で聞き込みをしていくと、厨房で見習い料理人のウリンさんが彼に会ったみたい。

「何処に行ったか分かる？」

「すみません」

仕方ない、また聞き込みをしながら探しましょうか・・・

銀髪の人なんて私たち以外は珍しいから直ぐに見付かるでしょう。

---

どうしてこうなった？

俺は今数人の兵士から身を隠しながら逃げ回っている。さっきの兵士が仲間を呼んだのか？

「おおおお！どこだ！！！」

「探せ、だが注意しろ、相手はこの離宮周辺にも拘らず強化魔法を使うぞ！」

「おい、リア様も侵入者を探してるって話だぞ」

俺が何をした？さっきの事故、女の子の着替え中の部屋の扉を開けたのは有るが・・・

ドア越しの会話を聞きながら、息を潜め兵士たちが過ぎるのを待つ・・・さてどうするか。

ートントンー

不意に誰かに肩をたたかれる、え？多少焦っていたとはいえ、俺人が居る部屋に隠れたのか！？

恐る恐る振り返ると俺と同じ銀色の髪をツインテールにした俺より少し幼いくらい（12歳位か？）の美少女が微笑んでいた。

「や、やあ、ははは・・・」

やあ、じゃねえよ！ちよつと落ち着こう・・・

「リリカと同じ、銀髪・・・お兄さん？」

誰が兄さんだ！俺は一人っ子だ！つといかんいかん、落ち着け俺。

落ち着いた？よし、逃げよう！

「お兄さん待って」

「ぶっ！」

逃げようと扉に手をかけた俺腰に少女が飛び付く、勢いで扉に顔をぶつけたがたいしたダメージでは無い。

「逃げなくていいよ、アタシも隠れてるとこだから」

この子は何から身を隠しているのか知らないが何時までもここに居るのはまずいと思うんだが・・・

扉の向うはさっき俺が扉にぶつかった音に気付いたのか人の気配が集まってきている。

「窓から逃げるか・・・」

「あ、アタシも連れてって！」

・・・・・・・・

「きゃ！」

ち、駄々こねられるのも厄介だし仕方ないか、俺は少女を抱き上げ窓から外に出る。誰も居ないことを確認して足に強化をかける。

「口閉じてろ、舌嚙むぞ」

「ん！」

少女が口を閉じたのを確認した後一気に跳ぶ、数瞬の浮遊感の後俺たちは離宮の屋根に降り立った。

ここならばらく見付からないだろう、少女を降ろして一息つく。

「うわぁ・・・お兄さん凄い、こんなトコまで跳んじゃうなんて凄い凄い！」

ん？確かに30メートル位跳んだが、ここって魔法とかが有る世界だろ？これくらい騒ぐようなことか？

「あんまりはしゃいで落ちるなよ」

はしゃぐ少女を気にしつつ屋根に腰を下ろしこの世界の風景を眺める、此処ってやっぱり何処かの城なんだな、少し離れた所に立つ銀色の城、その周りにこの建物のようなのがいくつか存在する、それらを纏めて囲む城壁、正面に位置する城門の先に街並みが広がり、城と街の両隣は森が広がっている、で背後に険しい山を背負ってい

る。

ここが異世界か・・・兵士や城を見たぐらいじゃ実感できなかったけど、これは・・・

「ファンタジーだな」

「ファンタジー？」

少女がいつの間にか俺の背に乗っかっているが気にしないでおう、それより・・・

「お前なんで隠れてたんだ？」

「お前じゃなくてリリカです。リリカ シルバーリーフ」

ふむ、名前は、名、姓か、なら・・・

「そうか、俺は涼一だ、リヨウイチ リヨウイチ 赤夜、アカヤ リヨウでいいぞ。で、リリカはなんで隠れてたんだ？」

「アタシはリアお姉様に会いに来たの、でもおリア姉様に会うのはお父様に止められてて、だからこっそりと会いに来てるの！」

そうか、俺を探す為に兵士が動き回ってるから、見付からないように移動できずにあそこに隠れていたのか・・・

「リヨウお兄さんは？この城の人じゃないですよね？」

エルリオール  
それどころかこの世界の人間でもないな、正体の分からない相手に

連れて行つてと言うこの子は大丈夫か（頭とか）・・・

「ああ、気が付いたらベッドで寝かされていた。

暇なんで探索してたんだが・・・不審者扱いされている」

「うーん、この人たちはアタシを見つけると城に連行するからアタシじゃ何も出来ないの、リアお姉様が見付ければなんとかなるんだけど・・・あ」

リリカの視線が下に向かう、俺もそっちを向いてみると、俺と同じ年頃の女の子が何かを探しながら歩いているのが見えた。

「リアお姉様」

どうやら彼女がリリカのお姉さんのようだ。リリカの声が聞こえたのだろう彼女は上を、俺たちの方を見上げ驚きで目を見開いた。

「リリカ！どうやってそんなトコに！危険だから降りてきなさい！」

「待って！駄目なの、リョウお兄さんが捕まっちゃうの！」

「?？」

「あゝ、とりあえず彼女も連れて来たら良いか？」

リリカの肯定後、俺は身体を強化して屋根から飛び降り・・・

「あ！」

リリカと同じようにリリカの姉を抱かかえ上に戻った。

「ほいっと」

「ふぁーやっぱりリョウお兄さん凄いの！」

「ほんと、魔法無しで人一人抱えてこの高さを跳べる人なかなか居ないわよ。

それにしても、やっと見つけたわ！」

「へ？」

下ろした途端腕を掴まれた。あれ？俺捕まった？まあ、振りほどくぐらいいけないんだけどな。

「もう、怪我人が急に消えたら心配するでしょ！」

あー、この人が俺の手当てしてくれてたのか。

リリカ同様銀髪だが銀というより白に近いな、まあリリカ同様美人さんだ。

「それで、怪我は大丈夫なの？まあ、あれだけ動き回れていれば大丈夫でしょうけど・・・

いったい何をやったの？この辺は（私が居るから）魔力がまったく使えない筈なんだけど？」

そうなのか？魔力が使えない、だから俺が屋根<sup>こゝ</sup>まで跳んだのをあんなに凄<sup>こゝ</sup>いって言ったのか。

「どうって、自己治癒？」



「どうして疑問系のかしら？ まあいいわ、馬鹿げた身体能力を持ってるみたいだし、治癒力が高くても驚かないわ。

それより、あなたにお礼を言わなきゃね、ありがとう、あなたが居なかったら私は昨日の夜、死んでいた」

はぁ・・・？ なんのことだ？ 昨日の夜ってことはエルリオールでの最初の・・・ああ、空から落ちた場所の近くに居たのか？ そんな時の何かが偶然彼女を助けたんだろうが、むしろ俺の治療をしてくれたことを感謝しないとな。

「いや、礼はいい、唯の偶然だ、こっちも怪我の治療してもらったみたいだしな。

それよか下の奴らを何とかしてもらえないか？ 俺あんまりうざいと殲滅するぞ」

「ああ、うん、大丈夫、あなたが追われているのが分かったから、皆には私のお客さんだって話しておいた、だから戻っても大丈夫よ」  
ふう、ならとりあえず落ち着いたってことだな。

「それで、リリカはまた私に会いに来たの？」

「うん」

「もう、来てくれるのは嬉しいけど、あまり頻繁に来ちゃ駄目よ」  
2人が話し込み始めた、俺どうしよう？ この2人をおきっぱなしにしたら下に降りられないだろうし、待つしかないのかなあ？

「とりあえず部屋に戻りましょうか」

お、帰るみたいだな。んじゃ、2人を集めて抱えて下に降りる。  
で、戻った部屋が俺の寝ていた部屋だった。

「とりあえず自己紹介ね、私はマテリア、マテリア シルバーリー  
フ、一応この子の姉だけど、私たち以外の人が居る時はそのことは  
忘れてちょうだい」

ん？何か訳有るか？まあどうでもいいけどな、下手に首突っ込んで  
も良くないしな。

「そうか、俺はリョウイチだ、リョウイチ アカヤ、リョウでいい」

「リョウね、私のこともリアでいいわよ」

そのあと少し話をしてリアの言うお礼に、しばらくここに留まって  
欲しいと言われた、エルリオールに来たばかりの俺には、寝床が確  
保できるのはありがたいのでその提案を受けることにした。

ここに居る間にエルリオールの知識を出来るだけ詰め込むとしよう  
か・・・

その日の夜、俺は1人屋根の上でエルリオールの夜景を眺めていた。  
元の世界ほど街の明かりが強くない為か？空気が澄んでいるからか  
？星空が綺麗だ。元の世界より大きく感じられる青い月も少し欠け  
ているが美しいと言える・・・

まだエルリオールに来て1日だけど今日だけでもなかなか楽しめた。俺は・・・

「親父、悪いな・・・俺はやっと自分に合った世界を見つけた。もう、そっちには帰らねえ」

青い月を見上げながら元の世界の親父に告げる、その声は決して親父に届く事は無いけど、俺は向うの世界に最後の別れを告げた。

さて、明日はどうするかね・・・

## 一章1話 異世界（後書き）

キャラ設定とかあったほうが良いか？

無くて良い様ならこのまま行こうと思う。

## 一章2話 預言書

「でねでね！リョウお兄さん凄いの！」

嬉しそうに昼に会った少年のことを語る妹を微笑ましく見ながら考えます。

マテリアの元に現れた少年のことをリリカは好意的に見ているようですけど・・・

この城の地下に保管されている預言書に記されている言葉が私を不安にさせる。

預言書の内容は抽象的で全てを解読出来ている訳ではないのだけけれど読み解けた内容には・・・

黄金の魔法国 消魔の姫君 魅魔の紅月 紅の魔王 九国の破壊

と、これらを繋ぎ合わせ研究者たちは次の一節を読み上げた。

黄金の魔法国に消魔の姫君生まれし後、紅の魔王が現れ九国を破壊する・・・

魅魔の紅月はこの一節に含まれていないが、おそらく時期ではないかと予測されています。そして昨夜は丁度、魅魔の紅月が夜空に浮かんでいました。

黄金の魔法国はこの国ゴールド王国のことを指し・・・

消魔の姫君は生まれつき魔力を消し去る体質の私のもう1人の妹、

マテリアのことを指す・・・

九国は、大きく分けると丁度九つの国が存在するこの大陸、ナインティリアを指すと思われる。

リリカの語る、魔力の使えない空間で凄まじい力を発揮した少年が、紅の魔王だとしたら・・・

この大陸は今危機に瀕しているのではないのでしょうか？

「マナお姉様！どうしたの？アタシの話聞いてくれてる？」

少し考えに浸り過ぎてリリカの機嫌を損ねてしまったようです。

「ごめんなさい、それで？その少年はしばらくマテリアの所に居るのね？」

「うん！リョウお兄さん、色々見ながら旅してるんだって言ったの」

そうですか、何か引っ掛かるものが有りますけど・・・

一度その少年に会って見る必要が有りそうですね。

さて、子供のリリカならともかく・・・私の立場では簡単にマテリアの所まで行く訳にもいきませんし・・・どうしましょう、仕方ありませんね、少し策を練りましょうか・・・

「ふぁ、眠みい・・・」

昨晚、遅くまで屋根の上で夜景を楽しんでいたのが不味かった。元々夜には強いから油断してたな、環境が変わったおかげで疲れが溜まっていることに気付かなかった。

朝日を浴びて気だるい体を引きずりながら食堂へ向かう、リアが食事が出来るように話を通してくれているらしい。

「あ、おはようございます。マテリアさんから話は聞いてますよ、少し待っててくださいね、今用意しますから」

「よお、あんた昨日の・・・」

食堂に行くと厨房から、昨日賄をくれたあの包丁捌きの凄い奴が顔を出した。

「あ、ボクはウリンって言います、まだ見習い料理人ですけど、とりあえず食事のことは僕に言ってください」

「ああ、俺は涼一だリョウウでいい。とりあえず朝食を頼む」

「はい、少し待っててください」

ふむ、出て来た朝食は、パン（普通のロールパンだな）、ポタージュスープ（赤い、何の野菜か分かんねえ）、多分豚では無い何かの肉の腸詰め（ソーセージだな）、緑色の野菜のソテー（スープと同じく何の野菜か分かんねえ）、ゆで卵（でかい、何の卵だ？）、と

見た感じ洋風の普通の朝食だな・・・この世界米って無いのかな？  
まあ、後で調べたらいいか。

「いただきます」

・  
・  
・  
・  
・

「ごちそうさま、普通に旨かったな・・・  
さて、この世界のことを調べるにしても何処から手を付けりゃ良いかな？」

食事を終えお茶（緑茶っぽい味だ）を飲みながら考える、城か街に  
図書館みたいのが有るかな？あ、でもこの世界の文字って読めない  
んじゃないのか？となると文字から覚ええないといけないのか、めん  
どくせえ、誰かに聞くか？

「おい・・・」

・・・あゝ俺の知りたいことってこの世界じゃ一般常識ってレベル  
だしなあ、変に思われるんじゃないか？説明するのも面倒だし、お  
もいつきり田舎の出身ってことにして文字から教わるか、んで、後  
は本とかで調べりゃ良いだろ。

「おい！」



よし、それで行こう、俺は田舎者ゝ文字も一般常識も知らない超田舎者ゝって設定で行きやなんとかなるだろ。

「おい！聞こえないのか！？無視するなよ！」

問題は誰に教わるかだよな、リリカは・・・年下に教わるのは間抜けすぎるだろ。じゃあウリンはどうだ？頼めば教えてくれそうだけど・・・見習い料理人って言ってたよな、仕事の邪魔しちゃうかあ。

「ああもう！頼むから無視しないでくれ！」

「んだよ、さっきから五月蠅えなもうちょっと落ち着きを持ってって両親に言われなかったか？」

「余計なお世話だ！ってか聞こえてるならさっさと返事しろ！」

「なんで？」

「なんでって、用が有るから声かけてんだろ！」

「お前の都合なんか知るか」

「お前だろ？昨日訓練所で暴れた奴って」

いや、暴れた覚えは無いんだがな、誰も怪我させてねえし、あれを暴れたって言われるのは心外だ、ほんとに暴れるならこの離宮ぐらいぶっ潰すぞ。あゝ、面倒だ、とりあえず殴るか・・・

「オレと勝負しろ！」

不穏なことを考えてるうちに話が進んでいたようだ。で？なに、勝負？

「いいだろう、表に出ろ・・・」

俺は出ないけど・・・アホな兵士を見送りお茶を飲む、はあく落ち着く・・・

「いや！お前も来いよ！」

ちっ、戻って来やがった。

「お前と試合って何の得が・・・いや・・・」

あ、そうだ、こいつで良いや。

「よし分かった、でも勝負って言うからには何か賭けようぜ」

「む、ま、まあいいだろう」

「んじゃ、一度だけ負けた方が勝った方の命令に従うってので良いか？」

「面白い、絶対勝つからな！」

「ふっ、全裸で女湯に突っ込ませてやる」

「な！そういうのは無しだろ！」

「ふふふふふふふふふ」

「え〜〜〜」

とりあえず訓練所に移動する、訓練中の兵士が何人かいたけど試合の内容を聞くと皆場所を譲ってくれた。中には賭けを始めている奴もいる・・・なにになに、オレ2・8倍アホの兵士1・6倍・・・え！？俺こいつより弱いと思われてるの？うわぁ、心外だ、目に物を見せてやる・・・

「えっと、何やってるの？」

ん？リアか、今日は初めて会うな、剣を持って軽鎧を着込んで額に少し汗が浮かんでいる、リアも訓練中だったのか？

「あゝなんか勝負を挑まれた。それはそうとリア、金貸してくれ有るだけ全部」

「なに？賭けまで始まってるのは？」

「そう、だから俺に全額賭けてくれ今なら倍にしてやるぞ」

少々渋っていたが俺に賭けさせることに成功する、リアがかけに参加したことに周りの兵士が戸惑っていたり、賭けたのが俺ってことに俺の対戦相手のアホの兵士（まだ名前聞いて無い）がショックを受けていたりするが、気にしないでおこう。

「おら、さっさと始めてさっさと終わらせようぜ」

俺たちは観客から離れ対峙する、開始の合図は無い、今この時、すでに試合は始まっているのだ。

相手は右手にロングソード、左手にショートソードと長さの違う剣による二刀流だった。

相手の動くのに合わせて俺も駆け出した。3倍ぐらいの速さで・・・

「な!?!どこだ!?!」

おいおい、付いて来れなかったのか?

「後ろ・・・」

「!?!」

声に反応して咄嗟に振り上げたショートソードで俺の拳を防ぐ、あ、当然俺の拳は鉄血で強化、硬化、しているので剣で傷付くことは無い。

・・・メンドクサクナッテキタ

よし、殴ろう防御されても関係ない、とにかく殴る。

「次で終わる」

「む、来るか! (やべ、速過ぎて見えなかったぞ)」

速度はさっきよりゆっくり、代わりに力を込める、俺の拳は真っ直ぐに顔面を狙い突き進む、剣を交差させて防ごうとしたみたいだが

関係ない、防御ごとふっ飛ばしてやった。

数十メートル飛び壁に背中を打ちつけ気絶するのを確認した。

よし、俺の勝ちだ。

「うおお！ すごい！ ぶっ飛んだぞ！」

「何だアイツ、途中速過ぎて見えなかったぞ！」

「ふむ、あいつ何者だ？」

観客達の歓声が響く、うん、五月蠅え。

とりあえずリアに賭けの勝ち分を貰い、ぶっ飛ばした兵士を拾いに行く、こいつにも賭けの清算して貰わないとな。加減はしていたので直ぐに目を覚ます筈だ、気付けに一発殴る。

「ぶぽっ！！ ごほっごほ！」

「目え覚めたか？」

「ぐ！ あ、オレ・・・負けたのか？」

悔しそうにしてるけど、そこに追い討ちをかける。俗に言ういい笑顔で・・・

「さて、負けた方が勝った方の命令に従うんだったよな？」

ぷるぷる・・・がたがたがた

一気に青ざめ不安に顔を歪めた、少し震えてもいる、さっき全裸で女湯に突っ込ませてやるって言ったのが効いてるのか？

「な、何させる気だ!？」

「ふふふふふ……」

ぶるぶるぶるぶる

ちよつと遊んでみたら面白いように怯える怯える、まあこれくらいで許してやるか。

「冗談だ、冗談、変なことは頼まねえよ……」

賭けの代償に後日この世界の文字を教わる約束を取り付けた。文字を知らないことを少し怪しまれたが、さっき決めたもの凄い田舎者設定で押し切った。あ、どこの出身だとか聞かれたら答えられなかったな。

まあいいか、さて、今の勝負の賭けでこの世界の金も手に入ったら明日は街にでも出かけてみるかなあ……

「報告します！城の西の森に、この辺りでは見かけない大型の魔物の死体が発見されました！」

「分かりました。直ぐに調査隊を編成して他に異変が無いか調べてください。編成はあなたに任せます」

「は！」

報告に来た騎士が部屋を出ると直ぐに別の騎士がやって来ました。

「どうぞ」

「はい、失礼します。マルス方面の駐屯兵が他国の兵団のものとと思われる野営の跡を見つけたとの報告が有りました」

「・・・では、そちらも詳しい調査をお願いします。それと警備の強化をお願いします」

「は！」

騎士が部屋を出るのを確認してやっと一息つくことが出来ました。

今日は朝からずっと仕事詰めです。

なにやら不穏な事もいくつか報告に上がっていて対応に追われています。

昨日はマテリアの所にきた少年に会う方法を考えよう思っていました。だがそんな余裕がありません。

「失礼します！」

「あ、はい、どうぞ」

また次の報告が上がって来たみたいです。

- ・ 少年のことも気になりますが今はまだ様子を見るとしましょうか・



### 一章3話 シルバーリーフの姫君

「うわぁーリヨウお兄さんこれ凄く油っぽいよー」

今俺は昨日の賭けの勝ち分を手には街に出ている、隣にはいつの間にか付いてきていたリリカが先程出店で買い与えた焼き鳥のようなもの（確実に鶏の肉以外だな）を頬張っている。

「おいおい、頬にタレが付いてるぞ」

「?」

焼き鳥のタレを頬に付けたまま首をかしげる、タレを拭ってやると再度焼き鳥を食べ始めた。

街に出てきたが、これといって目的が有るわけではない、まあ只の観光だな、適当に回って適当に帰るつもりだ。

始めはリアを誘ったのだがあまり離宮から出るのは良くないとか言っただけで断られた、仕方ないから1人で出かけたのだが、見ての通りいつの間にかリリカが付いて来ていた。

まあ、案内でもしてもらおう思い連れてきたがリリカも街にはあまり出たことが無いらしいので、当初の予定通り適当にぶらついていく。

「リヨウお兄さん！アレ何？」

いや、この世界のこと俺に聴かれても分からないぞ・・・

どれどれ？何かの屋台みたいだな、ってか祭りとかである射的屋じ

やないのか？

・・・ちよい待て、射的屋なら鉄砲のあるはずの場所にあるのは何だ？短い杖？デザインがもの凄く魔女っ娘の杖チックなんだが・・・そこ以外は射的屋と変わらないな、少し離れた場所に有る（多分）点数の書かれた的、隣に店のおっさんと景品と景品の引き換え点数の表かな。

「おっさん、これどうやるんだ？」

「ん？いらっしやい、やり方だが、この杖に魔力を送ると風の気弾が出る仕組でな、それで的を5回狙う、合計点に応じて景品がもらえるって訳だ」

ふーん、魔法が有るから文化も所々それ系に変化してるのかな？でもこれって魔力の無いやつは出来ないよな。

「だそうだ、やるか？」

俺は魔女っ娘の杖を持って射的、なんて羞恥プレイする気は無いのでリリカに振る。

「うん、やってみたい！」

おっさんに金を払いリリカが杖を構える。

「いくよー『シュート』」

ービシュンー

お、真ん中付近の中位の的の中心部を焼き払った・・・え？焼き払った？風の気弾が出る筈じゃなかったのか？今出たのって・・・雷光？焼かれた的も帯電してバチバチ音を鳴らしているし、杖が不良品か！？

「えへへ、リョウお兄さん当たったよ」

「お、おう」

あゝ気楽に考えてたけど魔法ってもしかしてヤバイ？俺、身体強化は出来るけど雷に撃たれて無事でいる自信無いぞ、もしかしてこの世界での俺の弱点って魔法か？

「どんどん行くの！『シュート』！」

おお、何故か雷が出るのは変わらないが次々と的を射抜いていく、うまいな俺は点数が読めないから今何点か分からないが・・・

「く、250点、やるじゃねえかお嬢ちゃん好きなものを1つ持って行きな」

どうやら高得点のようだ、ってか風の気弾が雷に変わってたことはスルーか？

リリカは景品の中に埋もれていた蒼い宝石の付いた首飾りを選んだ。  
ん？なんか今宝石が光ったような気がしたんだけど気のせいかな？

「えへへ、リョウお兄さんありがとう」

いや俺は何もしてないんだがな、まあいいリリカが笑顔になるのを見ると悪い気はしない。

「え？ ああああああ……」

は？ 何が起こった？ 今ものすごい勢いでリリカが拉致られた？

ってなぜ！？ とにかく追いかけよう！

幸い見失ってはいない、確かに凄い早業だったが俺の身体能力なら余裕で捕捉し追跡できる、脚に強化をかけ速攻で追いつく。

「おらあ！」

拉致犯にドロップキックを喰らわせる、衝撃で拉致犯はぶっ飛びリリカが空に投げ出されたところをキャッチする。

「大丈夫か？」

「は、はい、ビックリしたの……」

無事なようだ、さて犯人はと……あれ？ ここって……  
拉致犯を追っているうちに裏路地のかなり治安の悪い所まで来てしまったようだ、周りから良くない感じの視線を多数感じる。

「くそ！ てめえは大人しく姫さんを渡しやがれ！」

姫さん？ 誰だそれは？ って、ここには俺とリリカだけ……俺は姫さんじゃ無い（男だしな）、てことは……

「えーっと、リリカ？お前ってこの国の姫なのか？」

「ん？そう言えば言っていないの」

わぁお、ってことは姉のリアも姫か！？何で一国の姫が護衛も連れず知り合って間もない男と街に出かける！？（↑リリカ）何で離宮で兵士に混じって訓練してんだ！？（↑リア）

考えるのは後だ、今の拉致犯の声で周りから感じていた視線の元が姿を見せる、間違いなく拉致犯の仲間だな。

「お前らは真昼間から何やってんだよ・・・」

真昼間っから犯罪行為を働く駄目な大人達に呆れる、リリカを庇うように立ちこれからどうするか思考する。

相手は見える範囲で6人、手にはナイフ、もしくは短剣、たいした脅威ではない、だが気配でまだ何人か潜んでいるのが分かる、もと来た道に戻るのがいいと思うが、すでに6人中2人に塞がれている。まあぶっ飛ばせばいいだけだな。

面倒だ・・・逃げよう、元の世界の時みたいに二度と逆らえないように恐怖を植えつける必要も無いわけだしな。

そう決めた俺は直ぐにリリカを背負う

「よし、リリカしっかり？まってる」

「お姫様抱っこがいいの」

「我慢しろ」

リリカ、お前周りを囲まれてるのに余裕過ぎるだろ・・・

まあ、余裕なだけだな。

リリカがしつかり？まるのを確認すると、俺は脚に強化をかける。

俺たちの動きに焦って近付いて来た犯人がいたが無視して地を蹴り駆け出す、上に、そして壁を駆けて建物の屋根の上に出た。

「さて、面倒ごとにも巻き込まれたし一旦帰るか？」

「むう、仕方ないの・・・」

「不満そうだな、城まではこのまま背負って行ってやるから機嫌直せ、ちょっとしたジェットコースター気分を味わわせてやるぞ」

「ジェットコースター？」

そうか、まあこっちの世界には無いよな。

「口は閉じてろ、舌嚙むぞ」

屋根を蹴る、速度はそれなりに出して屋根の上を飛び回り、あっという間に城まで戻ってきた。

「さて、城まで送った方が良いのか？」

「うん！」

城門をくぐってからは、まあリリカを背負ったままだが、ゆっくり歩く。

城に着くまでにこのことを聞いたんだが最初に聞いておくべきことだったな。

この城はシルバーリーフ城、この名前だけでも聞いておけばリリカたちが王族だと気付けただろう、この城と城下町を合わせて王都シルバーリーフ、ナインティリア大陸に存在する九つの国のひとつらしい。

魔法王国として発展していて王族は強い魔力を持つんだとか、俺ってまだ魔法らしい魔法見てないな、さっきのリリカの射的は兎戯に等しいものだろうし・・・

「あら？リリカどうしたの？」

リリカに言われるまま城の中を歩き、奥へ奥へと進んでいたらリリカと同じ銀髪を、腰の辺りまで長く伸ばした女性が声をかけて来た。

珍しいものを目にしました。私やマテリアには甘えることの良く有る妹のリリカですが、他のものにはなかなか心を許しません、そんな妹が男の子に背負われ楽しそうにしています。

そんな珍しい光景に私は思わず声をかけていました。

「マナお姉様、ただいまなの」

ただいまって、この娘また無断で城を抜け出したのかしら？

「また城を抜け出したの？行くなとは言いませんが、ちゃんと護衛を付けて私に報告してから行きなさい」

「リョウお兄さんがいたから大丈夫なの！」

あら？そういえばリリカを背負っている男の子、私たちと同じ銀髪でリリカが話してくれたマテリアの所へ来た少年の特徴と一致している、と言うことはこの子が、リョウイチ アカヤなのね。

どうやって会おうかと思っていたけれどこんな形で会えるなんて、今は時間も有るし好都合ですね。

「そう、貴方がリリカを護ってくれたのですね」

「いや、俺は一発かまして逃げただけだしな」

あら？只一緒に街を廻っていただけかと思ってましたが、実際にリリカを護ってもらわなくてはいけないことが起こっていたみたいですね。

「いえ、ありがとうございます。」

そうだ、時間の方がよろしければこれから一緒にお茶でもいかがですか？」

「リョウお兄さん一緒にお茶しましょう！」

少しでもリョウイチさんのことを探ろうと思い誘ったのですがリリ



カが凄く喜んでくれています。

思わず頬が緩んできますが、いけませんね、私もマテリアもリリカには甘くなってしまう所があります。今はリョウイチさんのことをしっかりと調べなくてはいいけません。

「あゝそうだな、街もあんまり見て回れなかったし時間が余ってるんだ、ご馳走にならせて貰おうかな」

「それでは準備させますね」

マナお姉様、ってことはコイツも姫か・・・メイドを呼びお茶の準備を言いつけた後俺たちを先導して歩く女性をぼーっと眺めながら歩く、てかりリカ、そろそろ降りようか？

「むゝ」

未だに俺の背に乗っていたリリカを下ろす、何か不満そうにしていたが気にしないでおう。

案内されたのは城の中部にある庭園のような場所、旨く外から光を取り入れる造りになっているらしく花や木が元気に咲いている。

元々設置されているらしいテーブルにはメイドさんによるお茶の準備が整えられていた。

クッキーっぱいお茶菓子が有るがこれはクッキーか？

椅子に着きメイドさんによってお茶がカップに注がれる、  
俺たち全員の分を終えるとメイドさんは庭園を出て行った。

「ふふ、じゃあ遠慮無く召し上がってください」

「ああ、どうも」

「いただきます」

お、このクッキー、サクサクで甘すぎない、なかなか旨いな・・・

「リリカがお世話になったようですね、改めてお礼を言わせてください」

「別に気にするほどのことじゃ無い、えっと、あんたはリリカの姉なんだよな？ だったらあんたもこの国の姫か？」

「はい、私はマナ、マナ シルバーリーフです。リリカの姉でこの国の姫ですね」

「ほ」

だからどうだって訳じゃないんだけどな・・・

「私からいくつか聞いてもよろしいですか？ 貴方のことはリリカから聞いて気になっていたんですよ」

どんな話を聞いたか知らないがたいした事は答えられないぞ、基本異世界から来た事を話す気は無いし吸血鬼のハーフであることも言う気は無い。

マナの質問に当たり障りの無い程度で答えておくことにする。

「そうだ、俺からも聞いていいか？」

「あ、はい、こちらから聞いてばかりもなんですよ」

「あいつ、リア、マテリアもお前達と同じ姫なんだよな？」

「・・・・・・・・・・」

黙っちまったよ、聞いたら不味かったか？

「貴方はリリカがマテリアと話している所を聞いたのですね……  
私たちにも事情が有るのです、世間的には第一王女が私、第二王女がリリカという事になっています。」

あの子、マテリアは私たちとは関係ない人間としてこの城にいます。そのことを知っているのも城のごく限られた人間だけです。貴方にもこのことは黙っていてもraitたいのですが……」

「あゝはいはい、暴力で解決できない厄介ごととはごめんだ、悪かったな言いにくいこと聞いて」

「いえ、下手に知られるより理解して黙っていてもらう方が良いですから、秘密にしていってくれますよね？」

「お、おう」

マナ、顔は笑顔なんだけど、今背筋に悪寒が走ったぞ、本能的に恐怖を感じるなんてコイツやるなあ・・・

「あ、悪いそろそろ行く」

「リョウお兄さん行っちゃうの？」

「ああ、ちょい用事が有るの思い出した」

そういえば街に行ったのも約束の時間までの暇潰しだったんだよな、マナと話し込んですっかり時間が経っちゃったが急がないと遅れるぞ。

「急ぐから、マナ、リリカ、またな」

俺は返事を待たずに窓から外へ出た。ここ3階位の高さだが強化をかければ大丈夫急ごう、

時間に遅れて文字を教われなくなるのも困るからな・・・

## 一章4話 マテリア

―ダン―

勢い良くソルダの部屋のドアを開ける、あ、ノック忘れた。

まあいい、約束の時間に遅れそうで焦っていたんだ、だからその辺は許してくれ。

ソルダ グラージュ、勝負の後エルリオールの基本的な文字を教わる約束を取り付けるときに聞いた、この部屋の主の名だ。

で、そのソルダは突然入ってきた俺に驚いている、いや、時間だし来るって分かってただろ？

「さあ！文字を教えろ！」

「開口一番に言う言葉がそれか！？妙に偉そうだな！それとノックぐらいしろよ！」

「ならやっぱり裸踊り・・・」

「あああ！もう！オレが悪かった！文字を教えればいいんだな！とりあえず書庫の方へ行こうぜ！」

おお、焦る焦る、先に部屋を出たソルダを追って行き離宮の書庫までやって来た、やっぱりちゃんと書庫有るんだな、規模は小さいと思うけど。

「で？どこから教えればいいんだ？」

「どこって、最初からに決まってるだろ、はっはっは」

異世界人なめるなよ、基本すら知らねえっての。

しばらくソルダに文字を教わるけど俺勉強苦手だった（学校での成績は普通だと思ってる）。

「えっと、・・・角？・・・が大きい？・・・魚？」

「いや、それはそう読んじゃ意味が変わってくるだろ」

これは今日だけじゃちゃんと覚えられないな・・・

「あゝ悪い、オレそろそろ訓練に戻らないと」

しばらくするとソルダが訓練に行くと言うので文字の勉強は終わりになった。

今の状況、なんとか簡単な文字が読めるくらい（思い出しなからなので時間が掛かる）、書くのはほぼ無理、自分の名前だけは書けるようにした。まあこんなもんか・・・

後日また教わる約束を取り付け、暇なので訓練に付き合ってやることにした。

「うわ、くそ！何だよその速さ！」

「これでもかなり力を抑えてるんだけどな（強化使ってないし）」

ソルダは両手に剣を俺は一応手甲を借りている。

しばらくソルダに合わせて撃ち合っているんだけど、こいつ段々動きが良くなって来てるな。ちょい（テンポを）上げてみるか。

・  
しばらく経つとまた動きが良くなって来た・・・もう少し上げる・・・

また動きが良くなって来た・・・また少し上げる・・・

動きが良くなって来た・・・また少し上げる・・・

動きが良くなって来た・・・上げる・・・

何回繰り返しただろうか？

訓練の前と後で見違えるように動きが良くなった。

「だくそ！全然刃がたたねえ！」

だがソルダは気付いていないようだ、黙っとう・・・

「リョウ、今の・・・」

ソルダと別れ食堂に向かおうとしたら後から声をかけられた。

「リアか、お前も居たんだな」

「ええ、それより今の訓練、私にもしてくれない？」

「ん？俺らはただ手合わせしてただけだぞ」

「彼には気付かれないように動きを段々早くして行っただけでしょう？訓練の前と後では彼の動き全然違うわよ、リョウが彼にの少し上ぐらいの力で相手が続けたからでしょ？実力の少し上の相手との試合はいい訓練になるんだと思うわ」

「良く見てるな・・・まあ、別にちょっと手合わせするのはいいんだけど、また今度で良いだろ？長時間動いてたから腹減っちゃまってな」

「分かった、でも約束よ」

「ああ、でも姫さんが強くなる必要があるのか？」

「え？ちょっと、何で私のそれ知ってるの？！」

あ、しまった。思ったことそのまま言ってた。マナに秘密にしとくと言われてたんだけど・・・まあ本人相手だしいいか。

「あゝ、気にすんな、まあ別に噂にして広める気も無いから安心し



ろ。

てか、リリカがお姉様とか言ってる時点で他の連中にもばれてないか？」

「それは無いわ、あの子気に入った年上の人は大抵お兄さんかお姉様なもの、リリカが私をお姉様って呼んでもほんとの姉妹と思われることは無いわ」

ああ、俺のこともリョウお兄さんって呼んでるな、てことは俺気に入られたのか？まあどっちでもいいけど・・・

「で、話を戻す、リアが強くなる必要が有るのか？」

「・・・有るわよ、隠されてるって言っても私も一応この第二王女だから、私のことを知ってる一部の人間の中には私が邪魔だって奴もいるのよ。ここは魔法の盛んな魔法王国だけど、私は魔法が使えないから他の方法で身を守らなきゃいけないのよ」

「・・・まあ、面倒くさい事情が有るんだろうぐらいに思っとくか。」

「いくら武を鍛えても魔法に勝てると思えないんだけどなあ・・・俺なんて今魔法使いと殺し合うのはスゲー嫌だから・・・まあ魔法を使われる前に潰す気ではいるけど・・・」

「魔法は大丈夫、私が王女で有ることを認められていない理由が有るから・・・」

「魔法王国の王女なのに魔法が使えないからか？」

今の話から予測するとそんなトコだろう？

「魔法それが使えないだけだったら良かったんだけどね、私は生まれつき周囲の魔力を無差別に消す体質なの、だからこの離宮内では魔法が使えない、当然魔法で私を攻撃しようとしても魔力が消されてるから魔法自体が使えない、私を殺そうと思うなら魔法以外の方法じゃないと駄目なの」

魔法王国、その王女なのに自分たちの天敵、それで居ない事にされてんのか・・・

なぜか腹が立った、リアを王女と認めない奴も、リアを邪魔だとか言って狙う奴も、集めてぶっ飛ばしたくなって来た。

「まずはリアを鍛えるか・・・ふっふっふっ」

その内、城に乗り込んでやろう、バカ共の慌てる様が目に浮かぶぜ、はっはっはっは！

その後の俺・・・

朝適当な時間に目覚める、飯（朝はウリンが作っている訳ではないらしい）、書庫へGO（ソルダの都合がよければ文字を教わる）色々調べてこの世界エルリオールのことを知る。

昼、飯（基本ウリン作、やっぱり切るだけの物が多い、今度指摘してやろう）、訓練（ソルダカリアに付き合う）もしくはリリカの遊び相手を務める。

夜、何故か夜のほうが調子が良い（血か？）、けどやることも無い上に離宮は魔法の明かりが使えない為火による明かりしかない、現代人にはあれな環境だ、さっさと寝る。

こんな感じだ。

文字の習得もそこそこ終わり、この辺の事も色々調べた。

• せっかく異世界に來たんだしそろそろ魔物とかと戦<sup>や</sup>ってみたいな・・

• どれくらい俺の力が通用するか試しておかないと後で困るもんな・・

•

シルバーリーフ城の一室、暗い室内で人目を避けるように、フードを目深に被ったローブ姿の男と私は話し合っ居た。

「確認した、本当にメガロスアルクがやられた様だな」

「くそ！あの女はどこまで厄介なんだ！」

何なんだ！あの女は！まさかあの女がメガロスアルクを倒したと言  
うのか！馬鹿な！あの女がそれ程の力を持っているはずが無い！い  
ったいどうなってる！

「落ち着け・・・次の魔物を用意した」

立てた計画が失敗に終わり興奮する私をフードの男が冷静に宥める。  
この協力者の男は次の魔物を用意したと言うが・・・

「く！だがどうやってあの女にぶつける？あれ以来、警戒してか夜  
の森には出かけていないようだぞ」

「ふ、次の魔物に城壁など関係ない、数も用意した。  
仕掛けるなら何時でも出来る、時期は貴方に任せよう」

「ふむ、わかった」

フードの男は話は終わったと部屋の隅に移動し影に紛れる様に姿を  
消した。

「こうやって態々支援してるんだ、次は成功させてくれよ」

フードの男は最後に一言だけ残していった。

「ふん、分かってる！」

リヨウが来た日森の中であつた魔物はこの辺りに生息しない凶暴な魔物、私の夜の散歩を知って誰かが放つたのかもしれないと考えた、だから最近の私は夜の散歩を自重している。

離宮で半監禁状態の私にとって夜の散歩はいい息抜きになっていたんだけど・・・

仕方ないので今私は離宮の屋根に上った。

数日前、離宮の屋根に上ったあの時はリヨウに抱えられて一飛びで上ったけど、私にそんな身体能力は無いた為梯子を使う。

「あれ？」

屋根の上には先客が居た、まあ梯子も無しに屋根の上に上れる人物は私は1人しか知らない。

「ん？リアか？どうした？お前も暇潰しか？」

私が王女だと知っても変わらない態度、私に事情が有ると分かっても大して気にして無い変な人、でもその身体能力は常人を逸している。

「まあ、そんなところよ」

最近は訓練に付き合ってもらっているけど、自分が強くなっているのかよく分からない。いくらやってもリヨウは私に合わせて来る、回りは動きが良くなって来ると言ってくれるけどやはり実感が無い。

「なあリア、お前今のままでも良いと思ってるか？」

「え？」

なになが・・・

「このままここに閉じ込められたままで良いのか？って意味だ」

それはお父さ・・・このゴールド王国の王が決めたこと、私にはどうすることも出来な・・・

「いや、何もかも無視してここを勝手に出て行くことも出来るだろ？」

「みんな無視すればね、でも私の体質話したでしょ？私は周りの魔力を消すの、私の行く所行く所魔法が使えなくなるんだよ、皆に迷惑かけるくらいならここで大人しくしている方が良いかな・・・」

「ふん」

ふんって、聞いてきたのにあんまり興味なさそうね。

「リヨウはいつまでここに居るの？」

「ん？そろそろ出て行ったほうが良いか？文字もだいたい覚えたい調べたいことも適当に調べたからいつ旅に出てもいいんだけど・・・」

「あ！違うよ！出て行けとか言ってる訳じゃないの！ただいつまでここに居てくれるのかなって・・・」

リリカも懐いてるみたいだし私とも気兼ねなく接してくれる、でき

れはずっとここに居てほしいくらいなんだけど・・・

「まあ、まだどこに行くか決めてないしな・・・毎日楽しめればどこに居てもいいんだけど、ちよつと魔物とは戦ってみたいな、俺の力がどこまで通じるか試しておきたいんだよなあ」

試しておきたいって？魔物と戦ったことが無いの？じゃあどうやってシルバリーフ<sup>（こゝろ）</sup>まで来たのかしら？

まあ、リヨウはまだしばらくはここに居てくれるみたいだし良いか・  
・

## 一章5話 なんとなく魔物討伐？

「以前見つけた大型の魔物の死体はメガロスアルクで間違いないようです」

「そう、やはりこの辺りには生息しない魔物ですね、誰かが連れてきたのでしょうか？」

「分かりませんが、編成した調査隊の報告で、大型の鳥の魔物の巣と思わしき物を発見したと報告にありました。その場合は巣を破壊するだけで留まり魔物自体との遭遇は無かったようですが、早急に手を打つ必要が有ると思われます」

「大型の鳥の魔物も月詠つくよみの森には生息しない魔物ですね、同じ時期に生息しない筈の魔物が二種も発見される・・・良くない傾向ですね、早急に対策を練りましょう」

シルバリーフ城の城壁を東へ抜けて直ぐ広がる森を、月詠の森と言います。そこに、以前報告にあったメガロスアルクに加え大型の鳥の魔物・・・最近の隣国の動向も気になりますし、注意しないといけませんね・・・

---

---

暇を持て余し街に出た俺は、街の東の森の方から黒い魔物が出て来て子供が襲われたと聞いて、森の中に単身で乗り込んだ。



子供のことはどうでも良かったが黒い魔物を腕試しの相手にすることに決めた。

「キャウン！！」

飛び掛ってくる犬を避け際に横腹に拳を叩き込む、面白いように吹き飛び木の幹に叩き付けられ動かなくなる。

額に角の生えた青い犬（ホーンドックと言う魔物らしい）、始めに遭遇したのは1匹だったが、様子を見てるうちに仲間を呼ばれたため増えて全部で8匹で襲い掛かって来たが、今ので残り3匹・・・

ぬるいな、まあどこにでも居るような魔物らしいし仕方ないか・・・

うーん、こいつ等じゃ全然腕試しにならないなあ、早く問題の黒い奴を見つけないとなあ・・・

残りの3匹も殴り飛ばして更に森の奥に進むことにした。

この森に居る魔物は然程強くないみたいだな、

トカゲが巨大化したような奴、猪と狼が合わさったような奴、それらは出会って直ぐ殴り飛ばした（また仲間を呼ぶような奴なら厄介だからな）。

芋虫みたいな奴（でかさが一抱えくらい有る）に遭遇した時はさすがに殴りたくなかったから、落ちてた石を全力投球してみた、そして四散しやがった（案の定紫色の変な液体を飛び散らせながら、殴らなくて良かった）。

「・・・ここどこだ？」

やべえ、俺迷ったか？調子に乗ってどんどん進みすぎたな、今居る場所がどの辺か分かんねえ。

で、そんな時に限って問題の黒い奴に会うしな・・・

そいつは、まあ一言で言えばゴーレムだった。全体的に黒い岩で出来た人形、大きさは俺と同じくらいだが手足がやけにでかい、こんなのも居るんだなあ。

「い？」

あ、気付かれた。

「よお」

挨拶している場合じゃないな、さて硬そうだし強化して鉄血アイアンブラッドで拳キョウカを硬化キョウカっと・・・

「いっ」

ん？手を振って挨拶を返して来た？それに敵意をまったく感じないぞ・・・

強化は解かずにちょっと様子を見るか？

「えっと、俺の言ってること分かるか？」

「いっ」

力強く肯く黒ゴーレム・・・まじか？

「えっと、シルバーリーフの街で子供に怪我させたのってお前か？」

「ご〜」

しよんぼりと肯く黒ゴーレム、認めたな・・・でも凄く申し訳なさそうだ。

「ふむ、態とじゃなかったとか？」

「ぐ〜」

当たりっぽい反応を返して来た。

え〜、面倒くせえ、ぶっ飛ばして終わりだと思ってたんだけどなあ・・・

こんな森の奥に居るのもそれか？まあ、反省してるみたいだし良いか、ほっところ。

「うん、じゃあ、まあいいや、俺もう帰るから今後は気い付けろよ」

「ご〜」

手を振って別れを告げる普通に見送られた。

さて、どうやって帰ろうかな、道は分かんねえけど少し跳べば城の方向は分かるし、適当に行くか。

―ドシドシドシ―

ん？足音？

「ぎっ！」

あるゝひゝ　もりのなかゝ　ゴゝレムさんにゝ　であゝたゝ

じゃなくて！黒ゴーレム付いて来たな。

「どうした？」

「ぎっ！ぎっ！ぎっ！ぎっ！」

身振り手振りで何か伝えようとしている、んゝ？

「森の出口まで送ってくれるのか？」

「ぎっ！」

・・・こいつ良い奴だ、こういう奴は嫌いじゃない。

「ぎっ！」

森の出口まで送ってもらい、大きく手を振り見送ってくれる黒ゴーレムに手を振り返し別れを告げる。

「さて、ちょっと調べてみるか・・・」

俺はそのまま黒ゴーレムの噂を聞いた辺りに戻ることにした。

とりあえず噂話をしている人が居ないか確認・・・居た、近付いて話を聞く。

「ああ、森の近くで遊んでた子供が怪我したらしいな・・・」

「その子供の親が偶然通りかかって、森に逃げて行く黒い魔物を見たって話だぜ・・・」

「その子供、今はどうしてるんだ？」

噂話をしていた二人の男性に声をかける。

「ん？ああ、怪我は大した事無いつて話だから、今頃普通に遊んでるんじゃないか？」

「ふーん、その子の親ってどんな人だ？」

「父親は城勤めの騎士だよ真面目で正義感の強い人だ、今は遠征で他の地に行ってるけどな。」

母親は一言で言えば優しい人だよ、ちょっと心配性なトコが有るみたいだけどな」

ふむ、あの黒ゴーレムなら故意に人を傷付けることも無いだろう、なら子供が怪我したのは事故ってこと・・・怪我也大した事無いみたいだし、母親が心配しすぎて話が大きくなったってトコか？

「うん、だいたい想像できた、ありがとう」

「ん？おう、じゃあな！」

さて、どうするかなあ、正直面倒になってきたし帰るか？黒ゴーレムも森で静かに暮らしてりゃいいだろ・・・

ん？何だ？さっき俺が戻ってきた森の入り口辺りに人が集まってるな、ちよつと行ってみるか・・・

「では、お願いします」

「おう、俺らに任せときな！」

俺が着いたところで丁度話が終わったらしく女性1人を残して、他の武装した者は皆森の中へ入っていった。

「何かあったのか？」

まあ、しょうがないので残った女性に聞いてみる。

「あら？貴方も冒険者？ならうちの子を襲った魔物の討伐を手伝ってきてくれないかしら？」

ああ、こいつが怪我した子供の母親か、黒ゴーレムの討伐に冒険者を雇ったのか？

女性に適当に受け答えして森に再び入る、さて、黒ゴーレムのところに先回りできるかな？

しばらく進むと前方に子供の後姿を見つけた。なんで森に子供が居るんだ？死にたいのか？まあ、異世界の子供だし実は凄く強いのかもしれないが・・・見たところ何の武装もしていないな。

「おい」

「うわああああ！！」

普通に近付いて（背後から）声をかけたただけなのに凄く驚かれた。

「ああ？おあ？・・・あ、あんた冒険者か！？」

「違う」

きっぱりと否定して子供の横を通り過ぎる。声をかけておきながら素通りって、俺も対外だな・・・

「え？あ、ちょっと待ってよ！」

「断る！俺は急いでるんだ！」

「くっ！」

子供は慌てて俺を追い抜き、俺の前に立ち塞がる。

「なんじ、たけるしゃくねつの赤  
わが手につどいし炎は矢となり  
敵を・・・」

これは・・・魔法か?!

「つらぬけ・・・」

気付くのが遅れた、子供と俺の間に火の矢が数本現れ浮かんでいる。油断した、こんなガキでも魔法を使うのか・・・ちっ、そういえばリリカもやってたな・・・

この魔法にどれほどの威力が有るのか分からないが、火の矢なんて食らったら、いくら俺でも無事じゃ済まないのは一緒だ、直ぐに足に強化をかけ避ける準備をする。

「あんたをこれ以上クロの所へは進ませない! 諦めてさっさと帰れ!」

クロ? 何の事だ? 俺をこれ以上進ませたくないみたいだが・・・

「俺以外にも先に進んだ奴が何人か居るが、そいつらはいいのか?」

「な! ほんと!? 急いでクロを逃がさなきゃ!」

慌てて火の矢を消して森の奥へ駆けて行こうとする子供、後からその襟を掴み止める。

「ぐえ! ゴホゴホゴホ」

首が絞まった、当然か? 咳き込む子供。

「悪い大丈夫か?」



「いきなり何すんのさ！」

いやいきなり魔法で脅してきたお前に言われたくない。

「子供がうろつくのは危ないし、良く見たら怪我してるみたいだし、お前もう帰れよ」

さっき子供が手を翳した時に服の間から、腕に包帯を巻いているのが見えた。

「イヤだ！クロがやられる前に逃がさないと！」

「そうか、まあ勝手にしろ」

面倒なので放置することにした。俺だって急ぎの用事が有るんだ、こんなガキにいつまでも構ってられない、森の奥に駆けて行くガキを見送り、俺も黒ゴーレムを探して進む。

「ぐっ！！」

しばらく進むと聞き覚えの有る黒ゴーレムの声がした。

「向こうか！」

危機的な声だったので急いで声のした方へ向かう。

少し開けた場所でさっきの冒険者と黒ゴーレムが対峙していた。黒ゴーレムの身体に煤けた様な跡が有る、魔法か？既に戦闘が始まっている？

こっそり逃がすのは無しになったな、仕方ない、ちょっと暴れるか・

身体に強化をかける、アイアンブラッド鉄血で拳と脚を硬化。キョウカ

人数が多いけど基本の身体強化と防御強化の鉄血でいけるだろう、アイアンブラッドっと、ぐずぐずしてると黒ゴーレムが囲まれるな・・・

対峙する冒険者と黒ゴーレムの間に割り込む。

「「「な！」」」

「ぐ！」

突然割り込んだ俺に驚く両者、俺は冒険者達に向かい対峙する。

「あゝなんだ、おっさん等、とりあえず帰れ」

「邪魔するののか？悪いが俺等も仕事なんでね、そこを退いてもらおうか」

「まったく、いいじゃねえか、子供の怪我も大した事無かったんだろ？こいつも反省して森の奥で大人しくしてるんだ、依頼者には倒したって報告すればいいだろ？」

「そうはいかない、その魔物を倒すのが今回の依頼だし、嘘の報告をするのは信頼に関わる、それに、そいつが実際に子供を傷つけ

たことに変わりはない」

「うち、頭の固い事言いやがって、殺るか・・・いや、そうしても別の奴が来るか、なら黒ゴーレムを別の場所に逃がすしかないな。この近くからいなくなれば追っても来ないだろう。」

「はあ、面倒だけど・・・引かないってんなら仕方ない、俺と戦るか？」

「今日は魔物と戦って腕試しするつもりが・・・いつの間にか冒険者と戦うことになっているな。」

「まあ、冒険者相手にどこまで戦えるか試すのも悪く無いか・・・」

「黒ゴーレムにさっさと逃げようと言って俺は冒険者達と対峙する。」

「覚悟しろ、生半可な力じゃ俺の相手は務まら無えぞ」

## 一章6話 対冒険者達

「新たにこの辺りには生息しない魔物が発見されました。しかしどの文献にも載っていない魔物魔物のようで正体は不明、対峙した冒険者の話によると大人ぐらいの大きさの、岩で出来た人型の魔物だったと言うことです」

以前報告にあったメガロスアルクに加え大型の鳥の魔物、更に正体不明の岩の魔物、いったい何が起きているのでしょうか？

「それで、その魔物はどうなりました？」

「冒険者達が討伐を試みようとしたのですが、途中で邪魔が入り獲り逃がしたということです」

「邪魔？」

「はい、銀髪の男がやって来て魔物を逃がしてしまったようです。しかもその男、素手で冒険者6人を圧倒して見せたそうです」

銀髪の男・・・この辺りで銀髪と言えば私達シルバリーフの血筋以外はあまり見かけないんですけど・・・最近マテリアの所へ来た彼が銀髪でしたね、素手で冒険者達を圧倒する実力といい、まさか邪魔に入った男とは彼のことなのでしょう？魔物を庇い冒険者達に害を成す。預言書のこともありますし、彼には注意が必要ですね・

「くそ！コイツ速いぞ！補助魔法を！」

「はい！」

神秘の力よここに在れ

汝の流れを加速する・・・『クイックバースト』

魔法を使われたか、発動前に防ぐ気だったが、強化した俺でも一対多数じゃ手が回らないな・・・

まあ、本気でやって無いってのも有るけど・・・

冒険者の1人の動きが速くなった、そいつの相手をしている間に他の奴も魔法の補助を得て動きが速くなる、面倒だな。

大剣を手に攻撃してくる男1人、その左右に剣を持った男1人ずつ、大剣の奴の後ろに槍を持った女1人、更に後ろで魔法を使おうとしている男と女が1人ずつ・・・魔法使いか、こいつらから潰さないとな。

振り下ろされた大剣をギリギリのところで待ってから避け、地面に叩き付けられた剣を足場に男を飛び越える、その際横っ面に蹴りを入れ脳を揺さぶっておく、これでしばらく動けないだろう・・・魔法使いじゃないけど、まず1人。

両脇の、剣の2人が慌てて追いかけてくるけどそっちは無視する。槍の女が駆ける俺に槍を突き出す、動きは速いが見切れないほどじゃないので軽く回避する、連続してつきを放ってくるがそれら全て回避する。

「くっ！」

急に突きではなく槍を横薙ぎに払ってくる、まあ、見えてるから問題ない、槍を掴み女ごと背後の男2人に向け放り出す、女を受け止め2人の動きが止まっている間に詠唱を続ける魔法使い2人との距離を詰める。

魔法のことなんてさっぱりだが、なんとなく強化魔法を使っていた女を置いておいて、もう一人の男を先に狙う。

「『フレイムあ』ぼふアー！」

危なかったか？何か火が出かかってたな、魔法の完成するギリギリのところで男の腹に拳を叩き込み気絶させることに成功した。これで2人目。

「・・・『スピードルーズ』！」

ん！なんだ？身体が思うように動かない？動きを遅くする魔法か？

「はぁ！」

槍の女と剣の2人が追いついてきた、同時に振るわれた剣を強化した両腕でそれぞれ受ける。人と剣がぶつかった時にはありえない金属音が響き男たちは手を止める。

「ち、なんだこいつ！」

やっぱり魔法は厄介だな、まさか動きを遅くされると思わなかった

最初に鉄血で強化アイアンブラッド強化しておいて良かったな。

手の止まっている男たちを無視して女魔法使いに詰め寄り一撃で気絶させる。これで3人目、そして魔法使い排除完了。

お、魔法使いを気絶させたからか魔法の効果が切れたな、普通に動けるようになった。

「さて、これ以上やられると（気絶した奴を）運ぶのが大変になるんじゃないか？逃げるなら追わないぞ」

しばらく悩んだみたいだけど残った3人は気絶した奴等を1人ずつ背負い引き返していった。

「ふう、黒アイツゴーレムちゃんと逃げられたかな？」

あ、しまった・・・ここがどこか分かんねえや、まあいいか、適当に行こう。

「クロ〜〜〜!!」

「ゴ〜〜〜!!」

なんだ？この状況は？

さっき見かけたガキと黒ゴーレムが、感動の再会って感じで手を取り合いはしゃいでいる光景に出くわした。

何やってんだあいつら、2人とも嬉しそうにしてるから別にいいけど・・・

「ゴー!」

「うわぁ! な、なに! ?」

突然、黒ゴーレムがガキに覆いかぶさるように飛びかかった。

直後、黒ゴーレムの身体に黒い影が飛び掛り牙をむいた。

硬い岩の身体の為、黒ゴーレムに傷は無かったがガキに当たってたらやばかったんじゃないか?

「グルルウ・・・」

額に角が生えた犬だ、さっき倒した奴は青い毛並みだったが今回の黒い（黒に近い色ほど凶暴らしい）、こいつ確か仲間を呼ぶんだよな・・・

—ガサガサ—

近くの茂みが揺れる、強い殺気にその場を飛び退くと俺の立っていた場所に青と赤の犬（額に角が有る）が飛び掛っていた。

ちっ、もう仲間を呼んだ後か・・・



どうやら取り囲まれているらしい、ガキを守りながらの対処に黒ゴーレムが苦戦している、ガキたちの方へはいけそうなので合流しよう。

手当たり次第に魔物をぶっ飛ばしながらガキ達の所へたどり着く。

「ゴ！」

「よう、苦戦してるみたいじゃねえか、まあ、共闘と行こうや」

「ゴ〜！」

俺は黒ゴーレムの背中を護るように立つ・・・

「あ！さっきのおっさん！」

「はっはっは、ガキ！次ぎおっさんって言ったら潰すぞ」

ガキのお頭に手を置きかるゝく力を込める、おっさんって呼ぶのは辞めてほしい、さすがにそんな歳では無い。

「いだだだだあ！ごめんなさい！兄ちゃん！」

分かれればいい、さて、ふざけてる場合じゃないな、魔物がかなり増えたようだ。

リーダーと思われる黒い奴が1体、あ、黒い奴もう1匹居た。

残りは青と赤が10体ずつ位か・・・

「ゴー!!」

黒ゴーレムは攻撃が大振りだ、攻撃力は高いみたいだが、すばしっこい動きの犬の魔物にはなかなか当たらない、まあ当たった奴は一撃でぶっ飛ばされてるんだけどな・・・

防御も硬い、魔物の牙や爪をものともしないのでガキは黒ゴーレムに任せて俺は遊撃で魔物の数を減らすことにしよう。

数分後、魔物を殲滅して俺たちはやっと一息ついた。

「ありがとうクロ。兄ちゃんも、強え〜んだな!」

今回助けてやった為かガキが妙に馴れ馴れしい、まあ、どうでもいいが・・・

「ゴッ」

「ああ、無事でよかった」

「それにしても、黒のホーンドックなんて珍しいなく、兄ちゃん一匹貰っていい?」

倒した魔物の中の黒い毛並みの奴を見たガキが訊ねてくる、そんなもん貰ってどうするんだ?

「兄ちゃんどこの貴族だよ、ホーンドックの肉は食えるんだぞ、しかも毛並みが黒に近くなる方が旨いんだ、まあその分凶暴になって捕まえにくいんだけどな」

「そうなのか？なら俺も一匹は貰って帰ろうかな、いい土産になるだろ」

この後、ガキに冒険者達が黒ゴーレムを狙ってるから逃がさないといけないってことを話すと、ガキはそのことを知っていたらしい、話を聞くとどうやら怪我をした子供というのがこのガキのことらしい。

子供ってのは何とでも仲良くなるよな、仲良くなった黒ゴーレム（ガキがクロと名づけたらしい、黒いからクロ安直だな・・・）とガキが森の近くで遊んでいて偶々事故でガキが怪我したらしい。母親が冒険者に依頼をしている所を見て、クロを逃がす為に森に入ってきたそうだ。

クロを森の中でも城に近い場所に避難させる、城の近くはあまり人が近付かないらしい。

クロに別れを告げガキを街まで送り（道案内させたとも言う）、土産を担いで城に戻ることにした。

「あ、リヨウ、お帰り」

「リヨウさん？何処かへ出かけてたんですか？」

城、離宮に戻るとリアとウリンに出会った、丁度良い。

「おうただいま、ちょっと暇潰しにな、これ土産だ」

背中に担いでいたホーンドック（黒）をウリンに渡す。

「黒のホーンドックじゃないですか！？これどうしたんですか！？」

「普通に狩って来たんだが？旨いんだろこれ、調理方法は任せるから」

「はい！晩御飯で出しますね、楽しみにしててください！」

ホーンドック（黒）を受け取ったウリンは厨房へホーンドック（黒）を運んでいった。

「ホーンドックの肉か、私は食べたことないんだけど、冒険者達や旅人は手軽に調達出来る食料としてよく食べるらしいわね、黒のホーンドックは珍味（魔物だから）として変わり者の貴族なんかがたまに食べることが有るって聞いたこともあるけど・・・」

「普通に旨いらしいぞ、晩飯の時にリアも食ってみろよ」

「うん、そうさせてもらうわ」

その晩、俺達はホーンドックの肉に舌鼓を打つ、ああ、言うだけあってほんとに旨かった。

食後、俺は気分転換にまた離宮の屋根に上る、するとそこには先客が居た。

「リア、来てたのか」

「うん、なんとなく気晴らしに、前にリョウに連れて来てもらってからたまに來てるの」

「まあ、ここの空気は悪くないからな」

「前は夜の森の散歩なんかで気分転換してたんだけど、最近は物騒でそうもいなくなってるね、ここを見つけたのには感謝だよ」

森の散歩って・・・

結構魔物の居るあの森だよな、まあ、そのおかげで俺がリアに拾われることになったんだけどな・・・

それにしても、自衛の為の剣の訓練や魔物の居る森への散歩など、コイツ結構アクティブだなあ。

「今日は魔物退治に行ってたんだよね？どうだった？」

「ん、余裕、今日会った魔物ならまったく脅威じゃないな、ただ、クロとは試合<sup>や</sup>ってないからどうなるか分かんねえけど・・・」

「クロ？」

今日の出来事をリアに語って聞かせてやった。

「魔物だけならともかく、冒険者ともやり合ってたの！？仕方ないかもしれないけど仕事の邪魔してるし、下手すると犯罪者扱いされるわよ」

そうか？1人相手に6人で敵わなかったとか、恥ずかしくて言えないだろ？しかも俺素手だったし・・・

「はあ、ま、いいか」

そうそう、気にしない気にしない。

エルリオール  
この世界に来てしばらく経った、まあ、だいぶ馴染んで来たんじゃないだろうか？

さて、明日はどうするかな・・・

## 一章7話 面倒だ、殴る！

今日も私は訓練の後、離宮の屋根の上でくつろいでいた。

「あれ？リョウ？いつの間に來たの？」

気付くと少し離れたところでリョウがじっと遠くを見ている、あつちは・・・城の方？何を見てるのかしら？考えてても分からないから聞いてみましょうか・・・

「どうかしたの？」

「いや、どっかから見られてる気がする・・・なんか闇討ちされそうな時の雰囲気似てるけど、なんか違うかな？」

闇討ちされそうな時の雰囲気って、リョウは今までどんな生活を送って來たのだろう？

見られている感じ？私はまったく気付かなかったけど、言われて注意してみるとそんな気配がする。

「ちっ・・・感じ悪いな」

あ、気配が消えた、リョウが舌打ちしている、どうやらリョウにも気配が分からなくなったみたい。

まあ、どうせ私のことを良く思っていない奴等の誰かでしょ。

「まあいいか、俺は寝る」

そう言っつてその場で横になった、私は慌ててスカートの端を押さえリヨウから見えないようにしたけど・・・全然気にして無いわね、それはそれで複雑な気分になる。

「リヨウ、寝るなら部屋に戻ったら？」

「面倒だ天気も良いし、ここでいい」

「もう、私は行くけど、程々にしておきなさいよ」

リヨウを残して私は自室に戻る、離宮内は今日も平和。私の世界この平和が続けばいいんだけど・・・一癖二癖有る為ここに集められた離宮付きの人達は厄介払いとして、有事の際に捨て駒として扱われることが分かっている。その為離宮付きの兵士達は生き残る為に今日も訓練を続ける・・・この先何も起何事も起こらなければ良いこらなければ良いなるのだけど、私は無駄になっ何事も起てほしいと思う。

まあ、そんな願い叶う筈が無いんだけど・・・

「マナ様、只今戻りました」

いつもの様に書類を片付けていると、私の側近、フィリア フラウがやって来ました。彼女にはしばらく前に隣国ルージュの様子を探りに行ってもらっていたのですがどうやら帰って来たようですね。



「お帰りなさいフィリア、それで、何か分かった事は有りましたか？」

「はい、最近徴兵や傭兵の雇用が行われているようでした。やはりルージュは戦の準備をしているようです」

「当たってほしくない予想通りの事態が進展しているようですね。やはり狙いはこの国でしょうか？」

「今はマルスの国境に増援を送っておきましょう・・・」

「なんとか開戦を避けられないものでしょうか？」

「無理でしょうね、向うがやる気で有る限りこちらも相応の対応をしなければなりません・・・それに、この国ゴルドの王は向うが準備をしていると聞いただけで、こちらから仕掛けかねない様な人物ですから・・・」

「そうですよね、ゴルドの王、私の父でも有るのですけど、王としては明らかに失格な人です。この国が保っているのは、フィリアをはじめとした優秀な者によるところが大きいのです。」

「それでも、王に知らせない訳には行きませんかよね・・・」

「大隊を動かすのなら避けては通れません」

「仕方ありませんね、行きますよフィリア、付いて来て下さい」

「はい」

気が重いですが仕方ありません、この国を護る、そのために最善を  
尽くさなくては・・・

「ん？」

暖かい陽気に包まれまどろんでいる俺の上に影が落ちる、曇ってき  
たのかと思い目を開けると覗き込むようにして俺を見るリアが居た。

・・・この体勢はマズイ、とりあえず身体を起こそう。

うん、見ちゃいない、俺は何も見ちゃいない。

「まだ寝てたんだ？もう直ぐ日が暮れるよ」

そうだな、日がだいぶ傾いている、日が落ちる前に中に戻るか・・・  
ん？

起き上がったからリアの影から抜けていた俺に再び影が落ちる。見  
上げるとでっかい鳥が俺たちに襲いかかって来ていた・・・

「っ！呆けてる場合じゃない！」

「魔物！リョウ気を付けて！」

リアが剣を抜き構えるけど、お前が気をつけろ！

屋根の上なんて足場が悪く逃げ場もない場所で戦おうとするな！  
まあ逃げられないから殺<sup>や</sup>るしかないんだけど・・・今は俺がいる。  
剣に当たらないようにリアを抱え飛び降りた。

「」

(ん？視線？)

普通の人なら怪我処じゃないけど強化した俺なら問題無い、怪我も  
無く地に下り立つ、鳥の魔物が俺たちの居た場所を破壊するのが見  
える、結構攻撃力は有るみたいだな・・・まあ当たらなければいい  
だけか。

リアを下ろして魔物の次の攻撃に備える、空を飛んでいるやつが相  
手だし無理に殴りに行かずカウンターを叩き込んでやろう。

「ギユアアアアア！！」

屋根の瓦礫を撒き散らしながら鳥の魔物が再び突っ込んでくる、た  
だ真っ直ぐ突っ込んでくるだけの攻撃、そんなものに当たってやる  
つもりは無い、リアも回避行動に出ているのを確認して俺は魔物の  
攻撃をギリギリで回避するように動き魔物の直ぐ側を交差するよう  
に移動する。

まあここで一発ぶち込むわけだが・・・せっかくだから翼を片方ぶ  
ち抜くことにする、鉄血で硬化した拳が翼を片方使<sup>アイアンブラッド</sup>い物にならない  
位に傷付ける。

「ギユアアアア！！」

地をのた打ち回る鳥の魔物、翼を？がれてコイツ終わったんじゃない？

しばらく暴れた後鳥の魔物が立ち上がり俺たちを威嚇してくる、どうやら飛ぶのは諦めたようだ。

「なんだ！なにがあった！」

「おお！魔物だ！ぶっ殺そうぜ！」

「リョウ！お前何やってんだ！」

ぞろぞろと騒ぎを聞きつけた兵士なんかがやってくる・・・よし、面倒だし後は任せよう。

兵士たちに取り囲まれ、空を飛ぶ術も無くなった鳥の魔物はあつという間に退治された。

さて、それじゃ俺はこいつを何とかするか・・・

俺は城のある一点を睨みつけリアたちに気付かれないようにこの場を離れた。

---

「くそ！くそ！くそ！なんなんだ！あの男は！」

忌々しい、森へ出かけなくなったあの女が最近よく屋根の上に居るというので、そこに魔物をけしかけたというのに！

逃げ場の無い屋根の上で襲われれば確実に殺れると思っていたのに！なんなんだ！あの男は！人を抱えて屋根から飛び下り無傷だと！

馬鹿な！有り得ない！

「な！」

あの男、今こっちを見た！え？え？・・・ここに来る！

慌てて窓から離れ明かりを消し扉に鍵を掛ける、来るな来るな来るな・・・

・・・

・・・

・・・

来ない？

「は、はは」

なんだ、こっちを見たように思えたのも気のせいかな、そうだな、魔物を操っていたなんてばれるわけ無いかな、誰も私が犯人だなんて分からないかな。

「ははは、はははははは」

「何か面白いことでも有ったのか？」

「は？なあ！」

後からの声に振り返ると先程私が使っていた窓の枠に腰掛たあの男が居た。どうやって入った、扉には鍵が掛かって・・・窓！屋根から飛び下りて平気なのだ、逆も可能ということか！

「なあ、何か面白いことでも有ったのか？」

驚く私に再度問いかける男、くそ、本当になんなんだこの男は！

「いや、なんでもないぞ」

私が魔物を操っていたなんてばれるわけ無い、誰も私が犯人だなんて分からない、そう思い白を切る。

「・・・なんでこっちを見てた？」

「なんのことだ？」

「ふむ・・・」

この男何か感づいているようだが私はあくまでも白を切る、ばれるわけ無いんだ・・・

「面倒だ」

「は？ぶふっ！」

顔面に走る激痛、噴出す血の暖かさを感じながら私の意識は闇に沈んでいった・・・

「ちっ」

手に付いた血を拭い気絶した男を見下ろす。

俺たちが鳥の魔物と戦っている間ずっと感じていた視線を辿り明らかに怪しい男を見つけた。

問いただそうかと考えたが白を切ろうとしていると分かったので面倒になって沈めた。

さて、こいつどうしよう？ほっといてもどうにもならないよな・・・マナに任せるか・・・証拠は拷問して吐かせりゃいいや。

『フレイムバーン』

「な！」

男を運ぼうと思った瞬間、男が炎に包まれ声を上げる間も無くで燃え尽きた。

「まったく、役に立たない男だ・・・」

部屋の隅にいつの間にかローブ姿の男が立っていた。

「今度はなんだ？」

「・・・・・・・・ふ、答える義理は無い」

「あ、待て！」

殺ることは終えたとローブの男は部屋の隅の闇に溶けるように姿を消した。

「ちっ、逃げられたか・・・」

んで？これどうしよう？

消し炭になった男のことをどうするかしばらく考えるが・・・

「マナに任せよう・・・」

丸投げすることにした。



## 一章8話 開戦？マジか？

隣国ルージュの戦準備、王に知らせると、案の定攻められる前に攻めると言い出し、フィリアと協力して何とか止めさせることができました。

それから暫く経ち、マルスの国境にルージュのものと思われる大隊が攻め込んできて戦線が開かれました。国境の辺りは制圧されましたが、幸い以前に送っていた増援が間に合いそれ以上攻め込まれることも無く戦線は膠着状態に至りました。ここから何とか停戦に持つていけないでしょうか？

「無理でしょうね、今もこちらから何度も書状を送っていますが、全て無視されています。

あの王を抑えておくのにも限界が有るでしょうから、それほど猶予はないでしょうね」

「・・・戦わないと終わらないようですね。フィリア、協奏魔法隊は動かせますか？」

「はい、いつでも」

「出来るだけ被害を押さえ、この戦いを終わらせますよ」

「はい」

先日、謎のローブ男に消し炭にされた男はどうやらリアの命を狙っていたらしい、謎のローブ男が手を貸し魔物の運用方等を洩らさぬよう口封じに男を始末したとマナは考えているようだ。

「まあ、あれから平和だよな・・・」

訓練所で俺と手合わせしているソルダに呟く、ソルダの動き以前と比べて随分と余裕が出てきたなあ。

「何言ってるんだ？今この国は戦争の真っ最中だぞ」

そうは言うけど俺は戦争なんか体験したことが無いし、戦線はここからだいぶ離れてる所だろ？実感なんて湧かねえよ。

「面倒なことになってるなは確かか・・・ソルダ、訓練はちよい中止だ、ちよっと今どうなってるか聞いてくる」

「は？聞くなって、どこでだよ？」

「マナのところだ」

「はあ?!」

ソルダを残して俺は城に向かう、後で聞いたことだが、離宮付きの者が無許可で城に入るのは禁止されているそうだ。まあ、俺には関係ない。

城の中を進み、しばらくして気が付いた。マナの奴どこに居るんだ

？あいつの部屋とか俺が知るわけ無いんだよね・・・

「あ！リヨウお兄さん！どうしたの？」

お、リリカじゃないか、丁度良いマナの所まで案内させよう。

「よお、マナにちょっと聞きたいことが有るんだけど場所がわかんねえんだ、連れてってくれないか？」

「うん！マナお姉様なら今の時間は自室にいるはずなの、付いて来て〜」

リリカに付いて城を進みマナの部屋の前にたどり着いた。

この城何階まで有るんだろう、今居るのが5階、でもまだ上が有るみたいだな・・・

「ですから協奏魔法隊

の護衛として・・・」

部屋の中から話し声がするな・・・さてどうしようかな・・・

―ガチャ―

「誰ですか!?!」

迷っていると内側から扉が開けられ耳の長い女が出てきた。思わず気配を消し認識されにくくする、リリカ（目立つ奴）が居るからうまくいけば気付かれないだろ。

「フィリアさん、こんにちはなの！」

「リリカ様でしたか、マナ様に何かご用ですか？」

あの耳どうなってるんだろ？長いのに垂れてない、骨でも入ってるのか？

「リヨウお兄さんがマナお姉様に聞きたいことが有る、って言うてるから連れて来たの」

「リヨウ？そんな名前の人、城こゝろに居ましひゃあ！！」

うお、長く尖ってる以外は俺たちと変わらないみたいに思えるけど、なんだ？すげえ触り心地が良い。

「え？あ！ちよと！や、あ、あ、やめ！やあ」

やばいなずっと触っていたくなる・・・

「ふあ！」

悶えるのを無視して耳の感触を楽しんでいると限界が来たのか？座り込んでしまった。

「リヨウイチさん？何をやっているんですか？」

マナの部屋から聞こえた彼女の声に思わず手を耳から離す、顔を向けると凄い良い笑顔でマナがこっちを見ていた。

「ははは、よう、マナ」

「こんにちは、リヨウイチさん」

「ちょっと聞きたいんだが、この国、今戦争中なのか？」

下手なことを言ってマナを怒らせるのはまずいと感じた為早々に用件を切り出す。

「ええ、残念ながら今は戦争の真っ最中です」

「えっと戦争の原因は何だ？」

「分かりません、先日急に隣国が進行を開始して、此方からの呼び掛けに答える事も無く戦線を維持し続けています」

まあ、攻めて来られたら迎撃しない訳にもいかないよな。

「解決策は有るのか？」

「幸い向うは騎士国家此方は魔法国家です。戦線で大魔法を放ち、向うの戦意をそぎ落としてからもう一度停戦を呼びかけます。今その魔法部隊の護衛をどうするか相談していたところですよ」

そう上手くいくか？ここが魔法国だってこと相手だって分かっているだろう？なんか作戦に不安を感じるな、ホントは戦争なんて関わりたくないんだけどリアや他の奴にも少なからず恩が有るし手伝ってやるか・・・

「んじゃ、その護衛に俺も入れといってくれ」

「・・・ええ、良いですよ、よろしく願いますね」

あっさりOKを貰った。

「詳しいことは後で知らせてくれ、なに、良い仕事してやるさ」

余計な事を言われる前に部屋を出る、さて、神代理あいつとの約束も有るし、ちよつと張り切ってみるか！

「リョウお兄さんお話し終わったの？」

リリカが俺の後ろをチョコチョコ付いて来ていた。話してる間は大人しくしていたな、まだ幼いのに空気の読める子だ・・・つい優しくしてしまう。

「ああ、もう用事は終わりだ」

「だったら一緒に遊ぶの！」

ソルダを訓練所に放置しっぱなしだけど・・・まあ、いいか。

「で、なにするんだ？」

その日、俺はリリカに城中を引き回されることになった。

おかげで城の中をある程度把握できたので良しとしておこう、さすがに王とかとは会えなかったがそれで良かっただろう、リアを離宮に閉じ込めた張本人だ、会ってたらぶん殴ってたかもしれないから・・・

「あんなに簡単に話して良かったのですか？それに魔法隊の護衛に同行することを許可するなんて、彼は何者です！？」

彼が去った後少し顔を赤くしたフィリアが私に問いかける。今まで一緒にいて気付きませんでした、フィリア耳が弱いんですね、さっきの悶える姿、ちよつと可愛かったですよ。

「そう言えば、色々あってフィリアにはまだ話していませんでしたね、彼はしばらく前にマテリアが森で拾って来た子よ、それも魅魔の紅月の夜にね」

「な！マテリア様に魅魔の紅月の夜に連れられて来たって、それは危険すぎますよ、もし彼が預言書に有る魔王だとすると此度の戦いに関係無く国が滅びますよ！」

フィリアは焦っているみたいだけど、私はここ数日の彼を見ていてあまり悲観的なことは考えていない、彼なら大丈夫なんじゃないだろうかと思っているのだ、それでも人を見る目は有るつもりです、その直感を信じるなら、彼が例え魔王だとしてもこの大陸を滅ぼすことなんて無いのではないでしょう。

「フィリア、大丈夫よ、何より私たち姉妹3人の中で一番そういう事に敏感なリリカが、あれだけ懐いているんだもの、彼が邪悪な存在である筈がないわ」

「む、確かにあのリリカ様が懐いていたのには驚きましたが・・・」

なんだか歯切れが悪いですね、もしかして耳を弄ばれたことを根に持っているんでしょうか？

「それにしてもフィリアはいい声で喘ないてましたね・・・」

おもむろにフィリアの耳に手を伸ばす。まさか私がそんな事するとは思っていなかったのでしょうか？あっさり触ることが出来ました。

「え？あ、ちょっと、マナ様！？あ」

・・・これは、なんでしょう、すごく触り心地が良いです。リョウイチさんがいつまでも触っていた気持ちがかかります。

「あ、だめです！や、あ、あ、あ、マナ、様、待って、やあ」

いけません、つい夢中になってしまいました。耳を開放して少し真面目な顔を作ります。

「大丈夫ですよ、彼はマテリアに少なからず好意を持ってるみたいですからね、マテリアが悲しむ結果は望まないでしょう」

彼の好意がこういった類のものかまでは分かりませんが、いいですね。

「護衛隊、私も同行します。何かあれば彼を始末しますが、よろしいですね？」

顔が赤いままのフィリアを可愛く思いましたが、弄ると話が進まないで置いておきましょう。



「ええ、何も無いと思いますが、よろしく願いますね」

「はい」

## 一章9話 戦線に立つ深紅の魔王

「まさか、魔法を封じる術すべを用意しているとは……」

フィリアが隣で弓を構え悔しそうに戦場を見つめている。

敵側の増援と俺達が戦場に到着したのはほぼ同時、そのまま戦闘が開始された。

騎士たちが防衛線をはり、魔法隊が……よく分からないけど、全員で息を合わせ魔法の威力を増幅する方法で詠唱を開始する、詠唱が終わった所で騎士たちを下がらせでかい魔法を叩き込む筈だったのだけど、魔法はまったく発動しなかった。

「そう簡単に出来るような事ではないのですけどね、古代遺物アーティファクトでも掘り当てたのでしょうか？」

「どうやったかは気になるが、魔法がかき消されてる以上戦力はがた落ちだ、これからどうするか早く決めなきゃならねえだろ？」

だいぶ後退した前線では魔法の援護無しで騎士たちが戦っているが、向うの騎士に押されているのは明らかだ、騎士国の騎士と魔法国の騎士の練度の差が出てるな……

「く、だいぶ攻め込まれるでしょうけど、仕方ありません、ここを放棄します。前線の騎士たちは敵を牽制しつつ後退！」

一旦引くか、まあ体勢を立て直さなきゃ被害ばかりでかくなるものな。

さて、俺の出番か？

「リョウイチさん？ 引きますよ！」

「ああ、さっさと行け、前線の騎士たちも一緒にな・・・まあ、役に立ってやるよ」

「ちょっと！ リョウイチさん！？」

撤退を始める兵たちの流れに逆らって前線へ向かう、敵騎士の剣を捌き切れずにやられようとしている騎士が居たのでとりあえず助けておく。

剣を振り上げた敵騎士の鎧を強化した状態で蹴り飛ばす。上手い具合に他の敵を巻き込みながら吹っ飛んで行ってくれた。

俺は庇った騎士に逃げるように言い、敵軍と向き合った。

「さて、ここからは俺が相手だ、魔法を封じたことを後悔させてやる」

追撃を仕掛ける敵兵を手近な奴から殴り飛ばしていく。

「なんだ！ あいつ！」

「いいから殺せ！ たった一人で何が出来ブふ！」

俺が1人だからと油断しているのだろうが、それは命取りだ、近付いてきた奴をぶっ飛ばす。

「ヒッ・・・！」

追撃に來た部隊の半数近くを片付けた、敵兵を吹き飛ばすと小さく悲鳴が上がりだす。ようやく、自分たちが相手にしている奴が異常である事に気付く者がでてきたようだ。

「何なんだ！ 何なんだ！」

「いやだ！ こんなはずじゃない！ 簡単な作戦だったはずだろ！」

「おい、一斉に仕掛けるぞ！」

「無理だ！ あれは危険すぎる！」

兵士たちが混乱しだしたようだ。よし、できるだけ相手を怯えさせて撤退してもらおう、俺は自身の存在を誇示する様に前へ踏み出し声を張り上げる・・・

敗色で染められていた戦場は一転した。

「マナ様から話は聞いていましたが、これほどとは・・・」

彼は今たった一人で敵兵を圧倒しています。

既に撤退の為の時間は充分に稼げている、それどころか彼がこのまま戦い続ければこの場は勝利できるのではないのでしょうか？

「魔王と言われても信じてしまいそうですね・・・」

「あははははははは！どうした！こんなもんか！？」

騎士国の騎士なんだろ？素手の相手にこの様じゃあ剣が泣くぜ！

まあ、人間ごときが俺に敵うはず無いんだけどなあ！はははははははは」

笑いながら次々と敵兵を薙ぎ倒していきます。ホント規格外です・・・

・

「くそ！撤退だ撤退！」

俺の暴れる戦場の何所かで声が上がる、その声を合図に敵兵が撤退を始めた。

当然見送るぞ、追撃なんてやってられるか。

残された俺の周囲には倒した敵兵がごろごろ転がっているが回収は

されないようだ、加減はしてたからほとんどの奴は生きてると思うが、俺が暴れるよりも前に殺られた奴とかでこの辺はぐちゃぐちゃだ・・・こんなところで1人立ってたら全部俺がやったみたいじゃないか（半分以上俺がやったんだけど）。

「やっぱ、魔法とか使われない限り余裕だな・・・」

撤退する兵たちの流れに逆らうようにして馬？に乗った男がこっちに来る

「ふん、随分舐められたものだな、クズ共を相手にしていい気になるなよ」

「なんだ？まだやるのか？」

なんだこいつ、転がってる兵共をゴミを見るような目で見てクズ呼ばわりか・・・こいつには遠慮は要らないな。

「当然だ、この先のことを考えると貴様を放っておくのは少々厄介だからな、ここで死ぬ」

男は手にした赤い槍を繰り出し・・・

「ガァ！・・・ああ王子？な？・・・んで？」

「デメエ・・・」

男の味方であるはずの兵たちを、気絶して倒れている兵たちを赤い槍が貫いた。

「喰らえ・・・」

「あああああああああああああ！！！」

男が何か言った途端、赤い槍で貫かれた兵がまるでミイラのように干からびていった。それと同時に男の持つ赤い槍が不気味な輝きを纏う、今のはあの槍のせいかな？

「血に溺れる・・・紅泉刃！」  
コウセンジン

男が俺に向かって槍を振るう、槍の射程から離れていて当たる訳無いんだけど、確実に何か有る！直感に従い大きく横に跳び避くと、思った通り俺の居た場所を赤黒い何かが通り過ぎて行った。

俺の周りで気絶していた兵たちが、それに巻き込まれ切り裂かれ悲鳴を上げる間も無く絶命していく・・・

「喰らえ・・・」

先程と同じ、男が何か呟くと絶命した兵たちから赤い液体が槍に流れ、干からびていく、血を吸ってるのか？

「いい度胸だ、（ハーフバンパイアである）俺に対してその武器は完全に喧嘩を売っている・・・覚悟しろよ・・・」

「ふん、覚悟するのは貴様だ！誰もこの魔槍からは逃れられないんだからな！」

男が槍を振るう度に赤黒い刃が俺を切り裂こうと迫ってくる、厄介な力だけど発射場所が分かっているのによく見ていれば避けられる、ただ連続して放って来るので避けるので手一杯になる。更に厄介な

ことに、気絶して倒れていた兵たちは男の攻撃の余波を受けてみんな息絶えている、更に息絶えた兵たちも魔槍に喰われ男の力になっている・・・

「くそ、近づけない・・・」

「よく避けるな、だが・・・コウバクジン紅縛陣！」

男が動きを変えた！刃を放つのを止め槍を地<sup>血</sup>に突き刺す。

？男の足元や俺の足元には、ぶちまけられた大量の血・・・てことは・・・

俺の足元の血が動き出し触手のように固形化して俺の手足を捕らえる。くそ、やられた。

「ははは、終わりだ！コウセンジン紅泉刃！」

「ちっあんまりやりたくねえんだけど・・・仕方ない」

赤黒い刃が俺に迫る、俺は手を拘束する血に喰らい付き・・・

「ゴク、ゴクゴク」

「な!？」

飲んだ、俺を拘束する血を飲み込み手は自由になった。  
のんびりしてる暇は無い、血を飲んだことで高ぶる気持ちを抑えな



がらある能力を発動させる。

ブラッドドライブ  
「血を燃やせ」

身体強化の強化版と言えはいいかな？体内の血を燃やすことで普段の身体強化より高い効果を得る、これは俺が人と吸血鬼のハーフだから得た力、吸血鬼の特徴を持ちながら人の血が流れている俺だから使える力、血を燃やす、自身の血を消費しているので長くは持たないけどな。

力任せに拘束から抜け出す、赤黒い刃を手で打ち払いながら駆け出し、男との距離を詰める・・・

ダイコウソウ  
「く！大紅槍！」

男の槍が巨大化する、大人が束になっても振るえないであろう大きさに変化した槍を男は軽々振るう、おそらく巨大化した部分は槍の力で重さを感じないんだろう、まあそんなことはどうでもいいけどな。

「うおおおおおおおおお！！」

槍が駆け寄る俺を迎撃しようと迫ってくるが・・・

「なに！？どこだ！」

今の俺について来れる奴はそう居ないはずだ。

現に今、迫る槍の上に飛び乗り跳躍しただけなのだが男は俺を見失っている。

「悪いが、今の俺は加減が出来ねえ」

俺の声に男が上うっちを向く、既に攻撃の範囲内に迫った俺に男はなす術が無い。

「あ、ああ・・・・・・・・・・うわあああああ！！」

「じゃあな」

一撃、男の胸元に拳を叩き込む、鎧を着込んでいるが関係無い、俺の拳は鎧を粉碎し男に突き刺さる、数十メートルをぶっ飛び男は動けなくなった。

戦場に魔槍が残っていた。放置するのは危険だと思い、魔槍を手引きに撤退したフィリアたちの所へ戻る、兵士たちも遠目に今の戦いを見ていたようで、呆然としている者が多い。

「な、役に立っただろ？」

「やり過ぎです！それよりまず身体を拭いて着替えてください！」

全身血塗れ、今の俺の格好は普通にヤバイだろうな、あんな相手と殺り合ったんだから仕方ないだろ？

とりあえず今回の戦いは終了、俺とフィリアは先に城に戻ることに  
なった。

はゝ、疲れた・・・

この日、俺はゴールドとルージュの両国に存在を認識される、どちら  
の国でも単身で大隊を壊滅させる化物という認識になるようだが・  
・どこの誰から広がったのか？ 妙な二つ名を付けられる、戦場に1  
人立つ血塗れの魔王・・・

深紅の魔王と・・・

痛過ぎる、勘弁してくれ・・・くそ、誰が言い出したか分かったら  
そいつ絞めてやる・・・

## 一章9話 戦線に立つ深紅の魔王（後書き）

ブラッドドライブ、なんか良い言葉（漢字）無いかねえ？

何か良いのあったら変更します。

## 一章10話 異端者

ルージュはゴールドに戦争を仕掛けた。

ルージュはまずは奇襲を仕掛けゴールドに攻め込む、しかし相手の援軍により戦場は膠着状態になった。

そこに兄がどこからか用意してきた古代遺物アーティファクトにより戦場に封魔の陣を張る、陣を張り終えた後、到着した援軍と共に戦闘を開始した。

同時にゴールド側にも援軍が到着したが、封魔の陣によりゴールドの魔法部隊はまったく役に立たず、騎士の錬度の高いルージュの快勝が見えていたが・・・撤退を開始したゴールド軍の追撃に出た所で異変は起きた。

1人の男が追撃を阻む為に戦場に残った。誰もが予想しなかった、その男1人で追撃に出ていた部隊を圧倒して見せるなんて・・・その戦場で指揮を取っていた兄はその男を脅威と見なしてそこで討つことを決める、元々ルージュの騎士達の中でも一位二位を争う強さを持った兄であったが、古代遺物同様アーティファクト、どこからか手に入れて来た魔槍によってルージュ内に兄に勝てる者は居なくなった。今回も兄が簡単に勝利する。そうルージュ軍の誰もが思っていた・・・

「兄さんが死んだって本当!?!」

僕は報告を聞き、慌ててフレイムロウ城内で今戦線に立っているのとは別の部隊の準備をしている、もう一人の兄の下へと駆け込んでいった。

「あ? ライネスか・・・そうだ、まったくあの馬鹿は、せっかく強力な魔槍を手に入れてやったのにあっさり負けやがって・・・まあ

そんな訳だから、これからの指揮は俺が取ることになった。こいつ等の力を振るってきてやるよ」

兄の死を馬鹿の一言で片付けられ僕は愕然とする、ああ駄目だ、王である父が病に伏せた頃からだろうか？2人の兄が競って戦争を始めたのは・・・実質、ルージュ帝国の実権を握ってしまった兄達を止めることは僕1人にはできなかった。

でも何とかして戦争を止めないと・・・どうやって戦争の皺寄せなんて国民が被ることになるんだ、何とかしないと・・・

---

シルバーリーフ城の会議室で今、軍事会議を開いています。

先日のルージュとの戦いで魔法を封じられた事に対する対策が今回の議題の主なところですよ。

ですが、王の一言でもはや会議と呼べない物になりつつあります。

「特異部隊に任せればいいだろう」

会議中は大人しくしていることの多い（会議内容が分からない程の愚王）王が発した言葉・・・王に気に入られたい大臣達はその言葉に賛成の意を示し、各部隊の隊長陣は何か言いたそうにしています

が、王の言葉に強く出れないでいます。

特異部隊とは、簡単に言えばマテリアの居る離宮に所属する兵士達のことを指します。

普段から魔法無しで修練を続けている者達なので、魔法を封じられた状態ではこの城の兵たちの中でも一番上手く戦える者達でしょう、しかし性格に難の有る者や大きな欠点を持つ者、待つ能力が特殊過ぎる者、理由は様々ですが離宮に居る人達は一癖も二癖もあるので、王や大臣達は彼らを捨て駒程度にしか見ていないので簡単に言ってくれますが、彼らと他の部隊の者が連携を取ることは極めて困難です。

半ば強引に会議が終了し、特異部隊が単身で戦線に立ち他の隊で後から援護という作戦とも言えない作戦が決定しました。私や隊長陣が反対意見を述べましたが王により黙殺されました。

「よろしかったのですか？」

フィリアが声をかけてきます。

私が特異部隊を単独で戦線に立たせるように仕向けたので、疑問に思い言っているんでしょうけど……

「いいですよ」

下手な連携を取ることは返って危険です。おそらく、特異部隊と他の隊が連携を取るよりも特異部隊のみに戦線を任せる方がいい動きが期待できるでしょうけど……数が違いすぎます。連携しようがしまいが良い結果にはならない、特異部隊は全滅するでしょう。けど、そうならない為に今離宮に向かっているのですよ……

離宮の兵士に刀剣類マニアが居たので、この前戦場から持って帰って来た魔槍を見せてみる・・・この魔槍なぜかフィリアたちに回収されず俺が今も所持している・・・

「これって、最近ルージュの王子が手に入れたって言う吸血の魔槍じゃないか？ 離宮<sup>こく</sup>じゃ詳しい解析は出来ないけど多分間違いないよ、どうやって手に入れたんだ？」

妙な二つ名、深紅の魔王という名は俺の知らないところで広まっているみたいだけど、それが俺のことだというのは殆どどの奴が知らないでいるようだ、説明が面倒なので拾ったとだけ言っておくことにした。

吸血の魔槍か・・・俺は吸血鬼と人間のハーフだけど普通の食事で栄養摂取出切る、血でもいいんだけど、血を口にすると気分が昂るので吸血行為はまったくと言っていいほどした事が無い。

この武器を見ても自分に合うとは思えないんだよな・・・雰囲気は禍々しいし・・・持っても仕方ないし売るか、魔槍だし良い金になるだろ。

街に行くか・・・まあ、その前に飯食ってからだな。

食堂でウリンに昼飯を用意してもらう、ウリンも丁度昼を取る所だ



ったらしく、一緒に食べるようになった。今回の昼飯はウリンが作ったらしい、うん、前に食った賄いのように切るだけではない昼食は絶賛するほどではないが普通に美味かった。そのことを言うと・

「よかった、ボク切る以外の調理法が苦手であまり自信なかったんですよ」

「そうか？普通に出来てると思うが・・・」

先程のウリンが調理している姿を思い出す、包丁捌きが凄かったな、それに比べたら確かに焼くとか煮るとかはぎこちなかったけど・・・包丁捌きが凄すぎて他が苦手だと思い込んでるだけじゃないのか？現に出来上がった料理は普通に美味い。

「これなら自信持っていぞ、まあ、俺の好みの味付けだったってだけかもしれないけどな」

「こ、好みですか！」

何赤くなってるんだこいつ・・・俺にそっちの気は無いぞ。

色々不味そうなので飯食って直ぐに逃げるように城を出た、ちゃんと魔槍も持ってきているぞ。

「とりあえず武器が売ってるところに行くか・・・」

しばらく街をさ迷って店先に剣と盾の看板がある店を見つけた。

中に入ると俺以外に男の客が1人と店員と思わしき女性が1人、あ

まり流行っていないのか？この店で大丈夫か？

てか、ここ何屋だ？いろんな武器に鎧や盾といった防具、傷薬と思われる物や爆弾らしき物はまあいいとしよう、ファンタジーな店なら売ってても不思議じゃない、しかしそこに野菜や果物、本や子供の玩具など、いろんな物が置かれている。

「あれ？リョウイチじゃねえか、どうした？」

店内を見回していると客の男が話しかけてきた、

「誰だ？馴れ馴れしい・・・」

「おい！そりゃねえだろ！」

まあ、冗談だが・・・男、ソルダはからかい甲斐があるなあ。

「冗談だ、で？ソルダはここで何してるんだ？」

「ああ、お前との訓練で使ってた武器がボロボロになったから、新しいのを買いに来たんだよ」

武器がボロボロになった？訓練用の剣は元から刃が潰してあるものだから関係無いんじゃないのか？こいつまさか訓練に・・・

「真剣使ってやがったな？」

「あ・・・いや、その・・・あはははは」

ソルダが急に冷や汗を流しだす。乾いた笑いを浮かべ取り繕おうとしているがムカつくだけだ。

「よし、次の訓練から手加減無しだな」

「すまん！オレが悪かったから勘弁してくれ！」

まあ、訓練中に気付かない俺もどうかしてるが、訓練で心剣を使って使い物にならなくなったから新しいのを買いに来たって・・・要らん出費だろ？

「まあな、ちゃんとしたのを打ってもらおうとすれば結構かかるかな、だからこの店で良いの無いか探してるんだよ」

あ、やっぱりこの店しょぼいんだ、ここで売るの止めようかな・・・

「いやいや、品揃えや質は良いんだよ！只関係無い物まで並んでるから見つけ難いってだけで」

「ふーん、なあ、店員さん？これいくら位で買い取ってくれる？」

とりあえず聞くだけ聞いてみる、店員の女性は俺の出した魔槍を見て目を丸くして驚いている。

「あんた、これ売るのかい？こんな凄い品、滅多に手に入るものじゃないよ」

「ああ持っても邪魔なんでな、いくらになる？」

正直持ち運ぶのも面倒だ、さっさと処分してしまうに限る。

「悪いがうちじゃ買い取れないよ、魔剣の類は取り扱ってないんだ

よ。どうしても売りたいってんなら中央広場の通りにある武器屋に行ってみな、そこなら魔剣の類も取り扱ってるから」

「そうか、まあ、そっちに行ってみる、邪魔したな」

ここじゃ売れないって言うならいつまでもここに居ても仕方ない、言われた所に行くか・・・

「ねえ！その槍持った銀髪の人！」

中央広場ってどっちだ？ここに来て日が浅いからしつかりと地理を把握してないんだよね・・・

「ねえ！ちよっと待ってって！」

中央広場に向かおうとしていた俺の肩を掴む奴がいた。腰に刀を二本差した黒髪の女。その隣に獣耳を生やした銀髪の男、こいつは剣二本。後に長い黒髪を後で一纏めにした剣士風の男、こいつ、なんか雰囲気が他の二人と違うような気がするな。

3人が俺のほうを見ていた。

「ん？なんか用？」

「「ああ、お前の・・・・・・・・・・」」

2人の男の声が重なった、同時に話し出してしまい同時に押し黙った。少し気まずい空気が流れるけどどうでも良いから、用が有るなら早く話してくれ。

「あたしが話すね」

「すまん任せる」

代表で女が話すみたいだ・・・

「こんにちは、あたしはカリン、貴方の名前聞いても良い？」

「涼一だ」  
リョウイチ

「リョウ・・・イチ？」

「ああ・・・」

俺の名前を聞き少女、カリンの動きが止まる。なんだ？何か問題あるか？

「あ、ごめんなさい。えっと、リョウイチさん、貴方の持ってる槍、私達に譲ってくれないかしら？」

「槍？これのこと？お前達が買い取ってくれるのか？」

俺の持ってる槍って、今から売りに行こうとしている魔槍しかない。

「売ろうとしてたのか！」

黒髪の男が驚いた声をあげる、信じられない物を見る目で見るのは止めてくれ。

「何か問題あるか？」

「いや、それを売られると俺が困るんだ、俺の名はジン、ジン ソードだ、その魔槍は俺の爺さん、グラフト ソードって魔剣鍛冶師が造った物なんだが・・・」

「ふーん」

「お前、魔剣鍛冶師グラフト ソードのこと知らねえのか？」

獣耳の男よ、俺がエルリオールの有名人なんて知るか！てかお前だけ名乗ってないな、どうでもいいけど・・・

「俺は爺さんの残した魔剣を回収、破壊している、無責任に乱造した魔剣達は扱い方によっては世界に不幸を撒き散らすからな」

まあ、そうだな、この魔槍を使ってた奴もろくな奴じゃなかった、こいつ等の言ってることが本当なら渡してやってもいいな、本当ならな・・・

「お前らの言ってることが本当だと証明できるか？」

「出来ないな」

あっさりと否定するジン。

「なら渡さない、って言ったら？」

「力づくで破壊する」

奪うではなく破壊と言った、ここで奪うと言われたら俺はこいつらを信用しなかっただろう。

「わかった、俺が持っても邪魔なだけだ、持って行け」

持っていた魔槍を一番近くに居たカリンに渡す、これで俺の用事は無くなったな、城に帰るか・・・

「あ、ありがとう！何かお礼しなくちゃね」

「いや、ほんと邪魔だったから貰ってくれてよかった、礼なんて気にすんな」

まだ何か礼をと言う3人をなんとか説得し城に帰ることにする。儲けにはならなかったけどまあいい。

城に帰ると離宮内が騒がしくなっていた。何か有ったのか？

「あ、さっきの魔槍の！」

「ん？」

お？魔槍の鑑定をもらった刀剣マニアの兵士じゃないか。

「さっきの魔槍、調べたらグラフト ソードの作品じゃないか！凄いで！」

「あれならもう無いぞ」

「は!？」

見事に固まったな、グラフト ソードってそんなに有名なのか？

「欲しがってる奴に譲った」

「なああああ!？」

「そんなことより何か有ったのか？ 妙に離宮内が騒がしいけど・・・」

「無い、譲った、無い、譲った、無い、譲った、無い、譲った、無い、譲った・・・」

こいつ駄目だな、他の奴に聞こう、適当な奴を捕まえて聞いたら、なんか離宮にマナが来ているらしい、そんな騒ぐようなことか？ と思ってたら、第一王女<sup>マナ</sup>が離宮に来るのは今回が初めてのことのようにだ、そりゃ騒ぐよな。ちよつと見てくるか・・・

「なんだ？ フィリアも一緒か？」

騒ぎの元を辿りマナの所にたどり着くと、マナだけでなくフィリアも一緒だった。

「リョウイチさん！ やつと帰ってきましたね！ どこ行ってたんですか!？」

フィリアが俺を見つけるなり怒鳴りつけてくる、どこで何しようが俺の勝手だろ？



「まあまあ、フィリア落ち着いて、今日はリョウイチさんをお願いが有って来たんですから」

「俺に？頼み？」

なんか面倒な予感がするな・・・

## 一章 11話 対暗殺者

リョウが降ってきた日、月詠の森で交戦した大型の魔物、先日離宮の屋根の上で襲われた鳥の魔物、最近命の危機に会っていることが多いような気がする、元々私は存在自体を疎まれているから命を狙われることはときたま有った、でも魔物を使役してくる相手は居なかった。

先日、城内で焼死した男が居たが回りは殆んど騒ぎにならなかった、以前からの経験上、その男が私の命を狙ったのだろう、その後は魔物の襲撃も無く、わたしはすっかり油断してしまっていた。

それを避けられたのは偶然だった。

リョウとの訓練を終え訓練所から浴室に向かう途中だった、酷使した身体が悲鳴を上げ、足がふら付き数歩よろめいた時、私の頬の横を黒く染めた刃が通りすぎた。

瞬時に理解する、今私は命を狙われている。

腰の剣に手を掛け周囲を警戒する、気配を探ろうと意識を研ぎ澄ませた私の耳に背後から僅かな風切音が聞こえた、それを頼りに剣を振るう、夜の闇に溶け込みながら飛来した黒い刃を一閃の元に叩き落すことに成功する。

再度飛来する黒い刃を叩き落しながら相手の居場所を探る、しかし相手の気配はまったく感じられない、おそらく誰かに雇われた暗殺者だろう・・・

方向を変えながら黒い刃が飛来する、それを打ち落とし続けていられるのはリョウとの訓練が効いているみたいね・・・でも、いくら集中してもまったく相手の気配が感じられない、今まで相手にした暗殺者とは実力が違いすぎるのかな・・・まずいかも知れない・・・

「チツ・・・」

何度か刃を退け打ち落としした所で、不意に相手の気配が感じられるようになった。いや、相手が気配、殺気を隠すのを止めた。

正面から黒いフードを被った男が姿を見せる、手に握られているさつきから飛んで来ている黒い刃と、私に向けられた殺気でこの男が暗殺者であることが分かる。

「聞いていた話と違うな・・・飛刃だけで殺れないと思わなかった」

刃が尽きた為、直接私を狙うことにしたみたいだ。

「いいの？暗殺者が顔を見せて・・・」

「直ぐに死ぬ奴に見られても問題無い」

やっぱりそう来るか・・・

速い！消えたように見えるほどだけど、なんとか目で追えている、やっぱりリョウとの訓練のおかげね。

壁を背にしていたことも幸いした、左方から繰り出された男の刃を剣で受ける、直ぐに飛び退き反対の手で振るわれた刃を回避する。

相手が速すぎて防御で精一杯な状態、私じゃこの男に勝てそうに無い、幸いまだ訓練所からはそう離れていない、騒ぎを聞き付け誰かが来てくれるまで耐えるしかない・・・

しばらくは男の攻撃に耐えていたのだけど訓練で身体に疲労が溜まっていた為、私の行動は次第に鈍くなって・・・段々と攻撃が身体を掠めだす。

「く！」

眩暈！？しまった！刃に毒！？

視界がぼやけ身体がふらつく、手に力が入らず剣を取り落としてしまう。

敵の刃に毒が塗ってあったんだ、浅く斬られた傷口から微量の毒が体に入り込んでいたんだろう、相手は暗殺者、毒を使っていないと考える方がおかしいか・・・

立っているのがやっとの私の前で男が黒い刃を振り上げる、気合、根性、なんでもいい、とにかく体を動かすんだ！

「うああ！」

何とか体を動かす、私の首を狙った刃は見当違いの場所を斬り付けるが、傷はけっして浅くない、即死は免れたけどこのままだと出血

で死ぬ・・・

「ようやくか、まあ予想以上に手古摺らせてくれたがこれで終わりだ」

男が再度刃を振り上げる、どうやら、出血しするまでの時間は与えられないみたいだ・・・

「（嫌、死にたくない・・・）」

思えば私の世界は離宮と、こっそり出かける月詠の森だけだった。それは今も変わらないし、以前に大型の魔物に襲われてからは用心の為、森にも出かけることも無くなった。それでも最近リヨウがやって来てからは色々と楽しかった。特に変わったことをしていた訳でもなかったし、リヨウはリヨウで気ままに過ごしていたけど、私はリヨウと過ごす日々を楽しんでいた・・・

「（まだ、死にたくない・・・）」

私の想いは聞き入れられることも無く男の刃は振るわれた。

マナから離宮の兵士たちの出撃命令が出たことを聞かされた。色々思うところがあるようでその戦いに俺にも離宮の特異隊として参戦して欲しいそうだ、まあ、数の少ない特異隊のみで戦場に出なければいけないと聞かされた（死んで来いって言われてるようなものだな）ので、また暴れてくるとしよう。

現在、俺と一緒に訓練中のソルダや、今ここで訓練をしている他の兵も当然戦場に出る、先に訓練を終えて今訓練所に居ないリアはここから出られないみたいなので参戦しないけど・・・

「（こいつらを死なせたかも知れないな・・・）」

いつの間にか俺は、ここの連中をアホな命令で死なせたくないと思うくらいには、気に入ってしまっていたようだ。

「ソルダ！ ちょい待て！」

おかしい、この訓練所以外から刃のぶつかる音がする、聞き逃しそうなほどに微かにだが剣戟の音を俺の耳が聞き取っていた。

「どうした？」

「いや、ちょい気になることがあるだけだ、悪いけど訓練は中止な」

気になった俺はソルダとの訓練を中止して音のする方へ向かった。

場所はそれほど離れていない、訓練所を出て直ぐだった。

だが、目の前の光景に頭が白くなる、対峙するリアとフードの男、男の手には血に濡れた黒い刃、ふらつきながら何とか立っているリアはあきらかにやばい量の血を流していた。

男が刃を振り上げる・・・

ブラッドドライブ  
「血を燃やせ」

無我夢中だった、男は刃を振り下ろす前に俺の拳で地に叩き付けられ・・・いや、地面に押しつぶされて血の花を咲かせた。

一瞬で挽肉にした男には目もくれずリアの元に駆け寄る。遠目にも分かった様に出血が酷い、早く止血しないとこのままじゃまずい、けど傷口は深くこんな傷の止血方法なんて知らない。とにかく傷口を服を切った布で押さえつけるぐらいか？！

「・・・・・・・・リョウ？」

「リア！しっかりしろ！今医者に・・・」

「もう無理・・・・・・・・私には・・・魔法が効かない・・・」

くそ！そうだったリアの体質じゃ元の世界では奇跡とも言える治癒魔法も効果が無い、この世界の医療がどの程度の物かはよく知らないけど、医師も基本的に魔法頼りなのは本で読んで知ってる、それじゃリアは、助からない！？

「くそ! どうすればいいんだよ! とにかく運ぶからな!」

「・・・ごめん、もう・・・いいよ、今から・・・どこに行ったら血が流れすぎて・・・助からない」

そんなことは分かってる、でも何もしないわけにはいかない! 止血できれば、後で血ぐらい用意してやるのに、ってこの世界に輸血の装置ってあるのか?

・・・・・・輸血。

「リア質問だ、死にたくないよな?」

「・・・・・・もう無理だよ」

思い出した、リアを救える方法、昔親父に聞いたことがある、俺は一生使わないと思ってたけど・・・

「無理とかそんなのは聞いてない、死にたくないか? そう聞いているんだ」

「・・・・・・うん、死にたく・・・ない」



使うならリアに確認を取る必要がある、俺の意思だけで勝手にやる訳にはいかない・・・

「今からでも、助かる方法が有る、どうする？」

「・・・・・・・・・・本当？私、助かるの？」

「ああ、でも人を辞めることになるぞ・・・」

俺の血を・・・供血する・・・

## 一章12話 契約

「詳しい説明をしている暇は無い、択べ、  
このまま死ぬか、人じゃなくなったとしても生きるか・・・」

呼吸の浅くなっていくリアに告げる、人じゃなくなることを選択するリアは受け入れるだろうか？

この世界には魔物や亜人が多数存在する、それがリアの答えにどう影響するだろうか？

どちらを択ぶのか、元々化物である俺には予想が出来ない。

「生き・・・たい・・・」

択んだ、という想いの元でリアがその選択をしたのかはどうでもいい、リアを死なせたくなかった俺は答えと共に自分の指先を噛み切り溢れる血をリアの口に含ませる。

「契約だ、俺の血はお前の中に溶け込み、俺とお前の刻の流れを同化させる・・・」

小さくリアの喉が鳴る、俺の血を飲み込んだ、これで・・・

「代価はお前が俺の糧となること・・・」

血の流れ続けるリアの傷口に口を付ける、血を一口飲みこれで契約は完了の筈だ、前に親父から聞いた記憶を頼りにやっただけなので上手くいくかは分からないんだけど・・・

じつと様子を窺っているとリアの傷口が塞がりだした。

成功、リアの身体に俺と同じか少し劣化した自己治癒能力が発揮されている。

バンパイアギフト  
共血の毒、吸血鬼化とでも言えば良いのだろうか？

厳密には違うけど上手い言葉が浮かばない、リアに俺の力の一部と人より長い寿命を与えた。

物語に出て来るみたいに吸血すれば眷族になるなんてことは無く今みたいに少し手順を踏む必要がある。

まあ、これでリアは人とは言えない存在になったんだけどな、後天的な半吸血鬼とでも言えればいいかな？

俺の自己治癒強化とかは、リアの体質の影響を受けていないから、成功すれば助かると思っていたけど、本来この契約は吸血鬼が気に入った人間の血を長く捕食する為に有るものだ、半吸血鬼の俺にも出来るのが賭けだったんだよなあ。

後は副作用が出ないかな。

顔色は悪いままだけど、静かに寝息を立て始めたリアを抱かかえリアの部屋に向かう、命は助かったけど失った血はまだ戻っていないようだ、とりあえず休ませてやらないとな・・・

「あ、リアの部屋どこだ？」

しばらくさ迷い、たまたま見つけたメイドにリアを任せる、血濡れの服などに疑問を持ったようだけどそこは強引に押し切った。

「ん・・・・・・・・」

目が覚めると見慣れた自分の部屋にいた、あれ？私、暗殺者に・・・眠っていたベッドから身を起こしてみる、服を肌け確認してみただと斬られた傷はまったく見当たらなかった。

「夢？」

そんな筈は無い、でも私の身体は怪我しているどころか逆にいつもより調子がいい、なんだか内側から溢れてくるような力を感じる。

「どうなってるの？」

暗殺者に襲われた時のことを思い出す、致命傷を負ってろくに動けない私に振り下ろされる黒い刃、その後その刃が私に届く事は無かったんだけど、どうしてだった？

「ん？何だ起きて・・・・た・・・・の・・・・」

扉が開きリョウが部屋に入ってきた。けど、どうして入り口で立ち止まっているの？

「お前は、何してるんだ・・・」

そう言われて自分が服を肌けたままなのに気付いた。

「!?!」

慌てて服を整えて晒していた肌を隠す。顔が赤くなっているのが分かる、凄く恥ずかしい。

リヨウが全然気にしていないように見えるのに何だかムツとする。

「調子はどうだ？何か変なところは無いかな？」

心配そうに訊ねてくる、どうしたんだろう？

「え？調子は今までに無いくらい良いけど・・・」

「そうか、まあ良かった、副作用が無いかだけ心配だったんだよね  
あ」

あ、そうだ、思い出した。暗殺者を一瞬でミンチにして助けてくれた、その後死にそうな私に死ぬか人を辞めるかの選択を迫ったりヨウのことを・・・

私は・・・人じゃなくなっても生きることが望んだ。この調子の良さはそのせい？

今の私は人じゃないの？姿形は変わってないと思うんだけど・・・あれだけの傷が一切見当たらないのだ、確かに私の体は人間を辞めてしまっているのかもしれない。

「顔色も悪くない、失った血も戻ったみたいだな」

「えっと、どうなってるの？」

「まあ、話さない訳にもいかないよな・・・」

説明する前に聞いておきたいんだが、この世界に吸血鬼っているか？」

吸血鬼？昔、そう呼ばれる魔族は居たみたいだけど・・・  
吸血鬼化の感染力が危険すぎて駆逐された為、今は居ない筈。

「そうか、居たのか・・・まあ、その吸血鬼とは別物だけど・・・」

吸血鬼と人間の混血？リョウって混血だったの？しかもあの桁外れの能力、間違いなく両親の良い所を受け継いだ良混血ね、その能力で私を半吸血鬼化して、リョウほどじゃないけど強化された自己治療能力で助かったってことか、体の調子が良いのは、身体強化の力が制御できてないから無意識に身体を強化してしまっているせい。

「ま、これでお前は吸血鬼だ、嫌なら今すぐ殺してやるぞ」  
バケモノ

驚きはしたけど嫌じゃない、人じゃなくなっても生きることを選んでるのは私だ、後悔はしていない。

「そうか・・・まあ姿は人の時と変わらないから今まで通り生活して大丈夫だぞ、あとは・・・気にしないでいいか、それぐらいだ、普通より長く生きられてラッキーぐらいに思っといてくれ」

ラッキー？今まで通りで問題ないみたいのかな？

何かまだ有りそうな感じだけど、これだけの力を得るのに代償が無いってわけ無いわよね。

「代償か？まあ、俺に対して俺を殺すような攻撃は出来なくなってる筈だ、本来この契約は吸血鬼が飯を確保する為の物だからな、俺に血を吸われることに快感を覚えるようになるが・・・まあ、俺は

普通の飯で栄養取れるからな、血を吸うこともないし、気にするよ  
うなリスクは無いと思ってい

「本当に私は運が良かったみたいね、ほぼ代償無しで人並み外れた力  
を手に入れた、強化の力を制御するには少し訓練が居るみたいだけ  
ど・・・」

「んじゃ、俺はマナのどこに行つて来る」

「姉さんのところ？」

「ああ、なんかまた戦いに参加してくれて言うから打ち合わせだ」  
「また?! 前にもあったの? リョウはゴルドの兵士つてわけでもない  
のに・・・」

「まあ、次の戦いでは離宮（こく）の兵士のみが前線に立たされるみたいだ  
からな・・・」  
「俺は離宮（こく）の連中が結構気に入ってるんだ、死なせないように暴れて  
きてやるよ」

「そう言つて扉に向かうリョウの背にお礼の言葉をかける・・・私を  
助けてくれたこと、離宮（こく）のみんなの助けになろうとしてくれている  
こと・・・」

「ん、気にすんな、俺はやりたいことをやってるだけだから・・・」  
「」

「うん、ありがとう・・・」

戦場は前回と同じ場所、封魔の陣が残ったまま・・・それは、俺にとって有利にしかないな、戦線に立つのは離宮の特異部隊、指揮官が・・・

「ん？フィリア、お前が指揮を取るのか？」

マナとフィリアから次の戦闘の細かい話を聞いていたんだけど、どうやらフィリアも特異部隊と共に前線に出るらしい、それも指揮官として。

「下手な指揮官をつけるよりその方が良いでしょう、最も私は撤退命令ぐらいしか出しませんがね」

前に、離宮の奴等には自由に戦わせたほうが良い動きをするって言うってたやつか・・・

「じゃあ俺も好きにやっていいんだな？」

「はい、貴方の活躍、期待しています」

「あまり期待しないでくれ、俺なんて殺ろうと思えば簡単に殺られるぞ。

まあ、前回と同じ場所なら俺に利が有るけど・・・」



魔法使いが相手じゃないなら人間相手に負ける気がしねえな・・・  
相手にしている奴が雑魚ばかりなのかもしれないけど・・・うん、  
油断しないようにしとこう。

「そういえば、諜報員の報告で有ったのですが、リョウイチさんマ  
テリアに何かしましたか？」

「お前なあ、見てたなら助けろって、その諜報員に言っとけ・・・  
まあ、やったって言えばやったな、あいつ前より死にくくなっ  
てる筈だ」

それと、少し訓練すればリアの奴、俺より強くなるぞ・・・劣化版  
の身体強化に魔法無効化の体質、俺だと魔法使いが天敵なんだけど、  
それをまったく気にしなくていいって・・・強すぎねえ？まあその  
辺は言わないけど。

「それは貴方の力？」

「説明する気は無いぞ、面倒だから・・・」

あまり自分のことを話すのは止めよう、厄介なことになるのは目に見えてる、いや、この世界ではどうか分からないか、元の世界で俺のことがばれたら大騒ぎになるのは間違いないしな、まあリアに説明するのは仕方ない・・・後で言触らさないように言っとこう。

「まあ、知らないほうが良い事って有るもんだぞ、気にすんな  
とにかく俺は次の戦いで暴れればいいんだろ？了解だ、じゃ、俺は  
これで・・・」

余計な事を聞かれないうちに逃げることにした。

なんか後ろからまだ何か言ってる声が聞こえるけど、聞こえない、聞こえない。

さて、それじゃひと暴れするか・・・

## 二章 1話 戦線

戦いの場は前回と同じ、俺には分からないけど封魔の陣もそのままだろう、魔法の使えない戦場で特異部隊と俺とフィリアが開戦に備えている、特異部隊に対しては特に指示を出さないで居るフィリアは、後方に控える騎士達への伝令に何か伝えている。

今回は防衛ではなくこの地を奪還する為の攻撃戦、この戦場さえ抜けてしまえばシルバーリーフの魔法部隊が存分に力を奮える。まあ、俺は特に気にしないでいいよな、とりあえずこいつらを出来るだけ死なせないように暴れてくるだけだ。

「ここって魔法が無効化されてるって話だったよな？」

隣でなにやらやっていたらソルダが俺に訊ねてきた。その筈だ、前は魔法部隊がまったく役に立たなかったからな、そのおかげで俺は魔法使いの相手をせずにすんだんだけどな。

「ああ、その筈だけどどうかしたか？」

「いや、さっきから試してみてたんだけど、何故か付加魔法が一部使えるんだ、自分に対する付加は出来なかったけど、武器に対しては使用できた、なんでだ？」

そう言ってソルダが自分の持つ剣を見せてくる、長さの違う2本の剣はそれぞれ赤と青の薄い光を帯びていた。魔法自体よく分からないからなんともいえないけどこれが付加魔法か、ソルダが言うには通常起動しているらしい。

「使える理由とか俺に聞かれても分かるわけ無いからな、使えるなら使えるでいいだろ？得したじゃねえか」

「・・・はは、字も読めなかったお前に聞いたのが間違いだったな、魔法の知識なんてあるわけないか」

ちよいムカついたけどまあ戦闘前だから今は赦してやる、戦闘が終わったら覚悟しとけ・・・

「とりあえずフィリアに伝えて来る」

「おう、頼む、フィリアさんとかはオレみたいな一般兵じゃ気軽に話しかけたり出来ないからな」

ソルダは元貴族ってって聞いたような気がするけど

「元だ、元貴族、好き勝手生きてきたから政の知識や商才とかも無い、貴族じゃなくなった事は戦うしか能の無いオレには丁度良かったんだよ」

貴族から一般人になってよく性格がゆがまなかったなあ・・・

フィリアに話しかけるくらい気にしなくていいと思うが、俺の感覚は基本この世界じゃ通用しないか。

とりあえず付加魔法が武器に対して使えることを知らせると、急遽付加魔法の使える魔法使い達が集められ特異部隊の武器に付加魔法をかけていった。この作業で特異部隊の進行開始が少し遅れることになった。

「もういいだろう、お前はここまでだ、これ以上付いて来るな」

戦争を止められないのか、兄さんが自らの部隊を率いて城を出てからも説得を続けて来たけど、兄さんはまったく話を聞いてくれない。もうじき封魔の陣を張った戦場まで着くという所で僕は残るように言われた。

「でも！ゴルドの部隊、規格外の化物が居るって！深紅の魔王の話はルージュの兵士達の志気を確実に下げてますよ！」

撤退する部隊の殿を1人でこなし、戦場では魔槍の威力もあり恐れられていたもう1人の兄を素手で討って見せた男、その噂は実際にその強さを体験した兵士達から広がり、兄さんだって耳にしている筈だ。

「それがどうした、そんなもの関係無い、噂の深紅の魔王であつても俺の部隊には敵わないさ」

駄目だ、先の戦いで死んだ兄さんもそうだったけど、自信過剰すぎる。

兄さんの部隊は生き残ってもそれ以外の者に被害が出てしまう、それじゃ何も守れないじゃないか！

いや、兄さんを守るなんて意識は無いのか、この戦争もルージュが

仕掛けたものだ。兄さんは只力を振るいたいだけじゃないのか・・・  
そうは言っても僕1人で今のルージュを止められない、兄さんが止  
めると言ってくれればそれで戦争は止められるんだろうけど・・・  
今、僕に出来ることはもう無い。

慌てて付いて来た為僕は碌な装備をしていない、このまま戦線に同  
行するのは自殺行為だ、仕方ないので兄さんたちを戦場に送り出す。

僕はこれからどうすればいいんだろう？兄さんは僕の説得には応じ  
てくれない、ならどうやってこの戦いを終わらせる？僕1人で出来  
ることなのか？いや、無理だ。出来るならとくにやっている、僕  
はどうすればいいんだろう・・・

---

魔法の封じられた戦場でゴルドの特異部隊が暴れています。

単体の戦力は近衛隊にも劣らないと聞いていましたが、これ程とは  
・  
・

「ヒヤハハ！潰れろ！」

金槌を振り回し敵兵を鎧ごと粉碎する者、目が多少逝ってるところ  
が、流石特異隊ですね。

「いい武器発見！狩るぜ！」

相手の武器を奪い背負った籠に詰め込んでいる者、武器収集者です  
か・・・

「逝っちゃえ♪」

華麗な斬撃で男性の急所を斬りつけていく者、エグイですね。あの兵士、何故斬りつける時に全身が一瞬ぶれて見えるのでしょうか？

「一瞬全裸になって斬りつけた後また着なおしてるな、スゲー早業、別の事に生かせよ・・・」

リヨウイチさん、さっきまで最前線で暴れていたと思うのですが？  
いつの間に戻って・・・？一言言って直ぐに最前線に戻っていった！？  
私の考えを読んでそれだけ言う為に戻ってきたんですか！？

この戦場で彼の存在は大きいですね、良くも悪くも深紅の魔王の噂は敵味方両陣営に広がっています。見方の志気は上がり敵の志気は下がる、その上、殆んどの特異隊は目が逝ってる者ばかり、相手をするのは凄く嫌でしょうね。

と、こちらが有利なように見えますが、そういう訳でもないんですよ、特異隊の個々の戦力は高いかもしれませんが連携がまるで成っていないうえ、数も敵のほうが多い、リヨウイチさんの存在と特異隊の異常さで何とか戦況を少し有利に見せているだけです。

これ以上相手の援軍が来る様なら撤退も考えた方がいいでしょうね、それを何度も繰り返す、そうして少しずつ相手の戦力を削っていくしか特異隊のみでこの戦いを勝利することは不可能でしょう。まあこんな作戦もリヨウイチさんが1人で殿を勤められるからこそその作戦ですけど・・・

「フィリア様ルージュ方面から増援を確認しました！」

来ましたか、では作戦通り・・・

「撤退の合図を！殿にリョウイチを残し撤退してください！」

---

ん？合図が出たな、撤退か・・・

「おいソルダ、撤退だって周りの奴等に伝えて来い、あいつら合図に気付いてねえ」

つつたく、夢中になりすぎだ・・・

「うふふ、可愛いよ、くあゝいいよおゝ」  
気絶させた敵を女装させる女、どこにその服持ってたんだ？、顔は良いのに性癖がヤバイな。

「ははは、全て曝け出せ！」

敵を傷つけず鎧や身に着けている物のみを切り裂く鼻血を出す男、相手も男ってのがヤバイな・・・

「あいつらに近付けど？勘弁してくれ！」



「却下だ、いいから逝って来い」

強制的にソルダに面倒ごとは押し付ける、まあ俺は殿を果たさなきゃいけないからな、さっさと逃げてくれ。

あ、さっきの男に服を切り裂かれたけどなんとか説得したみたいだ、あいつ全裸でどうするんだろう？

お、今度はさっきの女、ソルダの背後から近付きゴスロリのドレスを着せた、やっぱりどこから出したか分かんねえけど、全裸よりはマシじゃねえ？

女も説得したのか？一緒に撤退して行ったな、まあソルダの貞操が無事なことを祈っておこう。

さて、見たところこっちの被害は無いみたいだ、多少の怪我はしていても死体になって戦場（こゝ）に残っている奴は居ないな、よし、時間を稼ぐか・・・

「さあ、前にも言ったが、ここからは俺が相手だ、魔法が使えないことを後悔しろ」

## 二章 2話 力の制御

リヨウたちが戦いに行き離宮は戦えない者と少しの護衛のみ、凄く静か・・・

私は離宮こくから離れると皆に迷惑をかけるので留守番なんだけど、リヨウに供血者きょうけつしやの力（リヨウの吸血鬼の力とは少し違うらしい）を制御する方法を教わり一人で特訓中だったりする。

力の制御は力の方向性を想像すること、どの程度強化したいか、どこを強化したいか、後は熟れらしい。

実際、数日間の訓練が続けているけど、日に日に力を制御できてきているのが分かる。

「リアお姉様すごい！まるでリヨウお兄さんみたい！」

リリカ？いつの間にここに？って、見られちゃったわね。

「リリカ、また来たの？頻繁に来ちゃ駄目って何度も言ってるのに」

この子には何度言っても無駄かもしれない・・・

「皆出かけてて退屈なんだもん」

そうか、皆戦いに出ていてリリカの相手をする人が居ないのか、って家庭教師はどうしたの？

「お勉強はどうしたの？」

「嫌なの！あの先生目つきがいやらしいもん！ハアハア言ってる怖い！」

え？女の先生だったと思うんだけど？

「そんなことよりあそこ行きたいの」

そう言って離宮の上を指示す、えっと・・・私に跳べって事かな？力の制御がどれくらい出来ているかを試すのにやってみようかな。

リリカを背負い足に強化を掛ける・・・そして跳んだ、リョウがやるように軽々と屋根の上まで跳び上がることが出来た。

「はい、着いたよ」

凄い凄いとほしゃぐりリカを背から下ろして、一応私の力のことは黙っておくように言っておく。

「じゃあアタシも凄いのリアお姉様に見せてあげるね！」

そういつて何かを取り出した。蒼い宝石の付いた首飾り？マジックアイテムかな？って、マジックアイテムも私の側じゃ機能しないんだけど・・・

「いくよー！ブルーエクレール！」

宝石が光りだした！そんな、魔法の類は全て消える筈なのに！

宝石からでた光が大きくなり、リリカを包み込んだ、数十秒後弾けるように光りがかき消える。

「マジックプリンセスリリカ！可憐に登場！」

「・・・・・・・・・・は？」

可愛い衣装に身を包んだリリカが現れた、ごめんなさい、状況が理解できないわ。

「ね、すごいでしょ！」

「はは、そうね、可愛いわよ」

確かに凄いのよね、今のってマジックアイテムだね、私の消魔の体質を凌駕する程のマジックアイテムで衣装を変える効果って、悪ふざけに全力なの？

リリカの首に下げられた蒼い宝石から強力な魔力が感じられるけど・

え？魔力を感じる？そんな馬鹿な、消魔の体質を持つ私が魔力を感じるなんて有り得ない。

「まさか、リョウの血のせいで何か変わった？」

今まで感じなかった魔力を感じる、私の内にリョウから貰った供血者の力とは他に違う力を感じる。

これが魔力？だったら消魔の力はどこに行ったのだろうか？

「あれ？」

再度消魔の力を意識した瞬間に内に感じていた魔力を感じなくなつた。同時にリリカが元の服に戻る。

マジックアイテムの力が消えた？これってまさか・・・さっきマジックアイテムが機能したのは消魔の力が収まっていたから？

「消魔の力を制御できる？」

いや、まだ分からない、試してみよう。

私はリリカに協力してもらい消魔の力が制御できているのかを確かめた。

結果・・・力は制御できた。私の意志で消魔の力を入り切りできるよだった。

供血者の力は思わぬ所に作用したみたい・・・

「リアお姉様、泣いてるの？」

・  
リリカに言われて気付く、私の頬を暖かいものが伝っているのを・

長い間この力のせいですつと離宮に閉じこもっていた。

私は今、生まれて始めて自由を得た・・・

リヨウ・・・本当にありがとう。

## 二章2話 力の制御（後書き）

今回は短め・・・

## 二章3話 対魔剣部隊

「何だあれは？」

特異部隊の撤退の為1人戦場で暴れていたんだが、敵の援軍が視界に入り思わず声をあげた。

たった一部隊だが雰囲気が他の兵たちと違う、防具の方は他の部隊と同様に揃えられているが、武器がまったく違う、種類、形状、1つとして同じものがない。

「なにより、雰囲気が禍々しい、これは・・・前の時のあいつが持ってた魔槍とかの類か？」

まさか一部隊全員が魔剣を所持しているのか？

この戦場に張られた封魔の陣も魔剣類には機能しないみたいだし、厄介だな。

まあ、やるしかないか・・・

「貴様が深紅の魔王のようだな、確かに、その力我等の脅威となりうるな」

なんだ？敵の援軍の中からこの前殺った男に似た奴が出てきた。この部隊の指揮官か？

「まあ、俺の部隊の力を試すには丁度良い、全軍かかれ！！」

ちっ！攻めて来やがった！これは加減してらんねえな。



アイアンブラッド  
「鉄血」

身体強化を掛け、それぞれの魔剣を手襲いかかってくる敵に仕掛ける。

先制攻撃、何を仕掛けてくるか分からない、やられる前にやる！

「疾風を刃とする！」

「闇よ！」

2人の意識を刈り取った所で横から風の刃が迫る、身体能力に任せて避けるが避けたその先に展開された黒い靄に突っ込んでしまう、視界が奪われた、慌てて離れ靄から抜け出すと目の前に槍を構えた男が・・・

「ちっ！」

そのまま男に突っ込む、男の顔面に拳を・・・

センブウソウ  
「旋風槍！」

くそ、拳が届く前に風で吹っ飛ばされた。

「大地よ！」

ダンスフレア  
「炎舞」

着地点の地面を溶かされた、足を取られた所に炎の渦が迫ってくる。身を焼かれながら何とか泥地を抜け出す。

大量の敵に魔法のような詠唱無しで魔法と同じような力を行使され手が追いつかない、回避と防御でまったく攻撃が出来ない上に回避しきれない攻撃のダメージが蓄積されていく、身体強化に全力を注いでいる為自己治癒の強化をしている余裕が無い。

あんまりやりたくないんだけど、ブラッドドライブ血流爆発やるしかないか、怪我した体でどこまでもつか？ けどな・・・

既に俺は周りを敵に囲まれている、特異部隊の撤退の時間稼ぎは十分出来ただろうけど、俺が逃げられなくなった。

「やっぱり魔法の力は厄介だな・・・」

ブラッドドライブ血流爆発を発動させる、血が燃え、身体能力が更に向上する。

強化した足で大地を踏みしめ、碎く、何人かは足を取られて体勢を崩した、そこを目掛けて突破を試みる。ブラッドドライブ血流爆発は長くは持たないさっさと逃げるに限る。

「クイック」

「疾風を纏う」

「縛」

一応包囲からは抜け出したので、後は撤退するだけ・・・と走り出そうとした俺の目の前に2人立ちはだかる、止まらざる終えなくなった俺の足が光る枷でその場に縛られる。

不味い、後はまだ魔剣を持った奴等が何人もいる、前には動きの早い2人、俺の動きは封じられている分さっきの包囲された状態より状況は悪い。

力任せに拘束を解こうとするがびくともしない・・・

「なかなか化物じみた動きをするな、だが、俺の部隊の敵ではなかったな、はっはっはは」

くそ、さっきの男か、こいつムカつくな・・・

「さあ、とどめと行こうか！」

このままやられるつもりは無い、地面を殴るり砕く、よし拘束が取れた。

「簡単にやられるか！」

砕いた地面の手ごろな塊を敵に向かい投擲する、以前魔物に対して使用した攻撃法だけど、今は血流爆発中、威力はあの時の比ではない、高速で飛んでくる石をまともに喰らえば只じゃすまない（弾け跳ぶよな）だろうけど・・・気にしてられない！

「反射」

敵の1人が俺の投げた石を剣で迎え撃った。石がそのままの速度で俺に返って来る！

「くそ！これも魔剣の力か！？」

石は何とか避けたけど、これじゃ何やっても誰かの持つ魔剣で対抗される、やっぱ隙を突いて逃げるしかないか・・・

「もういいぞ、退け！」

指揮官の男が急に隊を引かせる、まあ退いた隊と俺を挟んだ反対側には、さっき回りこんだ二人がいるから挟まれてる事に変わりはないんだけど。

指揮官の男の持つ剣が、さっきからバチバチと雷光を弾けさせている、あれはヤバイだろ？

「集雷完了、さあ覚悟しろ」

「冗談、んなもん喰らうか、兵を退かせたのは間違いだったな、逃げさせてもらうぞ」

撤退するには回り込んでいる2人を片付ける必要がある、魔剣持ちだけど2人くらい何とかなるだろう、

「俺の雷から逃げられると思っているのか？ははははは！」

やっぱあの男はムカつく、でも今は逃げることで考えよう、魔剣持ちの部隊全員を相手にするのは俺じゃ無理っぽい。男に背を向け逃げる為、回り込んで立ちはだかつている2人に攻撃を仕掛ける。地面を蹴り上げ目暗ましにして1人を殴り飛ばすことに成功、もう1人は無視だ、横をすり抜け全力で駆ける。

「疾風を纏う」

横をすり抜けた男が直ぐに追いついて来る、近付いて来たところに回し蹴りを放つと剣に防がれた。普通なら足が切られるだろうけど俺は鉄血で足を守っている、剣を明後日の方向に弾き飛ばした。剣をアイアンブラッド手放してしまった男は急に減速する、やはり魔剣はちゃんと持っていないと力を使えないか・・・

「逃げるか？ 無駄だな！ 走れ雷蛇」

くそ、もう後を見てる余裕なんて無いぞ、とにかく走る！

あゝくそ、背中がちりちりする、ヤバイヤバイ！ 後からなんかやばいのが来てる！

「あが！」

追いつかれた・・・俺の身体に巻きつく黄色の蛇、雷蛇って言うってたな・・・雷か、いくら身体強化してるって言っても雷喰らって無事でいれる訳無いよな・・・

「くっ！ ああああああ！ ！」

くそ、ブラッドドライブ血流爆発も限界だ、これ以上は続けられない・・・

失敗したなあ・・・もう少し何とかなると思ったんだけど、ここが俺の限界か・・・

「ああ・・・く・・・そ・・・」

エルリオール  
この世界の神さん、すまねえな・・・約束、果たせそうに無い・・・

## 二章4話 ジン ソード

ルージュ軍の司令官の放った雷の蛇に締め付けられリョウイチが意識を手放した。

「ふ、やっと片付いたな・・・」

司令官は雷の蛇を消しリョウイチにとどめを刺そうと近付いてくる。

「爆碎・雷轟刃！」

リョウイチと魔剣部隊の間で爆発が起こり、司令官を後退させる。

「なんだ!？」

「ふう、どういう状態だ？」

爆発で起きた煙がはれるとリョウイチを守るように1人の剣士が立っていた。

「まあ、とりあえずロウガ、カリン、リョウイチを頼む」

「うん、あたし達じゃまともな治療は出来ないからゴルドの軍に引き渡してくるね」

「ジン、オレ等の目的は後回しだ、今はリョウイチを助けることを優先させろ」

獣人の男と黒髪の女が剣士の声に答え、リョウイチを運ぶ為に近付いてくる。

「分かってる、リョウイチには借りがあるからな、時間稼ぎだけにするさ」

まあ、魔剣二・三本は折って来るつもりだけだな・・・」

リョウイチを抱えゴールド軍のほうへと退避する2人を見送り、ジンはルージュの指揮官剣を向ける。

「妙な結界を張ったみたいだな、魔法を封じる類の物か？魔剣は普通に使えたりと穴が多いみたいだけだな」

「ち、貴様邪魔するか、せっかく噂の深紅の魔王を討つ好機だったと言うのに・・・」

「あいつには借りがあるからな、さて退く気は無いか？」

「は、馬鹿が、たかが剣士1人で何をほざく、俺の魔剣部隊に敵うとでも思っているのか？」

馬鹿にしたように言い放つ指揮官をジンは更に馬鹿にしたような目で見て言う。

「さっきの爆発、見てなかったのか？」

「お前の持つ剣も魔剣だというだけだろう？数で勝る俺が負ける筈無いだろう！」

「確かに、こいつは魔剣・・・いや、それ以上の物だが、さっきの

は剣の力じゃない、魔法剣士である俺の力だ。魔法剣が使えるとは、やっぱりこの結界穴だらけだな」

魔法剣、武器を媒介として魔法を行使する力だが、その使用は産まれたき魔法剣の力を持つ物しか使用できない、幼い子供には暴走の危険もある力だが細かいことは今はいいだろう。

「ふん、だからなんだ！数ではこちらが上だ！その上俺の部隊は全員が魔剣を所持している！退く必要がどこにある！？」

「まあ、どうでもいいけどな、やるなら覚悟しろ、俺は刃の破壊者だ、

俺に破壊できない武器は無い、たとえそれが魔剣であろうとも変わらない」

戦場を駆ける魔法剣士は敵の魔剣による攻撃を魔法剣によって受け流し、打ち払う。

特定の効果しか生まない魔剣に対して魔法使い同様の手数を見せる魔法剣で対抗する。

数で劣るジンが魔剣部隊と拮抗した戦いを繰り広げていた。

「ラピア、輝力キリヨクの蓄積率は？」

1人で戦っているはずのジンが質問を投げかける、直ぐにその問いの答える声がする、ジンの持つ剣から発せられた声はしっかりとジ



ンに届いた。

『だいたい85%位です！マスター』

「85%、それじゃあ半分くらい潰すのがやつとか、まあ今回は時間稼ぎだ、二・三本斬って逃げるとするか・・・輝跡解放、刃断<sup>ハダン</sup>」

ジンの持つ剣が輝きを放つ、その剣で近くにいた兵士の魔剣をバタ―のように斬り裂いて見せた。

「な！」

魔剣を斬られた兵士達から驚きの声上がる。

「粉碎・狂風刃！」

大地を砕き砂の煙幕を張り、ジンは敵が上手いこと混乱している間にまんまと戦場を離脱する。

「今回は4本か・・・まあ、全部破壊するのは次だな・・・」

封魔の陣の外側、ゴールド軍の本隊を待機させた陣営まで戻り特異部隊の被害を調べていた。

「凄い、あれだけの戦闘を繰り返しながら死者、重傷者共に皆

無、軽傷者も数名・・・」

特異部隊の個々の戦力がこれほどとは、性格に問題の有る者も確かに居るみたいですけど、この部隊が捨て駒だなんておかし過ぎる。

マナ様が彼らを捨て駒にしたくないと言った訳が分かった様な気がします。

「フィリア様！大変です！」

特異部隊の男性が1人が慌てた様子で報告にきましたが、大変なのは貴方の格好の方では？

女物のひらひらのドレスを着て、頭にピンクの大きなリボン、あ、少し似合っていますね。

「リョウが重傷で運ばれて来ました！早く治療を！」

「っ！」

リョウイチさんが！敵の援軍はそれほど多くなかった筈、精鋭で固められていたのでしょうか？いえ、今はそれよりもリョウイチさんの治療を優先しないと、今彼に死なれるのは非常に不味い。

「今直ぐリョウイチさんの所へ案内してください！」

治癒魔法隊で手の空いている者は全員私に付いてきて下さい！」

リヨウイチさんの身体は火傷や切り傷だらけ、意識は無く確かに酷い状態だった。

「やっと来た！早く治癒魔法を！」

リヨウイチさんの介抱をしていた黒髪の女性と獣人の男性が急かして来ますが言われるまでもありません。

「治療隊！魔力を使い切っても構いません！全力で癒してください！」

この後の戦略を気にしている余裕はありません、今ある作戦は全てリヨウイチさんを中心として立てられています。ここでリヨウイチさんを失うことは勝てる作戦が無くなるという事、それだけは阻止しなくてははいけません！

なにより、ゴルドの兵でもないのに協力してくれているリヨウイチさんを死なせる訳にはいきません。

意識は戻りませんが治療は問題無く終わりました。しばらくすれば意識も戻るでしょう。

ところで、リヨウイチさんを介抱していた二人は誰でしょう？獣人の兵士なんてゴルド軍には居なかった筈ですけど・・・

「ロウガ、リヨウイチは助かったか？」

いつの間にか黒髪の剣士が二人の側に来ていました。彼も見覚えが

有りませんね・・・

「ああ、流石ゴルドの魔法使い達だ、傷の方は完全に癒えたみたいだ、直に意識も戻るだろう、まあ、ここに運んで来る最中に既に信じられないくらいに自己治癒が始まってたけどな、何者だ？こいつ」

「まあ、これで借りは返せたかな・・・」

「貴方たちはいったい？」

おそらくリョウイチさんを助けてくれたのであろう3人に説明を求めめる。

「わ、この人もしかしてエルフ？」

「ん？多分そうだな、耳尖ってるし顔立ちも整ってる」

「確かに綺麗な人、羨ましい・・・」

目の前で綺麗とか言われると照れてしまいます。

「カリンだって充分綺麗だろ？」

「ロウガ・・・」

「「・・・・・・・・・・」」

黒髪の女性と獣人の男性がそのまま良い雰囲気突っ走って行きます・・・

自分が褒められるよりこういうった場面を見せられる方が照れてしま

うのですが・・・

「あゝこいつらは放つといってくれ、俺たちは只の旅人だ、偶然ルージユの魔剣部隊つてのを潰しに来た所でリョウイチを見かけてな、こいつには以前に借りも有ったから助けさせてもらった」

援軍は魔剣部隊、確か少しだけ噂になっていましたね、直ぐに噂も消えたのでデマだと思っていましたけど、どうやら本当に部隊全員が魔剣を所持している隊がルージユには存在しているようですね。

「そうですか、ありがとうございます。でも、偶然魔剣部隊を潰しに来たって言うのは・・・」

怪しいですけど、彼らが敵だとするならリョウイチさんを助ける理由が有りません、ここは信用しても大丈夫でしょうか？

「無理が有るか？ だけど事実だからな、俺の名前はジン ソード、魔剣鍛冶師グラフト ソードの孫だ、爺さんの造った魔剣を破壊する為の旅をしている、魔剣部隊の中には確実に爺さんの造った魔剣が有るからな、実際にさっき確認してきたら半分くらいは爺さんの造った魔剣類だった。まあ、あっちの2人は俺に付き合ってくれてるだけだな」

伝説の魔剣鍛冶師の・・・確かに彼の魔剣は放置しておくには危険な力です。彼が孫と言うのが本当なら破壊の為に動いていてもおかしくは有りませんね。

「今その魔剣部隊は？」

リョウイチさんですら重傷を負った部隊、どう対処すればいいので

しょう？

「一旦退いたみたいだな、まあ心配するな、魔剣部隊は俺たちが潰すから・・・」

ジンさんはそう言いますが今ルージュと争っているのは私たちです。まかせっきりにするわけにもいかなないので協力を申し出ました。

「ああ、まあ助かるよ、俺たちも多対個だと限界が有るからな、無理しない程度に敵をひきつけてくれると助かる」

いえ、リョウイチさんの敵わなかった部隊から、リョウイチさんを助け帰還した。そんな彼らが魔剣部隊と戦ってくれるなら、助かるのは私たちの方です。

「では、リョウイチさんが目を覚ましたら魔剣部隊との戦いに挑みます。いいですか？」

「ああ、俺たちの方は問題ない」

## 二章5話 カオスアルマ

（お兄さん、大丈夫ですか？）

「あ？ここ何処だよ」

白い花と紅い花、あと雑草の茂る海に見える丘、空には夜の闇に映える紅い月。

エルリオールか？どうやら俺は生きてるみたいだな、だが本当にここは何処だ？

（今回はお兄さんの夢の中ですよ、僕がエルリオールに直接姿を現すわけにはいきませんから、お兄さんの夢の中に入らせてもらいました）

この頭に響く声、エルリオールの神様か・・・

（分身ですけどね）

何でそんなに楽しそうなんだ？ってか神様がまた出て来たってことは、やっぱり俺死んだのか？

（死んでませんよ！ここはお兄さんの夢の中って言ったじゃないですか、お兄さんはちゃんと生きてますよ、ゴルドの陣営に運ばれて治癒魔法で傷も癒え、今は眠っているだけです）

そうか、まだ生きてるんだな、神様オマエとの約束も果たせてないし、すまないと思ってたんだよな・・・

（そんなこと無いですよ、お兄さんは既にエルリオールに結果を残しています。）

シルバリーフの隠された姫騎士、マテリアさんですけど、お兄さんが居なければあの夜、死んでいたでしょうね、お兄さんの血は彼女の内に宿る力にも影響したようすし・・・）

リアの消魔の力にも影響したのか、この世界の人間に俺の血って、副作用どころか結構相性良いのか？まあ、リアがたまたま相性が良かったって可能性の方が高いから無闇に供血するのは避けるけど。

（つと、まだちゃんと生きてるんですから、こんな話は要りませんね、今日はお兄さんとした約束を果たす為に来たんですよ）

「約束？俺がエルリオールを救う為に行動するってやつか？」

（いえ、僕がお兄さんに力が必要になったらその時、僕がお兄さんに力を与えるってやつです）

ああ、そんな約束もしたようないような、あんまり気にしてなかったからはっきり覚えてないけど・・・

（ま、もう渡しちゃった後なんですけどね♪）

こいつ久々の登場にテンション上がってるのか？多分もう出番も無いだろうしここは何も言わないで置いてやろう。

「はあ、で？使い方は？」

（ふふふ、力はもうお兄さんの物です。聞かなくても既に理解して



いる筈ですよ！うん、説明が面倒だったとかじゃないですからね！

「そうか、なら俺はもう行くぞ、あの魔剣部隊、放っておくと特異部隊のやつらが殺られちまうからな」

（はい、どうかこの世界のことよろしくお願いしますエルリオール）

「ま、適当にやるさ・・・」

俺の意識は紅い月の浮かぶ夜の世界から遠退で行く・・・

（僕に残された時間もそろそろ無くなるようですしね・・・）

ん？あいつ、何か言ったか？

最後に何か聞こえた気がしたけど俺は確認する間も無く意識を覚醒させる。

「怪我人を野外に放置ってどうなんだ？」

目が覚めたら青空が見えた。まあ魔法で傷は癒されているみたいだからいいか。

「目が覚めたか・・・」

ん？こいつは、ジンか？確か魔剣鍛冶師の孫で魔剣を破壊か回収してるんだよな。

「ジン？何でお前が居るんだ？」

「おいおい、わざわざ助けてやったのにそれは無いだろう？」

ああ、こいつがああ状況から俺を助けてくれたのか。

「悪い、助かったよ・・・」

「おう、これで前の借りは返せたか？」

「充分すぎるな、ありがとう・・・」

身体を確認する、うん、問題無いな、本当に傷は完全に癒えているみたいだ。

「さて、俺たちは魔剣部隊を潰しに行くけどリョウイチはどうする？」

「当然！俺も行く！」

さて、<sup>アイツ</sup>神様に貰った力ってのを奮ってみるか・・・

さっきの戦闘とは数が違う、魔剣部隊に俺1人じゃなく特異部隊の奴等とジン達三人を加えて挑む。

1人でいるよりも狙われにくくなっているので、前より余裕を持って動いている。

特異部隊の奴等はクセがあるけど魔剣相手でも引けを取らないだろう、ジン達の実力は知らないが魔剣部隊から俺を救出したんだし心配する必要ないだろう。

別に貰った力を使わなくても勝てるんじゃないか？ジンが異常な強さを見せてるし・・・なんだよあの力？魔剣がバターか何かみたいに斬られていってるよ・・・

まあ、使わなくても勝てそうでも、貰った力、ここで試すんだけど

な！

相変わらず戦場は魔法が使えない、だけど確信している、俺の貰った力には封魔の結界なんて関係ない。

魔剣を持つ敵兵に近付きおもむろに魔剣を握む。

「な！この！離せ！くそ！燃えろ炎刃！」

剣に炎が灯る、俺の手を焼いていくが気にせず力に力を紡ぐ・・・

「力を秘めし魔の刃・・・

今一時、この身体みは汝を糧とする・・・

理を越え、朽ちたるこの身体に魔を宿す・・・

朽ちたるこの身体をを鞘とする・・・

魔剣武装！カオスアルマ」

握んでいた魔剣が光を放ち弾けるように消える、代わりに俺の瞳が赤く染まり周囲に炎が揺らめきだす。

魔剣武装、力を持つ武器を一時的に身体に取り込み身体を強化しその武器の能力を行使する。

今の場合だと、相手からは武器を奪い、俺はパワーアップするといった反則的な力だ。

「さて・・・・・・・・暴れるか！」

## 二章 6話 再戦魔剣部隊

リョウイチが炎を纏い戦場を駆け回る、いったい何をやったのか分からないが、そんなことが出来るなら最初からやっておけよ、これなら俺たちが助けなくても大丈夫だったんじゃないか？

俺は俺で魔剣を片っ端から破壊して回る。

俺の持つ剣は爺さんの最後の作品で希少金属【星鋼】を錬鍛し光の精霊の魂を込めて創られている。武器（特に魔剣）に対して絶大な破壊力を持つ魔剣を超えた武器。魔剣部隊にとっては天敵<sup>敵</sup>と言えるだろう。

『マスター、輝力<sup>キリョク</sup>残量50%を切りました』

魔剣部隊を半分ほど潰しただろうか？ここで俺の持つ剣から声が聞こえてくる、光の精霊の魂を込めて創られていると言ったが、その精霊の人格が剣に宿っているのだ、武器を破壊する剣の力、刃断<sup>ハダン</sup>などを使用するために必要な輝力の蓄積量と、能力の使用を管理していてくれる。

「リョウイチも頑張ってるし、残しといった輝力だけで足りそうだな」

『はい、マスター1人で相手をしていたら確実に足りませんでしたけど・・・』

「分かってる、だからさっきの戦いでは頃合を見て逃げただろ？」

『はい』

「ま、もう少しだ、リョウイチに負けないように暴れるぞ！」

俺の剣の名は、天燐の剣、魔剣の粹を超え奇跡の刃に近付いた、天剣と呼ばれる人が叡智によって創り出した奇跡。

「魔剣如きじゃ相手にならねえよ！」

魔を纏う、魔剣武装<sup>カオスアルマ</sup>か・・・さっき取り込んだ魔剣、俺が掴んだ時炎を出したんだよねあ、俺の周りに火が舞ってるのはそれか？さて、今取り込んでる魔剣は単に火を出すっただけみたいだな。あと、火に対する抵抗も上がってるみたいで俺の周りで舞ってる火が全然熱くない。

「おまえ、何だそれ？魔法じゃないよな？」

ソルダ、お前こそなんだその格好、着替え無いのか？こいつゴスロリドレスのままじゃねえか、え？目覚めたのか？微妙に似合ってるけど止めとけ、殴るぞ。

「って！何で殴る！？」

「その格好で俺の前に出て来るな、変態」

「違！好きで着てるんじゃないねえ！」

まあ、そうだろうな。好きでやってるならお前とは縁を切るぞ。

「まあ、死なない程度に頑張れよ、俺もジンにアイツ負けないように暴れてくるからよ」

炎を纏ったまま俺は混戦の中に突っ込んでいく、俺の周囲に渦巻く炎を強化した手に集め敵の1人を後から殴る、炎が鎧を焼き俺の拳を直接敵の体に届かせる。

面白いように飛んで行った。周囲の敵と味方を巻き込んで吹っ飛んでいった。

やべえ、味方も巻き込んだな、次はちよつと注意しよう。

魔剣部隊を半分ほど潰したか？ジンの活躍が大きいな、負けてらんねえ！

「くそ！こんな筈じゃ！俺の魔剣部隊は最強なんだ！」

「なんだ？俺1人に何人か殺られるような部隊が最強なのか？」

こいつ、敵の司令官だよな、これぐらいで取り乱してたら直ぐに全滅するぞ、まあ、敵だからいいけど・・・

「ちっ、死に損ないが！！」

「へっ、さっきまでの俺とは違うから、覚悟しろ」

拳の炎を周囲に戻す、こいつの雷に炎でどれだけ対抗できるか分か



らないけど無いよりはいいだろう。

「もう一度喰らわせてやろう！ 走れ雷蛇！」

さすが雷、速いな・・・放たれた雷の蛇が回避行動に出ていない俺に瞬時に迫る、巻き付こうとする雷を炎を集めた拳でぶち抜く。

雷が弾け火花が飛び散る、雷蛇は消すことが出来たが俺の纏っていた炎も消え瞳の色が元に戻るカオスアルマ魔剣武装が解けた、俺から離れ魔剣に戻った剣が碎け散る。

ちっ、取り込んだ魔剣よりあいつの魔剣の方が力が上か、でも前の時、雷蛇を使うのに時間がかかる感じだったし、今の内に・・・近付いて魔剣を掴む。

カオスアルマ  
「魔剣武装」

「な!？」

掴んだ魔剣が光を放ち弾けるように消える、光は俺の身体に取り込まれ俺の瞳が紫に染まる。

敵の武器は奪った、後は・・・

「ぶっ飛ばす!!」

雷の魔剣を取り込み、俺の速さは強化され攻撃が鋭さを増す。敵指令は俺の拳を顔面に喰らい吹っ飛んでいった。まあ、死んでなくても暫く動けないだろう。

最早ぶっ飛ばした奴への興味は無い、俺は再び戦場を駆け暴れ回る。  
もう直ぐ決着だ・・・

魔剣部隊の戦闘は、魔剣の全破壊と言う結果で終わりを迎えた、戻った部隊の中に兄さんの姿が無かったけど戦死してはいないらしい、兄さんがこれで終わると思えない僕は、この戦争を終わらせる為にゴルドの陣営に訪れていた。

「ん？お疲れ、多分暫くは交戦は無いから今のうちに休んどけつてよ」

ゴルドの陣営で僕が初めに会ったのは銀髪の僕と同じ年頃の男性だった。

あれ？銀髪？この大陸じゃシルバリーフの血筋以外で銀髪は珍しいんだけど、この人シルバリーフの王族の1人かな？なんか僕を味方と勘違いしてるみたいだけど・・・

「すみません、司令官はどちらにいらっしゃいますか？」

「司令官？ああ、フィリアなら向うだ、何か有ったのか？まさかもう、次が攻めてきたとかじゃないだろうな？

こっちは一回死にかけてるってのに、少しは休ませろよな・・・」

兄さんの魔剣部隊との戦いは壮絶だったようですからね。

「まあいいや、こっちだ、付いて来い」

銀髪の方に案内されてたどり着いた場所で綺麗なエルフの女性が、数人の騎士達と共ににやら話し合っていた。

「あ、リョウイチさん！どこ行ってたんですか！まだ作戦会議は終わってませんよ！」

「俺は暴れるだけだろう？難しいことは任せる、なあに、ちゃんと役に立ってやるよ」

「それでも、作戦をもう一度説明する手間がですね、あら？そちらの方は？」

銀髪の人に説教を始めたエルフの女性が、ようやく僕に気付いてくれた。

「会議中失礼します。僕の名はライネス、ライネス フレイムロウ、この度の戦いにおいてお願いが有ってまいりました」

「「フレイムロウ！！」」

さて、ここからは失敗できないぞ、この戦いを終わらせる為、国の民みんなを守る為に・・・

「くそ、俺の部隊があんな奴等に負けるなんて！このままじゃ絶対に済まないぞ！」

戦場から少し離れた森の中で魔剣部隊の司令官、ルージュ国の第一王子、ハイレル フレイルムロウが悪態をついていた。そこに、フードを目深に被ったローブ姿の男が近付いて来た。

「力が必要か？」

「お前か、ああ！必要だ！魔剣でも魔獣でもいいさっさと寄こせ！」

「ふむ、では魔獣に戦ってもらおうか・・・これを使え」

ローブの男は懷から取り出した宝玉をハイレルに渡し姿を消した。

「ふふふ、あははははは、待ってろよ屑共、直ぐに殺してやる、あははははは！」

宝玉が怪しく輝き森を不気味な光で染め上げる、光が消えた後、森には一匹の醜惡な魔獣が奇声を上げていた。

それは、壊れたような笑い声、魔獣は周囲に破壊を撒き散らしながら戦場に向かい歩みを進める。



## 二章 7話 魔と踊る

「戦場に張られた封魔の結界は古代遺物アーティファクトによる物です。  
この戦場の四方に設置された古代遺物アーティファクトを一つでも破壊できれば、陣は維持できなくなるはずですよ。」

今戦っているルージュ国の王子が来たらしい、まあ、俺が案内しちゃったんだけど・・・この兵士の顔全員覚えてるわけ無いからな、敵対しに来たわけじゃないみたいだから結果オーライって。  
今そいつ、ライネスはフィリアと話している。

「僕が古代遺物アーティファクトの一つを破壊に向かいます。」

魔法が使えるようになったらこの戦場を押さえてください、ルージュの兵士たちの志気を殺いでもらえれば、後は僕が戦闘を止めさせます」

「それではルージュが負けることになりますよ」

「構いません、こんな戦いさっさと止めた方が皆の為です。」

ただ、戦いが終わった後ルージュとは停戦協定を結んでもらいたいのです」

「無駄な争いをなくせるなら構わないでしょう、ゴルドの方には伝令を出しておきましょう」

「問題は魔法の封印された中で僕の剣技だけで古代遺物アーティファクトが破壊できるかどうかですが・・・」

「なら俺と一緒に付いて行こう、結界の中でも俺の魔法剣は使えたからな」

ジン、まだ居たんだな。魔法剣士か、俺のイメージするゲームとかの魔法剣とは違うんだよな・・・

「ジンさん、いいのですか？貴方達は本来ならこの戦争には無関係な方たちなのに」

「ああ、この戦いが終わるまでは協力させてもらう、まだ破壊しなきゃいけない魔剣が残ってるかもしれないしな」

あ、そうだ。

「ジン、これも破壊しとくか？」

魔剣カオスアルマ武装を解除したことで俺の手元に残った魔剣をジンに差し出す。

「爺さんの作った魔剣じゃないから俺に破壊する理由は無いか、いや、そうでもないか」

剣を見て何かに気付いたみたいだな。

「ああ、この剣を魔装した時やけに俺に馴染んだ、多分相当血を吸ってるぞ」

半吸血鬼の俺に馴染むんだ、相当血を吸ってるのは間違いないだろう。

「確かに、淀んだ魔力が漏れてきてる、破壊しとかないと厄介なこ

とになるな」

「んじゃ、任せた」

「ああ」

さて、話しは続いているみたいだ、俺は次に備えて寝るか・・・

後でフィリアに作戦会議中に寝るなと怒られた・・・

ライネス、ジン、ロウガ、カリンの4人は封魔の陣を張っている古代遺物の破壊に向かった。ディフラクトその間に俺たちはルージュに攻撃を仕掛けることになる。

「いいですか！今回は総力戦です。まず特異部隊が前線でルージュ軍を食い止めます。他の隊の騎士達は特異隊の動きの妨げにならない距離で敵の足止めと後ろに控える魔法隊の護衛、戦闘中に魔法が使用できるようになるので協奏魔法隊は大きい魔法の準備を、当ても構いません、威嚇して相手の戦意を殺ぐだけで充分です」

俺たちが戦場に出ると既に戦いは始まっていた。

さて、誰と誰が戦っている！？俺たちは今来たばかりだぞ！



何か大きな物を取り囲み戦闘を始めているルージュ軍の兵士たち。

「おいおい、何だよりゃ・・・」

「っ!!！魔物!?!」

丁度隣に居たソルダが魔物の大きさに震える、・・・てか、その格好（ヒラヒラドレス）で俺の隣に立つな、殴るぞ。

「って!！何で殴る!！」

「うるさい変態」

「だから好きでこんな格好してるんじゃないやねえって言ってるだろ!！  
って、今はそんなこと言ってる場合じゃねえ!！」

確かに、こうして馬鹿やってる間にも魔物が腕を振るっただけで数人のルージュ兵が吹っ飛ばされて行く。普通に思いついたけど・・・

「これ放つといったらルージュ軍全滅しないか?」

「でもその次は私たちに狙いを変えてくるでしょうね・・・」

フィリアも近くに來たか、俺たちの会話が聞こえたようだ、フィリアの言うとおり魔物を放っておくのは危険だな、なら・・・

「ライネスとの約束もあるし、ルージュ軍と協力する<sup>あいつら</sup>か」

「ですね・・・」

ゴルド全軍!ルージュ軍と協力して魔物の討伐にかかってください!

特異部隊、出来るだけ魔物の足止めを！他の隊は怪我人の治療と搬送を！

魔法隊！封魔の陣が破れ次第魔物に向かい攻撃を始めてください！

フィリアが新たな指示を出し俺たちも魔物に挑んでいく、ライネスが事を成す前にゴールド軍とルージュ軍は一時的とはいえ敵対を止める事になった。

「魔物相手か、加減しなくて良い分楽だな」

「いえ、そうも行きませんよ・・・」

あのデカ物、魔物かと思っていきましたけどもって性質の悪い物ですね、魔獣でしょうか？」

俺が全力で殺っても無理なのか？

まあ、試してみるか・・・

行方不明の指揮官、ルージュ帝国第一王子ハイレルを搜索に出ていた部隊が戦場で大型の魔獣に遭遇した。魔獣は搜索隊に襲い掛かり始めに本隊に連絡に行った者以外を全て引き裂いた。

ルージュ軍本隊が戦場に戻ったとき既に魔獣以外に動く者は居なくなっていた。

「なんなんだこいつは・・・」

援軍の兵士たちは大型の魔獣に少し混乱しているようだが、直ぐに部隊長と思われる者達が兵を指揮して魔獣との戦いを開始した。

「くそ、どうしてこんなことに！」

状況は悪かった、魔獣の動きはそれほど速くないのだが巨体故に攻撃力が凄まじい、体中を覆う漆黒の体毛が武器を絡め攻撃を体まで通さない。

兵は疲弊して行き状況はどんどん悪くなる。

魔獣の爪が1人の兵士に振り下ろされる、兵士は反応が遅れそのまま魔獣に引き裂かれるかと思われたが、兵士と魔獣の間に割って入るものが居た。

「うらああ！」

そいつは魔獣の爪を正面から殴り返し魔獣を僅かに後退させた。

「な！」

ルージュの兵士は常識外れなその行動と、それを成した人物を見て驚きの声を漏らす。

「深紅の・・・魔王!？」

「戦争は止めだ、魔獣<sup>アレ</sup>を倒すほうが大事だろ？」

ゴルドとルージュの共闘が始まった・・・

## 二章 8 話 封魔破壊

「有りました。おそらくあれが封魔の陣を張っている古代遺物です」  
アーティファクト

戦場の中心部から真北に位置する森の中で人の背の高さほどある不自然は立方体の石を発見した。

「大型1体小型が13つてどこか・・・」

何故か古代遺物を守るように魔物たちが待機していた。兄さんたちが魔物を操る類の古代遺物かマジックアイテムを使っているもおかしくは無いんだけど・・・

やっぱり僕1人じゃ古代遺物を破壊するなんて出来なかったな、僕が魔法無しでこの数の魔物を相手にするのは無理だ。でも、今は協力者が居る・・・

ジンさん、ロウガさん、カリンさん、三人とも冒険者の協会に所属していない旅人だそうです。

「それじゃオレ達が魔物の相手をしている間に、ジンが古代遺物を破壊する、それで良いな？」  
アーティファクト

「はい、お願いします」

「いくぞ！」

それぞれの武器を手に駆け出す。魔物たちも僕らに気付き襲い掛か

ってきた。

「ジン！構わず行けよ！」

「分かってる！！」

まずは大型を無視、小型の魔物を掃討する、僕は兄さん達ほど剣技が優れているわけではない、代わりに魔法を鍛えたんだけど、今の魔法を封じられた状態じゃ使えない、剣技だけでなんとかしなくちゃいけない。

牙を剥き出して襲い掛かってきた魔物を横に跳んで避けその後から来たもう一体に剣を振り下ろす。

魔物に当たりはしたが浅い、魔法を重点的に鍛えていた僕の剣は軽く魔物を一撃でしとめるような威力は無かった。一撃でしとめるのが無理なら倒せるまで斬ればいい、僕は何度も剣を振るう。

ようやく2体の魔物を片付けた。僕が2体倒している間にカリンさんが3体、ロウガさんが残りの8体を倒していて、残るは大型の魔物一体のみとなった。

でもこいつ硬い、皮膚が岩のように硬く攻撃をほとんど通さない、関節も狙ってみたけど少し傷つけやすい程度であまり変わらない、僕の攻撃は魔物の身体にまったく傷つけることが出来ていなかった。花梨さんも同様で唯一ロウガさんが魔物の身体を砕くように傷を与

えているけどそれも微々たる物だった。

この魔物、物理攻撃に対しての防御力が高すぎるんだ、封魔の古代遺物アーティファクトを守護させるには適した魔物かもしれないけど、動きはそれほど早くないので魔物の攻撃は避けられる、もう少し耐えればジンさんが古代遺物アーティファクトを破壊してくれるはずだ。

僕は戦いながら魔法を行使する為の集中力を高めていく・・・

「獣心解放！ビーストドライブ喰らえやあ！！！」

ロウガさんが今までに無い力で魔物を斬りつける、凄い音がしたけどさっきまでの攻撃と効果はあまり変わらないみたいですね。

「ちっ、これでも駄目か、ジン！さっさと古代遺物破壊しろ！」アーティファクト

「分かってる！魔剣相手じゃないからめいっぱい力を使わなきゃ壊れるかわかんないんだよ！」

『マスター、準備完了です！』

「うし、輝跡解放！刃断！」ハダン

ジンさんの剣に真っ二つに斬られ重い音を立てて古代遺物アーティファクトが倒れる、よし、これで魔法が使える！

「みなさん！魔物から離れてください！」

太古より息づく深層の赤

我が意に従いここに来たりて

全てを飲み込み喰らいつくせ・・・ 『バーンフレア』！」

魔物の足元の大地が割れる、そこから液状の炎が噴出し魔物に降りかかる、物理攻撃ではたいした傷の付けられなかった魔物の身体を溶かし焼いて行く。

「よし！これならいける！」

それから全員で魔物に攻撃を仕掛けた、硬い皮膚を焼き取られた魔物に身を守る術は無い、勝負は直ぐについた。

「終わった〜」

「いえ、まだです。これで戦場でも魔法が使えるようになりました。直にゴルドの魔法部隊が戦場を制圧するでしょう、急いでそっちに向かいルージュの兵たちを止め被害を無くさないと・・・」

「それじゃあ、急いで行くか、ロウガ、カリン戻ろう」

行方不明の兄さんは何するか分からないし、早く戻って戦いを終わらせないと・・・

## 二章 九話 愚かな王子

魔物の爪と俺の強化した拳がぶつかり合い金属を打ち合ったような音が響く、身体を殴ることは既に諦めている、この魔物、獅子に似た外見をしているけど体毛が長い、しかも剣で斬ろうとするとその体毛が剣に絡みついて取れなくなるのだ、俺も一度試してみたけど危うく身体ごと捕まる所だった。

だから体毛に覆われていない目や口内を狙って矢が放たれるが、口と目をそれぞれ閉じやり過ごされる。

俺は魔法が使えるようになるまでの時間稼ぎに専念する事にした。現戦力で倒そうとしても被害が増えるだけだ。

幸い魔物の動きは遅いし俺なら余裕を持って避けられる。

振り下ろされる爪、横に跳び退く。

腕を横に振り薙ぎ払って来た、大きく後に跳び退く。

噛み付こうとしてきた、逆に突っ込んで鼻っ面を蹴る、ちっ、かすっただけか。

巨体での突進、ヤバイ、みんなに逃げるように叫ぶ、避難が間に合  
い何とかやり過ごせた。



「くそ、めんどくせえ・・・」

一気に片付けられないもんか？魔法が使えるようにならなきゃ無理か？

「リョウイチ、調子はどうだ？」

ソルダか・・・とりあえず殴る。

「って！だから！好きでこんな格好してるんじゃないやねえって言うてるだろ！」

毎回やってるから俺の意図に直ぐに気付いたか、フリフリドレスを着たソルダが大小の剣を両手に俺の隣で喚く。

「無駄に怪我したくないだろ？魔法が使えるようになるまで下がってろよ」

「ふふん、封魔の結界の中でも使える魔法が有るだろ」

何だその得意そうな面は、フリフリドレスその格好でやられると余計にムカつくぞ。

「まあ、少し位オレにも活躍させろって、この魔法は得意なんだ

右翼の剣は炎の刃

エンチャント炎属性攻撃付加

左翼の剣は氷の刃

エンチャント氷属性攻撃付加」

ソルダの右手のロングソードが赤い光を纏い左手のショートソードは青い光を纏う。

ああ、付加魔法か・・・そういえば、ジンの魔法剣といっしょで何故か使えるんだよねあ・・・

「リョウイチ！来るぞ！」

「分かってる！出しやばって来たんだ怪我するなよ！」

とは言うが、ソルダの動きなら油断しなければ問題ないだろう、こいつ俺との訓練でだいぶ腕を上げている、出会った頃と比べると雲泥の差だ、本人は気付いてないみたいだけどな・・・

俺もソルダも魔物の攻撃を避ける、俺はそのまま次の攻撃に備えたがソルダは魔物に向かって行く、炎の力を付加されたロングソードは魔物の体毛に絡まる事無く魔物の身体を傷つけた。

「お、効いたな」

「当然！でもやっぱり体毛が邪魔で大きな傷は付けられないな、時間稼ぎに徹した方が利巧かな？」

「爪つめもそろそろ壊れてもいいと思うんだけどなあ・・・」

そう言い魔物の攻撃に合わせ拳を振るう、魔物の爪と俺の強化した拳がぶつかり合い、再度金属を打ち合ったような音が響く。まあ、一度、俺の拳の方が先に逝っちゃってるんだけど、直ぐに治癒力を強化して治るまで回避に専念していたので今は大丈夫だ。

「もうちょいか？ならオレも・・・」

魔物と攻防を繰り返しながら何度か魔物の爪をロングソードで斬る、傷は付かないが爪が赤くなってるように見える・・・温度上がってるな・・・

「ソルダ、それじゃ熱くて俺が殴れねえぞ」

「問題無い、冷やすから」

続いて左手のショートソードで爪を斬り付ける、ジュッと音がして爪の赤みが消えていく、ソルダの剣の青い光も消えた。

「だあらああ!!」

思いつきり拳を爪に叩き込む、魔物の爪はようやくやく砕けた。

「グオオオオ!!」

「やっとかよ、割に合わねえ」

「リョウイチさん、お待たせしました」

「今度はフィリアか？なんだ？魔法が使えるようになったか？」

ソルダに続きフィリアが出てくる。

「いえ、それはまだです」

「だったら下がってた方が良いぞ」

「そうもいきません、リョウイチさんにばかり負担をかけるわけにはいきません。今できる最大の攻撃を・・・」

後から前に出てきた兵たちに指示を出す。

「弓隊前に！私の射に合わせて一斉掃射！」

大量の矢が魔物に向けて放たれる、矢は魔物の体毛に遮られること無く魔物の身体に突き刺さった。

「矢に付加魔法エンチャントをかけました。時間は掛かりましたが、これだけの数を一斉に打ち込めば少しは効くはずです」

矢には様々な付加魔法エンチャントがかけられていたようで、魔物は痛みでのた打ち回っている。

「ぐぞ！なんだんだ！おばえらは！」

「な！？」

今、魔物の口から言葉が発せられた、くぐもった声だが確かに言葉を話した。

「邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だ！」

魔物は叫びながらがむしゃらに腕を振るってくる。

「各自後退しつつ第二射用意！・・・撃て！！」

ハリネズミか？・・・魔物は体中に矢が突き刺さっているが普通に動いている、多少のダメージは与えられたようだが決定打になってない、あれだけやって駄目なのか？

「まだまだ！火矢用意！・・・撃て！！」

「があああああああ！」

先に放った矢に何か仕込まれていたんだろうか、火が燃え移り魔物を包み込む。

魔法が使えないなりに色々有効な手を考えてきてるみたいだな。

弓隊が火を消そうと転げ回る魔物から離れる。

体毛が一部燃えたな、これならいけるんじゃないか？

隙を突いて魔物の横っ腹をぶん殴る、体毛による衝撃の緩和が行われず、魔物に直でダメージがいく。

「くぞ！死にぞこないが！！」

巨体なだけあってタフだ、死んでもおかしくないだけの攻撃は与えてる筈なんだけどなあ。

「来た！リョウイチ！離れろ！」

ソルダの呼びかけにチラリと後方を見ると、前進してきた魔法部隊と、既に詠唱が終わっているのか部隊の頭上に、光る赤い魔法陣が浮かび上がっていた。

魔法が使えるようになったのか？ライネスやジン達の古代遺物破壊

アーティファクト

組みがやったみたいだな・・・

急いで魔物から距離を取る、俺が十分に離れたところで魔法部隊の奴等が声をそろえて叫んだ。

「「『フレイルムフォール』」」

魔法隊の頭上に展開されていた魔法陣が消え、瞬時に魔物の頭上に現れる、その魔法陣から炎の光が降りてきて、魔物を飲み込んだ。

炎が消えた後魔物の姿も消えていた。

うわぁ・・・凄え威力だ・・・

終わったな、ゴールドもルージュも被害は大きい、このまま戦いを続けるのは無理だろう、どのみちライネスが来るのを待たなきゃいけないからな、とりあえず休むか・・・

「ソルダ、フィリア、流石に疲れた・・・ちよつと休むわ」

敵味方関係なく勝利に沸く戦場で俺はゆっくりと目を閉じ少し休むことにした。

## 二章10話 とりあえず終戦

でっかい魔物を倒し休んでいるとライネスたちが帰って来てフィリアと共に終戦の話し合いに入った。

共に戦ったためか、両軍の兵士たちも話し合いをあっさりと受け入れててくれた。

何事も無くこの戦争は終わりを迎えるかと思っていたがそうもいかなかった。

周囲がざわつき出す、魔物の死体を（消し炭になっていたと思うが）確認に行っていた兵士が戻ってきたようだ、彼らは行った時よりも一人増えていた。怪我をしているようで、兵士たちに肩を借りゆっくりとこちらに向かってくる・・・あれ？あいつって、魔剣部隊の指揮官か？

「兄さん!？」

騒ぎを聞きつけ様子を見に来たのか？ライネスが指揮官に気付いて駆け寄ってくる、今こいつ兄さんって言ったな、前に殺<sup>や</sup>った奴とい、ライネスの兄弟ってろくな奴がいねえな。

傷の具合は結構酷いな、全身の火傷のような痕、他にも小さな刺し傷のような物がいくつも有る、それと右手の先がボロボロだ、幸い魔法が使えるようになっていたので既に治療が始まっているが、まだまともに話せないようだ。

戦争だから仕方ないとはいえ、俺こいつに殺されかけてるんだよなあ、今の状態を見て多少は同情するが、あの戦いでこんなに傷を負ってたか？俺は一発殴っただけだろう？まあだいぶ吹っ飛ばしたけ

ど・・・気絶していたところをさっきの魔物との戦いに巻き込まれたってところか？

「兄さん、とても無事とはいえないけど、生きてたんだね・・・よかった」

「ライ・・・ネス？」

お、少し話せるくらいには回復したかな？

「なぜ、魔法が使えるようになったている」

「兄さんには悪いけど、この戦争を終わらせる為に僕達が古代遺物アーティファクトを破壊したんだ・・・兄さんもそんな状態なんだし今は休んで」

「糞が！！」

「え！？」

なんだ？いきなり切れ出したぞ、ライネスが気づかってくれてるのになに言ってやがるんだこいつ、やっぱ性格に問題あるな、ライネスの兄って事はこいつも王子だろ？王子のくせにこれじゃ駄目なんじゃねえのか？

「お前のせいだ！魔法さえ封じておけば俺が全て終わらせたものを！！」

もう一度だもう一度この・・・」

何言ってるんだこいつ？頭をやられたか？



「黙れ役立たず・・・余計な事を喋るな・・・」

どこからか声が聞こえた、直後、ライネスの兄は炎に包まれた。これと同じようなことが前にも有ったな・・・やっぱアイツか？

「ぐあああああああああ！！！」

「兄さん！？」

ライネスが炎を消そうとしているけど多分間に合わない、俺は周囲を見回し目的の人物を見つけた。

兵士たちに紛れてフードを目深にかぶったローブ姿の男が、こちらに背を向け歩み去ろうとしていた。

「逃がすかよ！」

強化をかけローブの男に駆け寄るが、俺の手が届くか届かないかという所でローブの男は姿を消した。

これも魔法なのか？こう出たり消えたりされると如何しようも無いんだが・・・

「ちっ・・・なんなんだアイツは？」

もう俺に出来ることも無いのでライネスの所に戻る、やはり間に合わなかったんだな、消し炭が一人分出来ていた。

ライネスはルージュの代表としてフィリアと話し合い今回の戦争を終戦させた。

今のルージュは王が病に伏せているうえ、王子も二人失い不味い状態らしい、俺には関係ないが（王子の1人を殺ったけど、知らねえ）ゴールドはルージュと新たに協定を結ぶことになったようだ、詳しいことは知らない、話し合いの途中寝てたから・・・後でフィリアに説教されたけど・・・

とりあえずこの戦争は片付いたって事だよな、じゃあ帰っていいか？正直今回は疲れた、さっさと帰って休みたい、供血した後離宮に残してきたリアのことも気になるしさっさと帰らせてくれ・・・

「それでは、後日そちらに向かいますので、正式な協定はその時に」ライネスがルージュ軍を率いて帰っていくのを見送り、俺たちもやっと帰路につくことができた。

色々事後処理があるみたいだけど知らん、俺はあてがわれた自室に直行して直ぐに眠りに付いた。

「リョウお兄さん帰ってきたの!？」

リョウイチの自室のドアが勢い良く開けられ、リリカが部屋に飛び込んできた。

「こらリリカ、リョウは休んでるから静かにしなさい」

先に部屋に来ていたマテリアに窘められる。

リリカとマテリアは揃ってリョウイチの寝顔を眺めだした。

「・・・アタシも寝る」

「ちょっと!リリカ!」

リリカがリョウイチのベッドに潜り込んでしまいマテリアが慌てて声をあげる。

「リアお姉様、静かにしなきゃ駄目だよ」

「う・・・」

「リアお姉様も一緒に寝ればいいの」

「ええ!？」

「し」

また声をあげてしまいリリカに注意される、マテリアは随分と混乱してしまっただようで勢いのままリョウイチのベッド、リリカの潜り

込んだ反対側に潜り込んだ。

リヨウイチを2人で挟む形だ、リヨウイチはよほど深い眠りの中にいるのか？そんな状況でもまったく起きる気配が無い、やがて3人分の寝息が聞こえ出した。

.....

.....

•  
•  
•  
•  
•  
•

「どういふ状況だ？」

目を覚ましたリョウイチは当然困惑する、シルバリーフの姫君（美少女）2人が自分に抱きついて寝ているのだ。

「どうしてこうなった？」

誰にとも無く疑問を口にするがそれに答える者は当然居なかつた。

「そう、終戦と協定ですか・・・」

思いの他早く帰還したフィリアの報告は予想外の物でした。まさか今回の戦いで戦争を終わらせて来るとは思っていませんでした。

「はい、ルージュの王は病に伏せっていて、その間に2人の王子が暴走してゴルドに戦争を仕掛けたようです。王子の1人は先日リョウイチさんによって討たれ、もう1人も先の戦いで謎の襲撃に遭い焼け死にました」

「襲撃に焼死？」

「リョウイチさんの話によると、先日大臣の1人を殺した犯人らしきローブの男を見かけたそうです」

「なんだか、裏で誰かが糸を引いているような状況ですね」

間違いなくそうですね、今回も前のことも失敗した者の口封じと考えられます。

狙いはマテリアでしょうか？それともこの国ゴルドでしょうか？

マテリア1人の為に戦争を仕掛けると言うのも無茶過ぎますが、マテリアは魔法を完全消去する、規格外の体質、不安要素を狩るのは当然のことではあります。

でも、どうやってマテリアの存在を知ったのでしょうか？

やはり、城の中に敵と通じている者が先日死んだ男以外にもまだ要るのでしょうか、愚王ちちの制御だけでも大変なのに・・・本格的にどうにかする必要がありますね・・・

「フィリア、そろそろこの国を取りましようか」

## 二章11話 国取り、巻き込まれた男

「ん？って事は離宮（りきゆう）から出てても問題無いって事か？」

終戦から数日経ち、いつもの修練の合間、先日の供血によってリアの消魔体質が、リアの意思で入り切り出来るようになっていたことを聞かされた。

「そう言えばそうね、でも誰かが監視してるだろうから出られないと思うわ」

「俺らが逃げたら追いつける奴なんてそう居ないと思うぞ」

吸血鬼（オレ）の身体強化はこの世界でも結構規格外だからな、劣化版とは言ってもリアの身体強化も規格外なのに間違いは無い。

「でも、姉さんにも迷惑かかっちゃうしね・・・」

「・・・色々面倒だな、とりあえず潰すか。」

「ちょっと出てくる」

「え？う、うん分かった」

マナの自室のドアを勢いよく開ける、ノックを忘れたけどまあ良いか、  
破碎しそうな音を立ててドアが開いたことに驚いたマナとフィリアがこっちを見る。

「よお、色々潰したいんだけど、ちょっと良いか？」

「ちょっと良いか？じゃありません！扉を壊す気ですか！？」

悪いな、ちよとイラついてるんだよ。とりあえず前に俺がリアに供<sup>やった</sup>血したことでリアが消魔の力を制御できるようになったことを言う。

「だからリアを自由にさせろ、まあ拒否してもいいぞ、最初にお前らを物理的に潰すことになるだけだからな」

「何を言って・・・」

「そうですか、マテリアが・・・リョウイチさん有難うございます。しかし、彼女を自由にするには色々面倒な人たちを何とかしないとけません」

マナは俺の話を聞き現状の問題点を言ってくる、でも俺は最初につたぞ。

「だから色々潰したいって言っただろ？誰を殺ればいい？それだけ教えろ」

「殺す必要は有りませんが、丁度いいですね、リョウイチさん私たちに協力してくれませんか？」

マナから話を聞くと、この国の王は当然マナたちの父親なのだが、こいつがとんでもない愚王らしい。

それをいいことに、大臣や閣僚がやりたい放題なんだという、マナたちは王が馬鹿なことを言い出さないように押さえるのが精一杯で、大臣達にまで手が回らなかったそうなんだが、最近何かと問題が起ころのでそろそろ限界を感じていたんだと・・・

「ですからこの国を取ろうと思います。協力してくれませんか？」

「マナが王になるってことか？その後リアは自由にしていいいんだな？」

「そうですね、マテリアも離宮付きの者もう理不尽な命令を聞く必要は有りませんよ。

私から何かお願いすることはあるかもしれませんが・・・捨て駒のように扱うことは有りません」

悪くないな、後の面倒な政はマナやフィリアに任せておけばいい、俺は国取りに協力するだけ・・・

「分かった、お前らに協力する、俺は何をすればいい？」

えっと、ルージュとゴルドの協定を改めて正式な形で成す為、シルバリーフ城を訪れたのですが・・・何をやっているのでしょうか



？城内が妙に慌しいですね。

「兄様、城門の門番も居ません、どうもおかしな事になっているみたいですね」

共にやって来たルージュの第一王女エルナス フレイムロウ、僕の妹なんだけど、政的なものは僕よりも妹の方が向いている為一緒に来た。でも、ゴルドの方は何か立て込んでるみたいですね・・・

「かつてに入っているのかな？」

「よくないでしょうね、誰か通りかかれば・・・」

丁度エルより少し年下と思われる銀髪ツインテールの少女が通りかかった。銀髪？

「エル、頼むよ」

「はい、少し待っていてください」

女の子同士のほうがいいかな？と、エルに少女と話しに行ってもらうことにする。

しばらく少女と話したエルは少女を残し1人で戻って来た。

「すみません、護衛の者は少しここで待機しててください。兄様、行きましょう」

どうやら案内してくれるのは僕とエルだけみたいだね。

「ええ、どうもあの子は人見知りするようですね、私も最初警戒わたくしされてしまいました」

エルと二人少女に案内されて城内を歩くのだけど、やはり城内が騒がしいな、何をやっているのだろう？騒ぎは上の階に行くほど大きくなっているみたいだ。

着いたようですね、少女はある部屋の前まで案内を終えると直ぐに何処かへ行ってしまった。

少女を見送り改めて扉を開け・・・

「つたく、いつの間にここまで攻めて来やがった！」

ようとした所で横から誰かが殴りかかってきた。

「『アイスシールド』」

誰かの攻撃はエルの張った氷の盾に防がれ僕に届く事は無かった、ここで始めて相手の顔が分かる。

「あれ？お前、ライネスか？何でここに居る？」

「君は確か・・・」

「リョウイチ、只の旅人だ、今はちょっとここに厄介になってるだけだな」

リョウイチさんはもう一度氷の盾を殴り破壊して見せた。

「な!？」

それをあっさり行ったものだからエルが驚きの声をあげる、魔法で作られた盾を素手で破壊する者などそうは居ない、けど・・・

「エル、大丈夫だよ、彼は敵じゃない、敵になられると困るしね」

深紅の魔王、戦場を1人で引っ掻き回す、もうそんな者に敵対されたくは無い。

ところで彼はここで何をしているのでしょうか？

「んゝ、詳しいことは中でマナに聞いてくれ」

「それではエル、交渉の方をお願いします」

「はい」

「ライネスは暇か？」

「交渉はエル任せですから確かに暇です」

「兄様、暇とか言わないで下さい」

部屋に入りマナ様と挨拶を終えるとエルが協定の話し合いを始めた、交渉事はエルに任せてしまった方がうまくいくので、僕は本当に暇になってしまった。

「ライネス、暇なんだったら一緒に来い」

「え？ちよつと、リヨウイチさん！？どこに連れて行く気ですか！？」

マナ様が慌ててるけど、なぜだろう？城の中で危険なこととかはま  
ず無いと思うんだけど？

「決まってるだろ？最前線だ」

「な！？ライネス様はお客様ですよ！」

「いいじゃねえか、暇だっただから、それに次期国王に協力し  
てて損は無いだろ？」

「ちよつと待ってく・・・」

まだ何か言おうとしたマナ様を無視して僕を連れ部屋を出て行った。  
向かった先は城の更に上の階、先ほどの騒ぎの中心になってい  
る場所、そこでゴルドの兵士同士が戦っていた。

「何ですか！？これは！？」

「愚王の政に限界を感じたマナの国取りだ、ちよつと手伝っていけ、  
あ、殺すなよ、相手は殺す気で来るけど・・・」

間の悪い時に来てしまったみたいですね、まあ、ゴルドもルージュ  
と似たような状況ということでしょうか？

ルージュは王が病に倒れ、王子<sup>兄弟</sup>2人が好き勝手やっていたが、  
その2人も今は居なくて、僕とエルでなんとか体裁を取り戻してい  
るところ。

ゴルドは王が愚かなのをいいことに好き勝手やっている者が居るってことでしょうか？

「まあ、いいですよ、僕も協力します」

「んじゃ、狸共とその犬を潰しに行くか！

あ、そうだライネス、俺のことはリヨウでいいぞ『さん』とか要らねえから」

「わかりました」

この日の内に争いは終わり、マナ シルバーリーフがゴルドの国王となった。

元王は離宮内に幽閉され好き勝手やっていた連中にも重い罰が与えられたみたいです。

そして、新国王マナ様により二つの発表がされた。

1つは、ルージュとの正式な協定関係について・・・

もう1つは、今までゴルドの姫は2人だと言う話でしたが、第一王女のマナ様と第二王女のリリカ様（ここに来た時マナ様の下に案内してくれた少女）の間にもう1人本来の第二王女が存在すること・・・

どうして存在が隠されていたのか？なぜ今になってそれを発表したのか僕は聞かされませんでした。が、リヨウや3人の王女様が皆笑顔でいたのでどうでもいいですね。

- ・少し城の者にリョウのことを聞いて気になることもありますが、今は只、訪れた平和を維持していけるように努力していきましょうか
- ・

## 二章 12話 預言書2

深紅の魔王の二つ名で知られるリョウについて気になることがあったので、ルージュに帰った僕は、フレイムロウ城に保管される紅の預言書の写本を探していた。

僕たちの使う物とは別の文字で記されたそれを解読できる者はルージュには居ませんが、昔誰かが内容を断片的に解読した物があり、それに似たような言葉が出てきていたように思う。

紅の魔王、その他にも黄金の魔法国、九国の破壊と気になる言葉が続いていました。

魔王とか破壊とか明らかに良くない言葉が続くので、預言書にあまり良い印象は受けていません、一度しっかりと調べてみましょうか、どうもリョウの存在は気になります。

あれだけの力に、この大陸ではシルバーリーフの血筋にしか現れない銀髪、それだけあればもっと早くに噂などでその存在が知れていても良いと思うのですが、誰に聞いてもいつの間にか城に居たとしてか返って来ません、深紅の魔王などと呼ばれその名前が知れたのも先の戦いからです、リョウの過去を知る者も聞き込みの結果誰も居ませんでした。

まあ僕は預言書の魔王がリョウでは無いと思っていますけど・・・シルバーリーフで過ごした数日友人として接しているリョウは確かに直ぐぶっ潰すとか言っていたけれど・・・

彼は自身の少し特殊な決まりごとを守って行動しているようだし悪意有る存在には見えない、敵対するとその限りではないでしょうけ

ど・・・

「兄様？預言書なんて持ち出してどうかしたんですか？」

戦時中は忙しそうにしていたエルだけど今は戦争も協定という形で終わり、だいぶ楽になっているみたいですね。

「少し気になることがあってね、写本の方は有ったんだけど、以前に誰かが訳した方はどこにあるか知りませんか？」

「・・・確か、父様が病に伏せる以前に自室に持って入るのを見かけましたよ」

エルは少し考えた後そう答える、父さんの部屋ですか・・・父さんは病に伏せてからは一日の大半を眠って過ごしている、あまりにも変化が無いので最近は見舞いに行くことも少なくなっていました、いってみましょう。

「ありがとうエル、探してみるよ」

預言書を手に父さんの部屋を訪れる、数人のメイドが父さんの看病をしていたけど、僕が来ると部屋を出て、僕と父さんだけにしてくれる・・・

しばらく父さんの様子を見た後預言書の訳本を探し始めた。

探し出すとあっさりと机の上に置かれているのを見つけた。



「ライネスか？」

本に手を伸ばしたところで背後から声がかかる、今この部屋には僕と父さんしかいないので必然的に父さんに声をかけられたということになる。

振り返ると父さんがベッドの上で身を起こしこちらを見ていた。

「父さん、起きてても平気なのですか？」

「ああ、随分と心配をかけた・・・ずっと何かに取り付かれているような感覚があったんだが、数日前からそれがパツタリ無くなった・・・とにかく今は段々快方に向かっているよ」

以前と比べだいぶやつれているけど顔色も悪くない、調子が良いのは本当のようですね。

「それは・・・預言書か・・・」

「はい、少し気になることがあったので、借りて行って構いませんか？」

「好きに待って行け、それと私が伏せている間に起こったことを教えてくれないか？今この国はどうなっている？」

兄さん達が死んだこと黙っている訳にも行きませんよね、でも、調子の良くなりだしたこの時期に言っても良いものでしょうか？また寝込んだりしないか心配です。

「すみません、今は急ぎますので、後でエルナスに来させますから

彼女から聞いてください」

ここはエルに任せておきましょう、僕が下手に話すよりは上手くやってくれるでしょう。

「ライネス、預言書に書かれている事は未来に起こりうる可能性だ、絶対じゃない。私は今回の自分の病に作弄的なものを感じている、何か起こるかも知れんから預言書の内容をしっかりと読んでおけ、悪い未来を予め知っておけばそれを回避する為に動けるからな・・・」

「はい・・・」

預言書の訳本を手に父さんの部屋を出る、とりあえずエルの所に相談に行かないといけませんね。

「父様が目を覚ましたのですか？」

「うん、だから兄さんたちのことをどう話すか・・・」

「相談に来たのですね、分かりました。父様へは私が上手く話しておきます」  
ワタクシ

「ありがとう」

「ああ、それと、来月フリージアで開かれる武闘大会ですが、ルージュからも特別枠で2名選出しなければなりません、兄様にも来賓としてフリージアに行ってもらいたいのですが・・・」

武闘大会、もうそんな次期なんですね、

様々な種族の入り混じる自由都市フリージアで5年に一度開かれる武闘大会、ナインティリア大陸全土から腕に自信の有る者が集まり優勝を争うその大会に、ルージュやゴールド、他の国には各2名ずつの特別枠シードが与えられる、当然国が選手を出すかどうかは自由なんです、今回は先の戦争の事が有りますからね、こういった事に参加しておくにこした事はないでしょう。

「分かったよ、特別枠の2人の選出は任せてもいいかな？」

「はい、まかせてくださいな」

エルと別れ、自室に戻り預言書を読み始める。

やはり訳本に書かれていることだけでは断片的にしか内容が分かりませんね、どうにかして自分で預言書を解読する必要が有りそうです。

自室で出来ることはもう無いと、書庫へ向かうことにした。

預言書の文字は僕たちが使う物とはまったく異なる文字、かといって古代言語や魔法文字とも違う、とりあえず預言書の文字が何の文字なのかを調べる所から始めないといけないようです。

来月（武闘大会）までに終わるでしょうか？先は長そうですね・・・

### 三章 1話 暇潰し

「くっ!!」

両翼の剣は風の刃

エンチャント  
風属性攻撃付加!!

足に纏うは風の具足

エンチャント  
風属性加速付加!!」

戦争が終わってゴールド王国にも平和が訪れた?

「ははは! どうした? 魔法が使えてもその程度か!?」

先の戦争で活躍した特異部隊の面々は、マナが王に就任した事により、これまで使い捨ての駒扱いだった処から一転して正式な部隊として認められた。只やはり隊員の中に一癖も二癖も有る者が多い為、普通の部隊としては認識されていないようだ。

「くそ! これでも付加魔法でいっばいまで加速してるんだぞ!」  
エンチャント

それまで生活していた離宮は愚王の拘束の為に使われ、俺たちは別の場所へと移る事になった。

リアは城の中のマナやリリカと同じ階の部屋に移り、俺たちは元居た離宮とはシルバリーフの城をはさみ反対の位置に立っている離宮に移った、態々俺たちが移動しなくても愚王をこっちに幽閉すればよかったんじゃないかと思ったが、なんでもこっちの方が新しく設備も良い物が揃っているようだ、前居た所は蒼宮、ここは紅宮と区別されている、まんま屋根の色が青と赤のなんだが・・・そんな安直な名で良いのだろうか? まあ、俺にはどうでもいいか・・・

「まあ、今日はこれぐらいにしておくか・・・」

俺の新しい寝床は、前のような華美な物になら無い様に頼んでいた  
ので、広い割には物の少ない質素な部屋になっていた。ただ寝るだ  
けだしそれで良いよな・・・

「はー、くっそう今日もまともな一撃入れられなかった」

俺は相変わらずソルダと紅宮の訓練所で模擬戦を繰り返していた。  
言葉では余裕を装っているけど、正直そろそろいい一撃を貰いそう  
なぐらいソルダは成長していた。

「喧嘩には自信が有るんだ、多勢に無勢でもない限りそう簡単にや  
られるかよ」

別に戦争を喧嘩扱いしてるわけじゃないんだけどな、死に掛けたし・  
・

「にしてもそろそろ飽きてきたな、なんか面白い事無いか？」

最近ソルダや未だに離宮に入り浸っているリアとの訓練ばかりで  
面白みにかける・・・

久々に街に出てみるか、何か有るかもしれないしな。

そうと決まったら早速行こう・・・

半時後俺は城門前でリリカを待っていた。

隣にはソルダとウリン、リアも居る、ソルダ以外は皆途中で会って一緒に行く事になったんだが（ソルダは元から一緒に行くって話になった）・・・

リアとリリカ、姫が簡単に街に出ていいのか？以前リリカを連れ出した俺が言うのもなんだから、特に二人に何か言う訳ではないけど。やがてリリカが来て街に出かける。

失敗した。

リリカはよく城を抜け出して街で遊んでいるから街の人も温かく見守っていてくれるが、リアはそうはいかない、リアの、この大陸ではシルバーリーフの血筋以外には滅多に現れない銀髪は、リアが先日お披露目されたシルバーリーフ本来の第二王女であることを周囲に宣伝していた。

リリカに接することで、王族に対して馴れが有るのか？リアに気付いた街の人は皆リアの所に集まってきてしまった。

「リョウ、これ收拾着かないんじゃないか？」

「……………いざとなったら助ける、それにリアも俺と同じくらいの身体能力は得てるんだ、抜け出そうと思えばいつでも抜け出せる、多分大丈夫だ」

リアも街の人に囲まれ困ったようにしているが嫌そうでは無い、ずっと離宮に籠っていたから人と接することが出来るのが嬉しいのだろう。

「リアがみんなの相手をしている間、俺たちはどうするかだな・・・」

ちなみにリリカもリアと一緒に人ごみの中だ、困って俺たちとは俺、ソルダ、ウリンの三人のことだ。

「あの！ボク料理長に頼まれた物があるので買って来ていいですか？」

「ん？ああ、いいぞ、ここは俺らで見とくから行って来い」

「ありがとうございます！」

ウリンが使いに行き残るは俺とソルダ、さて、これからどうするか・・・

まあ、リアを見てるだけでも充分面白くはあるから暇潰しにはなっているけどな。

「おあ？おいおい、兄ちゃんもシルバーリーフの人か？」

「あ？」

なんだ？ちょっと待て、何で俺が街の奴らに囲まれ出すんだ？

「あ・・・そう言やあ、リヨウも銀髪だな」

げ！そうだった、こんなところに居れば俺も巻き込まれるのは目に見えてるじゃないか！

「ソルダ、俺は逃げる、リアとリリカのことは任せたぞ！」

面倒なので逃げることにした。完全に囲まれる前に人の間をすり抜け人ごみから抜け出す。

リアたちのことはソルダに任せとけば大丈夫だろう。

人ごみを避け物陰に隠れて様子を窺う、何か頭に被る物を手に入れば楽なんだけどそう都合良くはいかないよな・・・

いざとなったら強化して上に逃げればいいか、リアたちと一緒にじゃなければ囲まれることも無いだろう、何より面倒だ、適当に行こう。

「あれ？リヨウさん？どうしてここに？それに1人ですか？」

露店をからかいながら暇を潰していると、お使いで別行動をしていたウリンに声をかけられた。

「よう、もう用事は終わったのか？俺はリアたちと居ると目立つから別行動だ」

「ああ、銀髪ですもんね、ホント珍しいですね」

「まあ、前居た所もこんな髪は奴は珍しかったから・・・  
珍しがられるのも、馬鹿な連中に絡まれるのも慣れたもんだ」

そう言って俺は後ろを振り返る、ガラの悪そうな奴が1、2・・・



3人か。

「へっ、昼間っからいちゃつきやがって、ガキ、チヨと面貸せや」

もうちょい治安を見直すようにマナに言っとかないといけないな・  
・

「リョウさん・・・」

「ウリン、リアたちのところに戻ってろ・・・俺はホモ扱いされた憂さを晴らしてから行く」

誰と誰がいちゃついでるだ！俺にホモそのの気は無え、ふざけたこと言  
つてるとぶっ殺すぞ！

「リョウさん！安心してください！ボクなんて自分のこと言っ  
てますけど、ボクは女です！」

・・・

・・・

・・・

は？

え、そうなのか？てっきり男と思ってた・・・女か、じゃあいいや、  
やつ当たり止め。

「面倒だし逃げるぞ・・・」 「ふあ！」

「あ！てめえ！まちや・・・」

ウリンを抱えて壁を蹴り屋根を駆け一気に離脱する。

「ただいま・・・」

「うお！どこから帰って来んだよ！」

広場に戻り、ソルダの隣に降り立つ、驚かせてしまったらしい、まあ、どうでもいいが・・・

「ん？ウリン、どうした？顔が赤いぞ、風邪か？」

ウリンの様子が変なんだが・・・

「いや、抱えられて恥ずかしいだけだろ？」

「ああ、悪りい」

抱えたままだったな、下ろしてやると慌てて離れる、うん、こうして見ると恥ずかしがっている姿なんかは確かに女の子だな。

「意識しちゃダメ、意識しちゃダメ、さっきまでボクのこと男だと思ってたんだから！ああ・・・でも、お姫様抱っこなんて始めてされた・・・ああ！だから！意識しちゃダメ！！」

何か言ってるけど・・・まあいいか。で、リアたちはどうなったんだ？

「だいぶ落ち着いたみたいだな、今日はもう帰るか？」

たいした暇潰しになってないんだけど・・・まあ、仕方ない。

さっきよりましになった人ごみの中からリアとリリカをサルベージして城へ戻る。

「はー、ソルダ、なんか面白いこと無えか？」

「面白いかどうかは分からねえけど・・・」

もうすぐフリージアで武闘大会があるぜ、参加してみたらどうだ？」

武闘大会ねー、それって1対1だろ？ジン位の奴じゃないと俺の相手になんねえぞ。

「大会を盛り上げる為に各国から数名、選りすぐりの選手が選出されるからそう簡単には優勝できないと思うぞ」

「へえ、なあリア、ゴールドからも誰か出るのか？」

「姉さんの話じゃ近衛騎士団の団長と、もう1人誰が行くかを決めてるとこみたいだけど、リョウに話が行くかもね」

国の代表とかは嫌だな、面倒すぎる・・・断ろう。

でも大会か暇潰しに出てみるか・・・

「個人で出るなら、自力で砂漠を越えてフリージアまで行かなくちゃいけないわよ」

「砂漠越えか、面倒すぎるな、何か良い移動手段は無いのか？」

国の代表として大会に出る奴と来賓として招かれている奴等は迎えを用意されているらしい、面倒だけど国の代表の一人にしてもらう方が移動は楽そうだ。

「ちょっとマナのところに行ってみるか・・・」

城に着いたその足でマナのところへ向かう、この時間なら多分執務室だろう。マナが王になって前と執務室の場所が変わってるから迷わないようにしないとな・・・

「ちいゝす、マナいるか？」

で、着いたのはいいんだけど、なぜかリアとリリカが付いて来ている。

「リョウイチさん、マナ様も今は前と立場も違うんですから、あまり気軽にされても困ります」

「ふふ、別に良いじゃないですか、こんにちはリョウイチさん、今日はどうしました？」

今、執務室にマナとフィリア2人だけだが、確かにフィリアの言う通り、他に誰か居たら俺の態度は不味いか、マナはあまり気にして

ないみたいだけど・・・王なんだし気にしろよ。

「まあいい、武闘大会の出場選手ってどうなってる？」

「一人分の枠が空いてますよ、リョウイチさん出ますか？」

あっさり切り出してきやがった、しかも枠が空いてるとか、こいつ等俺が来るの予想してたな。

「大会に来賓として出席するのはマテリア様ですから、護衛もかねてリョウイチさんが付いて行くとは思ってましたよ」

「え？私が行くの！？」

おい、リアの反応、今初めて聞いたって感じだぞ。

「ええ、私は王になったばかりで簡単に国を離れませんし、幼いリリカに任せる訳にもいきませんからね」

リアに任せるのが妥当な所か、他国の奴等に隠匿されていた姫の顔見せの意味も有るんだろうな。

となると、フィリアの言ったように俺はリアについて行くか・・・

「わかった、その空き枠は俺にくれ。あと、優勝しても良いんだよね？八百長とかはやらねえぞ」

「はい、でも相手を殺さないようにしてください、それだけは絶対に。」

マテリアも行ってくれますね？」

「ま、自由を得る為の対価だと思っておくわ、今まで何もしてない訳だしね」

「そう、ありがとう。迎えは5日後に来るから、それまでに準備はしておいて下さい」

「砂漠越えが面倒でここに来ただけど、迎えてどんなのだ？」

馬車とか言われたら強化して駆け抜けた方がマシそうだ。

「飛竜です。快適な空のたびをお届けしますよ、アステア国のものですけど・・・」

竜かよ、空を飛ぶ魔法は無いって聞いた事があつたけど、竜を飼いならしてる国はあるのか・・・さすがファンタジーとしか俺には言えない。

まあ、楽しみにしておこう。

## 三章2話 フリージア

ナインティリア大陸の西部にドラゴンの生息する飛竜山脈（そのまんまだな・・・）が有るその山脈の麓にアステア王国は存在する。今回フリージアで行われる武闘大会に向かう為の手段をアステア王国が用意してくれている、そう、竜だ。

シルバリーフ城の庭に背に籠を背負った一匹の竜が降り立った。

飛竜を繚るのは竜騎士と呼ばれるアステア王国の騎士、竜を繚るには、竜の亜種やそれらをものともしない魔物の住む飛竜山脈の頂に君臨する、竜神に力を示さなくてはならないので竜騎士の数はもの凄く少ないそう。まあ竜騎士の数は少なくとも竜騎士が繚るのは竜だ、こんなのに攻撃されたら人なんて軽く吹き飛ぶだろう・・・

「面倒な送迎をさせられて、竜騎士も大変だな・・・なあ、あんた、竜の神さんに力を認められたってことは相当な腕なんだろ？大会には出るのか？」

竜の背に乗り移動中、暇なので籠の外で竜に跨り操縦している竜騎士に話しかけた。

「ちょっと！籠の外に出ないで下さいよ！落ちたらどうするんですか！」

確かに風もきつく、吹き飛ばされそうだけど、まあ問題無い。

「で、大会ですか？僕は出ませんよ、今回出るのは最近アルア姫様

の専任騎士になった少年と近衛騎士団の団長です」

「そいつ等、やっぱり強いのか？」

「そうですね、団長は近衛騎士の中で唯一の竜騎士ですから実力は竜神様の折り紙つきです。専任騎士の少年も姫様の護衛を任される位の实力はありますよ」

それは楽しみだ、そうだなドラゴンとも一度戦ってみたいな、この竜騎士に頼んでみるか・・・いや、やっぱり野生の竜とやる方が楽しそうだな。機会があったら探してみるか。

竜騎士に再度籠に戻るように言われたので籠に戻り大人しく到着を待つ、その間、リアとシルバリーフからのもう一人の大会参加者、シルバリーフの近衛騎士団長が勝手に籠の外に出て動き回るのが危険だと2人で説教かましやがった。

「みなさん、そろそろ到着ですよ」

竜騎士の呼びかけでようやく説教が終わり、地上に目を向ける。

「あれが自由都市フリージア」

中心に闘技場コロシアムが有りそれを囲むように街が広がっている。

多くの冒険者や旅人が集まる街、ここナインティリア大陸の中央に有るから、確かに拠点にするには良い所だろう。

フリージアに着いた俺たちは用意された宿に案内された。

さすがに一国の来賓を泊めるだけあって豪華な宿だけど、一般庶民な俺にはどうも落ち着かない、まあ、リアの護衛の役目もあるから俺だけ違う宿って訳には行かない仕方ないか。



「とりあえず新しい所に来たら探索だな」

「そういうもの？」

「RPGの基本だ、まあどうでもいいか、それよりなんか食い物探しに行かねえ？」

「RPG？よく分からないけど、私はまず到着したことをフリージアの代表に報告に行かないと・・・リヨウ、付いて来てくれる？」

「ん？わかった、とっとと終わらせて飯食いに行こう」

フリージアの代表か・・・この国は王制じゃないんだよな、他国との交流のために住民に扱われた代表者が数人居るということだ・・・正直どうでもいい。とっとと終わらせよう。

街の中心にある闘技場の隣にある邸、ここが代表達の仕事場になっている。

「ん？客か？悪いな今俺以外誰もいねえんだよ」

こいつがフリージアの代表の一人か？俺達が其処に着いた時、俺たちとそれほど変わらない年頃の男が代表の物であろう椅子に座りくつろいでいた。

「あんたは違うのか？」

「ああ、違う、君には俺が代表者みたいに見えるか？」

見えない、むしろどこかのチンピラに見える。

「そうだろうな、まあ俺はフリージアからの大会参加者だ、今は留守番中、なんか用なら後で改めて来てくれ、俺じゃ何も分からないからな」

「何適當に帰そうとしてるんですか・・・ちゃんと対応してくださいってお願いしたじゃないですか、すみません、お待たせしました。私がフリージアの代表の一人ハツキ リュウグウです」

俺たちの入ってきた扉とは別の扉から一人の女性が入ってきた。

こいつも人以外の種族か？頭に龍の角の様な物が生えてるんだが・・・

「ゴールド王国から参りました。マテリア シルバーリーフです」

「貴女が最近まで隠蔽されていたシルバーリーフの姫君ですか、大会中楽しんでいってくださいね」

「そっちの男は？」

ん？俺か？

「彼はリョウイチ アカヤ、シルバーリーフからの大会参加者の一人です」

「なら俺と当たるかもな、そんなときよろしくな」

「ああ、まあ、適当にな」

その後もリアとハヅキがごちゃごちゃ話していたが、難しいことはどうでもいいのでボーっとしていた。留守番をしていた男は自分の仕事は終わったと、早々に退室しているので暇だ。

やがて話も終わり俺達は街に繰り出していた。明日から武闘大会の予選が始まると言うことも有り、露店なんかが多く出ていてお祭りムードで盛り上がっている。

「は〜〜凄く緊張したよ〜、色々失敗しちゃたし・・・」

「そうか？上手く対応できてた様に見えたけどな」

ボーっと聞いてただけだけど特に問題があるようには感じなかったけどな。

「それでも無いよ、姉さんならもっと上手くやると思うのよ、剣ばかりじゃなくてももう少しこういうのも勉強しとけば良かったな・・・」

まあ、城から出て王女としての役割を果たす機会が有るなんて思っ  
て無かったのだから仕方ないだろう。

「んなもん適当で良いんだよ、面白ければ何でも有りだ、文句言う  
奴がいたらぶっ飛ばす」

リアは王女とか関係なく外を楽しんでいいと思う、今はあの離宮の  
中で感じていたモノからだいぶ解放されたのだから、これまでの分

も存分に楽しむべきだ。

「ぶっ飛ばすって、ほんとにやっちゃ駄目だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ」

「今の間は?!やる気なの?!」

「・・・冗談だって、それよりこんなに店が出てるんだ色々回ってみよう」

「又間が有った!?!ほんとに冗談?!」

「いいから、いいから、とりあえず楽しもう」

「もう、ま、いいわ、とりあえず本戦までやることも無いし付き合っ  
てあげる」

仕方ないから付き合ってるみたいな言い方だったけど、リアの表情は笑顔で今を楽しんでいることがちゃんと伝わって来る、楽しんでいるなら問題無い、俺はこれから先、この笑顔を守っていくだけだ。

### 三章 3話 開会、第一試合

フリージアの代表、ハヅキに挨拶を終え露店を堪能した後宿に戻ると、宿の前で近衛騎士団長殿がおろおろと取り乱した様子でリアの名を叫んでいた。

そう言えばこいつが部屋に荷物を置きに行っている間に出かけたんだよな、どうでもいいが・・・

って、説教は止めろ、聞き流すから何言っても堪えないけど時間をもったいない。

結局二時間ほど（俺だけ）説教が続いた、このアマ団長殿そのうち絞めてやる・・・

翌日には予選があったけど街を回るのに忙しかったので無視した。

更に次の日、試合が始まった。

その前に開会式とかあったみたいなんだけど、寝てたからよくわからねえ、開会式とか校長の長話的なものはいらねえし興味も無い、それよりも試合だ、リアも来賓席で見てることだしちょっと張り切ってみるか。

各国から2名で18名、予選が9試合×2名で18名の筈だけど、

選手を出していない国もあるようだ、予選もバトルロイヤルで勝ち残った2名が本戦出場らしいが1名しか残らなかった所もあるようで、本戦の参加者は28名となっていた。数が半端だな・・・

「リョウ、貴方も大会に参加したんですね」

組み合わせの発表を待っていると声をかけられた、こんな所にいる俺の知り合いなんてジン達ぐらいだけど、あいつらがこんなに礼儀正しい訳無いしな、まあ、見りゃ分かるか。

「どうも、お久しぶりです」

ライネスだった、ルージュ国の王子、上の兄二人が死んだから実質次期王、それがここで何やってる？

「ここは来賓席じゃないぞ」

「知ってますよ、僕も選手として登録しましたからここに居ても問題ないでしょう？」

いや、王子が選手登録すること事態問題だろうが。

「4年前の大会時、ルージュの選手枠は兄達が使用したようですし・・・僕も出ておかないといけないかなあ、と思いましたが」

出なくていいから、王子が危ないことするんじゃないよ。

「まあまあ、ほら、組み合わせの発表がされるようですよ」

ライネスと話しているうちに組み合わせの発表がされるタイミング

に至ったようだ。

さて俺の最初の相手は誰になるんだ・・・

## 一回戦第7試合

魔剣使い

深紅の魔王

ミーナ ブレイス

対

リョウイチ アカヤ

「・・・・・・・・・・って！ちよつと待て！！

なんで深紅の魔王とかなってるんだよ！！まさかリアが登録の時に  
なんか言ったのか!？」

「・・・・・・・・・・」

「おいコラ、ライネス、今日を逸らしたな・・・」

「な、何のことでしょう？僕にはさっぱり分かりませ「だったらち  
ゃんとこちを見ろ」すみません」

この野郎、深紅の魔王の名は前の戦争で広まったけど、それが俺だ  
ってことは世間に広まってないんだぞ、今ばっちり広まっちゃった  
けどー！！

「いやあ、ほら、運営の方が対戦相手のように何かいい呼称が無い  
かと、頭をひねっていたようですので、つい」

「だからって魔王はねえだろうが・・・まあ、いいや、多少ビビッてくれれば有利か・・・」

「警戒して全力で来られるかもしれませんがね」

・・・

・・・

・・・

「まずお前を絞めといった方が良さそうだな」

「すみません」

「つたく、人が前向きに考えてるのに余計なことを言うんじゃないねえ。」

「リョウの一回戦の相手、一般参加の人ですね」

「知ってるのか？」

「予選を見ていただけですけどね、複数の魔剣を使用して戦うみたいですよ」

「それで魔剣使いか、あの戦いの前なら魔剣を相手にするのはきつかったけど、今なら楽勝じゃないか？一回戦は問題無さそうだな。」



7回戦と言う事で俺の出番までしばらくかかるな、試合を見てるか、  
コロシアム闘技場内を探索するか・・・

適当に時間を潰しているうちに俺の試合の時間になる。

対戦相手は俺より少し歳下位の小柄な少女、腰にある特殊な鞘に4本の剣が納められていて、おまけに背中に小振りなハンマー（柄の部分は槍ぐらいあるけど）、少女が持つには重量オーバーじゃないだろうか？

「えっと、よろしく願います！」

「あ、ああ、まあ適当に頼む」

『始め！！』

魔法で拡声させた声で審判が開始の合図を出す。

「深紅の魔王さん、あたしの魔剣の威力試させてもらいます」

「あのな、魔王とか言われてるけど、死なない訳じゃないからな、でも、まあ、魔剣が相手なら問題無い、遠慮無く来い」

「いきます！！」

4本の剣の内1本を抜き放ち突っ込んで来る、当然魔剣だろう、俺はあの剣をどれでもいいから掴むことから始めないと、手で触れていないと魔装カオスアルマが使えない。

「んゝ！吹き飛ばえ！！」

アイアンブラッド

鉄血で強化し振り下ろされる剣を掴もうと思ったけど止める、大きく後ろに跳ぶと、俺の居た場所で爆発が起こった。

「避けましたね、ならこれでどうですか！！連なり弾けろ！！」

剣を2度振る左右から俺に向かい爆発が迫る、おー凄げえ迫力だ。強化して爆発が来る前に逃げるけどな。

その勢いのままミーナに迫り剣に手を伸ばす、俺が剣を掴んだ瞬間ミーナはあっさりと剣から手を離し別の剣を抜く。

「加速！」

カオスアルマ

「魔剣武装！」

奪った魔剣を魔装する、光となって俺の中に入った魔剣は爆発の魔剣、効果もそのまんまのようだな。

強化状態でなんとか追える程度の速度で斬撃が迫る、まあ、鉄血で強化した腕で全て受ける、服は破れたが俺自身にダメージは無い。でも次からは箆手を装備しておくでしょう。

アイアンブラッド

「おら！！ぶっ飛ばえ！！」

「っ！！加速！」

試しに爆発を起こしてみる、ミーナは今持つ魔剣の力なのか、加速して回避する。

「速度を強化した軽い斬撃とは言え、どういう身体してるんですか！？それにあたしの魔剣の力！？」

「まあ、対戦相手に自分の力を語る理由はないよな」

「つつ！いきます！！」

もう1本剣を取り出し元々持っている剣と共に振るう。

「雷、速、合魔剣！疾風迅雷！」

早い、避けるのは諦めて取り込んだ魔剣の爆発を全力でぶつける。

高速で迫る雷撃を爆発で相殺、だけど魔剣に限界が来た、前の時のように俺から離れ折れた魔剣がリングに突き刺さる。

折れた剣は無視してミーナに迫る、そろそろけりをつけないとな。

「あれも防ぎますか、なら！」

持っていた魔剣の1本をリングに突き刺し距離をとるミーナ、何のつもりか知らないけど、いいのか？魔装するぞ。魔装する為、リングに突き刺された剣に手を伸ばす。

ソードエクスプロージョン  
「魔剣破棄！」

「な！！」

魔剣を掴んだ瞬間、剣が爆発した。成す術無く吹き飛ばされるがリングアウトはせずに済んだ、助かった・・・身体中傷だらけだけど問題無い、直ぐにでも治癒できるレベルだ。

「やるな、油断してたぜ、でも、そうでなきゃな、暇潰しにならね

えからな！」

「そんな、あたしの奥の手なのに、平気なの！！」

「いや、結構効いたぞ、で、まだ魔剣はあるんだろ？ 決着つけようぜ」

とは言え魔装は止めた方が良さそうだな、又爆破されても厄介だし。

「っ！ いきます！ 風、速、合魔剣！ 駆け抜ける疾風！」

先ほど以上の速度で斬りかかってくる、それを避けて背中に蹴りを入れる。

「え？ きゃあああああ！！！」

ミーナ自身の技の勢いも加わっていたので面白いように飛んで行った。

『勝負有り！ ミーナ選手場外によりリョウイチ選手の勝利です！！』

まあこんなところかな、やっぱ、大陸中から腕自慢が集まるだけあって、この後の試合もなかなか楽しめそうだ。

「んゝまだまだ錬鍛が足りないようですね、リョウイチさん次の試合頑張ってください」

「おお、ミーナだったか、あんたの戦い方も面白かったぞ、でも悪いな魔剣何本か駄目にしちゃったしよ」

「気にしないで下さい、ちょっと手間ですけど又作りますから」

さっきの試合で使った魔剣はミーナが作ったものらしい、主に魔剣を打つ鍛冶師、魔剣鍛冶師だそうだ。

「という訳で、これをどうぞ」

そう言ってミーナがくれたのは懐に納まるくらいの小振りのナイフ、これもミーナの作った魔剣なんだそうだ、護身用で作った物らしく、大人の男を吹き飛ばすくらいの衝撃波を放てる代物だそうだ。

「あたしの作ったものなのでそんなに強力じゃありませんけど、毎回相手の魔剣を奪わないと力を使えないんじゃないかと不便ですからね、相手が魔剣を持ってないと力も使えませんが、良かったら使ってください」

俺カオスアルマの魔装が魔剣を取り込む力だってことは分かったみたいだな、せっかくだから有り難く貰っておくでしょう。

今日の試合が全て終わったので宿に戻ったんだが・・・

「ううう・・・・・・・・しくしくしくTT」

何泣いてるんだ近衛<sup>こぐつ</sup>団長。

「それが、ミストも今日第1試合が有ったんだけど、一般参加の子に負けちゃってね」

リアが俺の疑問に答えてくれる、どうでもいいけど団長<sup>こぐつ</sup>いつまでもここで落ち込んでいられると邪魔だな・・・

「リア、勝ったぞ」

とりあえず報告だな。

「うん、見てたよ、でもあんまり女の子いじめちゃ駄目だよ」

いじめてるつもりは無いんだけど・・・対戦相手が俺じゃ諦めてもらうしかない。

「まあ団長<sup>おまえ</sup>の分も勝ち進んでやるよ、だからいつまでも落ち込んでないでリアの護衛に専念しとけよ」

団長も励まして？なんとか立ち直らせておく、まあ、主にリアが慰めたんだけど・・・

こんなのがシルバリーフの近衛騎士団長で大丈夫か？

### 三章4話 対話、第二試合

俺の試合は第二試合4回戦、まだ時間があるので闘技場内コロシウムをうろついて暇潰しをしていたんだが、これはどういうことだ？  
周りに人が居ない？さっきまでは観客や大会の役員が居たよな・・・

「君が深紅の魔王かな？」

俺が戸惑っていると後ろから突然声をかけられた。

「別に自分で名乗ってるわけじゃないんだけどな・・・」

腰に2本の刀を差した黒髪の男、刀か・・・こっちでは使ってる奴あまり見かけないよな、まあ、どうでもいいけど・・・この状況、こいつがやったのか？

「何だお前？この状況、お前がやったのか？」

「まあ、そうだよ、これからする話をあまり他の人に聞かれたくないからね、ちよつとこの空間を斬り取らせてもらったよ、大丈夫、試合の時間までには解放するから安心して」

「はあ、めんどくせえ・・・で？何を話すんだ？」

「まずは確認、君は異世界からこの世界エルリオールに来たんだよね？」

俺はエルリオールこっちに来てから一度も誰かに異世界（地球）から来た

って話しはしてない筈だぞ。

「お前、何を知ってやがる」

少々警戒を強め、いつでも殴り倒せるように身構える。

「そんなに警戒しないで、君が異世界から来たって言うのは僕の予想だよ、でも、今の反応を見る限り間違っ  
てなさそうだね」

ちっ、失敗したな・・・まあ、仕方ない。

「君はこの世界の夢見の民って一族は知っている？」

「いや、聞いた事無いな」

「夢見の民って言うのは未来を予知する力を持った一族のことを言うんだ、僕の仲間の夢見で最近の出来事・・・ルージュとゴルドの戦争なんてのも有ったけど、その中に君が出て来ないんだ。

君と言う予知に登場しない人物に因って未来は予知とは違う物に変わった。

僕の知る限り、夢見の予知に登場しない上に未来を大きく変えることが出来る人物は異世界、元々地球に居た住人しか居ないんだよ」

そう言えば、自称神も俺あいつの存在が良くも悪くも未来に影響を与える的な事を言っていたな・・・それを分かっているこいつは、俺以外の異世界人を知っている、もしくはこいつ自身が俺と同じか・・・

「僕は、君がエルリオールこの世界で何を成そうとしているのかを知りたい、返答次第で僕は君の敵になる・・・」



「はあ、めんどくせえ・・・まあ、そうだ、俺はこの世界に元々居る人間じゃない、お前の言う通り地球から来た、それに・・・」

男の質問に答えるため俺は多少強化をかけて床を踏み砕いた。

「地球人だが、純粋な人間って訳でも無い・・・こんな力を持つ俺だ、地球での暮らしは退屈すぎるんだよ、そんな中この世界エルリオールに来る事になった、この世界なら俺の力も存分に奮えるだろ？」

安心しろ、この世界エルリオールに俺を呼んだ奴との約束も有る、無闇に誰かを傷つけたりしねえよ」

自称神あいつとの約束、未来を良い方向に向かうように気にかける。それに、守りたい奴リアもいる。

「うん、安心したよ。

君が本当に魔王じゃなくて良かった」

「ふ、口で上手いこと言ってるだけかも知れねえぞ」

「なんとなく、君も僕と同じじゃないかって思うんだ、この世界で守りたい者が出来た。その人が悲しむようなこと絶対にしないよ」

「・・・・・・・・」

「あ、そろそろ限界かな？僕は少し先の未来の為にあまり干渉できないからね、ここでの物語りは君に任せるよ。どうか悲劇を断ち斬り、幸せな未来を紡いでくれ」

「あんた、何者だ？」

俺を試したかと思えば未来がどうか・・・言ってることはよく分からない。

「僕も君と一緒にだよ、異世界からエルリオール（こゝろ）に来て、守りたい人の為に戦っている」

「俺は好き勝手やってるだけだ」

「はは、それでも良いよ、君が目指す未来ならそう悪い物にはならないだろうしね」

そう言って男は背を向け歩き出し、少し歩いたあとふと足を止め振り返った。

「そうだ、これも夢見の予知なんだけど、ルージュの王子が大会に参加している筈なんだ、彼のこと気にかけておいてくれないかな？放っておくと多分死ぬからね、今回僕はあまり干渉できないから・・・頼んだよ」

「は？ライネスが？」

聞き返そうとしたが回りに人が現れた、元に戻ったのか？・・・俺の声は男に届いていない、男はそれ以上何も言わず立ち去ってしまった。

『第二試合4回戦を始めます！選手の方・・・』

丁度、俺の試合が始まる時間が来てしまった。仕方ないリングに向かうか・・・

「リヨウ、やっと来ましたね」

「あ、リヨウイチさん急いだ方が良いよ」

途中、ライネスとミーナに出会った。

・・・放って置くとライネスが死ぬと言うさっき男から聞いた言葉が頭を過ぎる。

前の戦争でライネスの兄二人が死んでるからな、その上ライネスまで居なくなったらルージュの状況は悪くなるだろうな、面倒だがちよつと気にかけておくか。

「ライネス、大会中ちよつと身の回りに気をつけろ、なんかよくない予感がする」

正直にお前は死ぬとか言っても駄目だろうな、まあ、少しぼかして注意しておこう。

「ミーナ、この前貰った魔剣、魔短剣か？使わせてもらうな」

「はい、頑張ってくださいね、それと、リヨウイチさんの次の対戦

相手ですけど、試合後少し話がしたいので引き止めてもらえませんか？」

「?まあ、いいけど・・・」

「相手の名前、気になるんですよね、ソードなんて家名そう無いですから・・・」

ソード?そう言えばこの前会ったジンもソードだったな、ジン ソード、確か魔剣鍛冶師グラフト ソードの孫って言ってなかったか? そうか、ミーナも魔剣鍛冶師だから同じ家名の相手が気になるのか、まあ、その辺は試合後だな。

「お願いしますね」

『えー、それでは第二試合4回戦を始めます!両選手、準備はいいですね?』

## 第二試合4回戦

|       |          |
|-------|----------|
| 深紅の魔王 | 大戦槍の少女戦士 |
| リヨウイチ | シルク      |
| アカヤ   | ソード      |
| 対     |          |

「また女か・・・やりにくいな・・・」

「これでもちゃんとした冒険者ですから、あまり嘗めないで下さい」

確かに対峙する少女は、その細腕で振り回せるとは思えない大剣のような刃を持つ大きな槍を普通に肩に担いで来た、見た目以上の怪力なのだろう。

「それは悪かった、じゃあ、始めようか」

「ええ、いきますよ」

『第二試合4回戦開始!!』

開始と同時にミーナに貰った魔剣を魔装する。

「カオスアルマ魔剣武装!!」

シルクは大槍を軽々と振り回し攻撃を仕掛けてくる、今回は手甲をはめてるけどこんなもの受けたら只じゃ済まなくないか？注意が必要だ。

槍の横っ面に衝撃波を叩き込み軌道を逸らして攻撃を避ける。

「前の試合で使っていた能力ですね、魔剣を取り込み身体を強化するってところですか」

「取り込んだ魔剣の力も使えるけどな！」

距離を置いてシルクに衝撃波を放つ。

大槍を盾にして衝撃波を防ぎやがった、大人の男ぐらいなら軽く吹き飛ばせる筈なんだけどな、それだけあの槍が重いつて事か？

「魔剣を待ってるようには見えませんでしたけど・・・」

「短剣だからな、見つけられなかったただけだろ？隠してる訳でもないしな」

言いつつ距離を詰め拳を叩き込む、これも槍を盾にして防がれるけど・・・拳を防がれた後、下から持ち上げるように槍に衝撃波を叩き込む。狙うのは槍、衝撃波に続き左右の拳を下から叩き込む。シルクは槍を強く握り俺の攻撃に耐えている、俺の下からの攻撃を耐えるために下に力を込めているだろうから、いきなり槍に上から蹴りを落とす。

「あっ！」

狙い通り、槍を地に叩きつけることが出来たので槍をそのまま踏みつけ、空いた身体に拳を叩き込む。

「っ！疾風<sup>ハヤテ</sup>！！」

俺の拳は空を切った、見るとだいぶ前の方にシルクが非難している、今動きが急に早くなったな、こいつも強化を使うのか？

でも槍を手放さなきゃいけなかった様で槍だけ俺の足元に有る、咄嗟に武器を手放すなんて潔いな。

とりあえず槍を拾い上げ振り回してみる・・・うん、無理だな、扱

い方なんぞ全くわかんねえ、強化してれば振り回す事に問題は無いんだが・・・慣れない物を使うべきじゃないな。

槍を力一杯リングに突き刺す、まあ、シルクの怪力なら簡単に抜けるだろうけどどうでもいい。

使えないようにしたいならリングの外に投げ捨ててやればいいんだし・・・さすがにそこまではやらないけどな・・・

「力には自信があるんですけど、アタシの大戦槍せんそうを軽々振り回すなんて・・・貴方も力は有るようですね、でも速さはどうですかね？疾風！」

ちっ、また加速した。俺も身体強化して迎撃するか・・・

「旋風！」  
センブウ

ん？こいつのやってるの強化じゃないのか？シルクの蹴りと共に風が巻き起こる、衝撃波をぶつけて相殺したけど・・・なんだ？こいつの力？ソルダの使う付加魔法エンチャントのようにも見えるけど詠唱している気配が全く無い、さっぱりわからねえな、まあいい、注意しつつ適当にやろう。

と、考えてるうちに・・・大戦槍って言ってたか、槍を取り戻された。

結構深く埋めたのに軽く引き抜く辺りやっぱりこいつはバカ力だな、スピードも有るしやり難いなあ・・・

「旋風槍！」  
センブウソウ

うお！さっきの風より威力が高い、衝撃波1発じゃ無理だな、ミーナに貰った魔剣は連続して衝撃波を放つ事は出来ないし、ここは逃

げるか・・・

足の強化を強くし駆け出す。

「む！速い！でも負けませんよ、疾風！」

追いついて来るか、もうちょい強化した方が良さそうだな・・・

横薙ぎに振るわれる大戦槍をしゃがんでかわす、そこに回し蹴りと風による追撃が来る。

「ちっ！」

シルクの蹴りに合わせる様に俺も回し蹴りを放ち衝撃波で追撃する、これで相殺。

「むっ、なんだか手加減されているような気がします」

「試合なんだし加減するのは当たり前だろうが、全力でやったらどつちかが死ぬぞ・・・」

俺の全力だとシルクを挽肉に変える位楽に出来るだろうな、実際に前にリアを襲った暗殺者を潰したしな。

第一試合開始前から悪目立ちしてるのにこれ以上目立ちすぎるのもあれだ、やり過ぎない位で丁度いい。

「まあいいです、負けた後での言い訳は聞きませんから」

「はっ、負けねえよ！」

後手に回っていると攻撃を相殺したくなるのでこっちから仕掛けてみ



る。

アイアンブラッド

鉄血で硬化した拳で正面から打つと、拳を回避する為後退しながら風を放ってくる、衝撃波を飛ばし無理矢理風を掃い追いかけて追撃する、拳の連打を叩き込むも、槍に防がれる。

「うう・・・どう考えても拳と槍のぶつかってる音じゃないですよ  
ね?! 一体どんな身体してるんですか?!」

「こういう身体だ! 余計な事ばっか気にしてると一気に終わらせるぞ!」

リングの一部を踏み碎き石片を舞い上がらせる、それをシルク目掛けて拳で撃ち出した。

「おわ!」

案の定、槍を盾にされるけどそれでいい、しばらくそこに留まってくれれば・・・

「あが!？」

シルクの脳天に石片が直撃した。

俺が真っ直ぐに撃ち出す、横からの攻撃は槍を盾に防いでいたけど、同時に上に撃ち上げていたいくつかの石片の1つが上手いことシルクの頭に当たったんだ。

打ち所が悪かったのか? 今の一撃でシルクは気絶、試合は俺の勝利で終わった。

### 三章5話 ミーナ、シルク、ライネス

第二試合終了後、俺は気絶したシルクが運び込まれた医務室にミーナを連れて訪れていた。

試合前にミーナがシルクと話をしたいって言ってたけど、さっきの試合でシルクのこと気絶させちまったんだよね、大丈夫か？

「あれ？リヨウイチさん、どうしたんですか？」

医務室の扉を開けると意識を取り戻しピンピンしているシルクが椅子に座っていた。

「もうだいじょうぶなのか？」

「あ、はいもう大丈夫ですよ、治癒魔法のおかげで傷も残ってませんね。でも、リヨウイチさんは怪我してなかったんじゃない？あ、心配して来てくれたんですね、ありがとうございます」

どうやら、今大会の為に集められた治癒魔法使い達の腕は確かのようにだ。

まあ、大事が無くて良かったと言う事しておく・・・余談だがこの世界の人は地球の人よりも丈夫な体の創りをしている、何度かソルダとかを殴って行き着いた結論だが、間違っては居ない筈だ。

「こんにちはシルクさん、あたしはミーナ ブレイス魔剣鍛冶師をやっています。ちなみにリヨウイチさんの一回戦の対戦相手です」

待ちきれなかったのか、俺の後ろから出て来たミーナがシルクに語りかけた。

「あ、どうも、前の試合はアタシも見てましたよ、どちらかが次の対戦相手でしたからね、でも、魔剣鍛冶師ですか・・・どうりで大量の魔剣を所持している筈ですね」

「はい、それでちょっと聞きたいんですけど・・・」

「ミーナちゃんも魔剣鍛冶師って事は・・・グラフト ソードについてかな？」

「えっと、そうです。魔剣鍛冶師グラフト ソードは魔剣鍛冶師の最大の目標である天剣を生み出したって噂の後、全く噂を聞かなくなりましたから、今どうしているのかと思っていたんですけど・・・そんな中、家名が同じシルクさんを見つけて、グラフト ソードと何か関係あるんじゃないかって思ったんですけど」

「うん、グラフト ソードはアタシのお爺ちゃんだよ」

正解だな、シルクはグラフトの孫のようだ・・・ってことは、こいつジンの妹か従兄妹ってところか？

「でも、残念ですけど、お爺ちゃんはもう居ませんよ、噂にある天剣を造った後数日して息を引きとりましたから・・・それに、お爺ちゃんの造った天剣は完璧じゃないんですよ。本来天剣と言うのは創剣と言う心剣を造り出す力を持たない者が、自らの力のみで代償を払う事無く造り出した、心剣と同等の力を行使する事の出来る魔剣を指すんですけど、お爺ちゃんは天剣を造る際に自らの魂と消えかけた精霊の魂を使っていますからね・・・」

「精霊の魂って！それは魔剣鍛冶師としては最低の邪道ですよ！！」

「いえ、あの場合はそうしないと精霊は完全に消滅してたから、解放する術もちゃんと用意してあるから完全な邪道って訳でもないんだよね・・・」

2人が話し込み始めたので俺は完全に置いて行かれることになった。魔剣は俺の能力、魔剣武装カオスアルマにも関わるからちゃんと話を聞いておけば役に立つんだろうけど・・・めんどい。

俺の頼まれた役目はミーナをシルクと引き合わせる事、なら俺の仕事は終わっているしライネスの試合でも見に行くか・・・確かもう直ぐ始まるはずだよなあ？俺の試合の前にあいつに聞いた話も気になるし、様子を見に行ってみるか。

その事を2人に告げ俺は医務室を出てそのまま闘技場コロシウムに向かう、せっかくなので来賓席に行きリアと近衛団長ミストに勝利報告をしておく。

今回はリアとミスト2人に女の子を虐めるなど説教された。試合だから仕方ないだろうが・・・

っと、そんなことよりライネスの試合だ・・・ってもう始まっているのか？！

ちっ、ライネスの二つ名聞き逃したな、俺のみたいに变なのだったら後でからかってやったのに・・・

舞台の上でライネスが冒険者風の男と対峙している。相手は一般参加の奴だな。

男が試合相手か、正直その方がやりやすいだろうなあ、花は無いけ

ど。

ライネスは男の攻撃を剣で受け、隙を突いて炎の攻撃魔法を放つ。

接近戦より魔法の方が得意だと言ってたけど・・・さすが騎士国の王子、剣の方もそこそこ使えるのだろう、冒険者の男と普通にやりあっている。

「ライネス、結構強かったんだ・・・」

戦争の時も俺はライネスの戦いを見てなかった為、ライネスの戦いを見るのは今日が初めてだ。

「一国の王子だしね、余程のぼんくらで無い限りそこそこの自衛手段は持ち合わせていると思うよ」

政に関わる立場上頭も良いよな、そう考えるとライネスのスペックは高いようだ。

俺なんかは難しい事はあまり考えたくない、体力バカだから考えるより行動する方が得意だ。

「リアは全試合観戦してるのか？」

「そうよ、元々その為に招かれてるんだしね、因みにリョウの次の対戦相手も女の子だから・・・あまり虐めないようにね」

「まじかよ、めんどくせえ・・・で、強そうな奴はいたか？」

「えっと、ライネスさんと、この間出会った冒険者の・・・」

「リジアか？」

「うん、彼と・・・アステアの近衛団長で竜騎士のスピアさん、あと一般参加ではサンダって言う魔法使いと、リョウの次の対戦相手かな？一回戦でミストに勝った娘ね、今勝ち残ってる中で強そうなのはそれぐらいかな？」

「意外と少ないな、そこらじゅうから強い奴が集まってるかと思っただけど・・・」

「まあ、相手が悪くて敗退しちゃってる人を入れるともう少し増えるよ、シルバ<sup>うち</sup>リーフのミストでしょ、クインシスの格闘教師ナクルさん、マナティリアの魔道騎士エイリーさん、アステアのもう一人の参加者で新米近衛騎士のアテアスさんもね・・・それと、強いかどうかは分からないけど一回戦で一般参加の2人・・・イズミさんにトモカさんだったかな？その2人が面白い事やってたわね」

「籤運で半分ぐらい強そうな奴も落っこちてるのか・・・まあ、次の相手は楽しめそうだな・・・」

リアとそんな話をしながらライネスの試合を見てみると、やがて決着がついた、冒険者の男が体勢を崩した所へライネスの放った爆発魔法によって男はリングアウト、今回の試合では危なげな所も無く問題無く勝利したようだ。

「ちょっと行って来るな」

「あ、うん」

リアに一言断って俺は試合を終えたライネスの所へ行く。

「よ、お疲れ、問題無く勝ったみたいだな」

「はい、お互い三回戦まで進みましたね・・・でもリョウ、次の試合は油断しないで下さい、リョウの対戦相手少し厄介そうですよ」

はぁ・・・まあ初見で相手するのはどうしても厄介だろうけど、次の相手に何かあるのか？

「試合中に小声でしたけど九薙流と呟いていたのが聞こえましたから・・・」

「それがなんなんだ？」

九薙流？何かの流派か？そんな厄介なものなのか？

「二年ほど前と一年ほど前にウィザレスク大陸の東部で起こった事件を解決した、英雄の使っていた剣術なんですよね・・・ま、脅しか本当かは分かりませんがね」

「英雄の剣術か、はは、なかなか楽しめそうだな」

「いやいや『楽しめそうだな』じゃ無くってですね、リョウの強さが規格外なのは知ってますけど、油断はしないで下さいよ」

まあ、心配してくれているのは分かるからな、注意はしておこう。

「そう言えば、試合前に話していた娘はどうしたんですか？」

「ああ、対戦相手<sup>シルク</sup>が気絶したから医務室だ、引き合わせはしたしミナ<sup>こっち</sup>の目的の人物だったみたいだけど、話についていけなかったからライネスの試合に来たんだ、まだ医務室で話し込んでるんじゃないか？」

「魔剣鍛冶師のミーナさんとソードの家名を持つシルクさん、目的の人物だったと言うことはシルクさんは魔剣鍛冶師グラフト ソードの関係者ですか・・・」

ライネス  
こいつ、本当に色々知ってるなあ、英雄の使ってた剣術とか魔剣鍛冶師のグラフトって奴とかとか・・・これが王子の実力か？！

ライネスが2人の会話にちょっと興味が湧いたようなので、俺たちは医務室に向かうことにした。

ライネスはこうやっていろんな情報を得ているのか？只の野次馬根性じゃねえ？

まあ、2人がまだ居るかどうかは分からないけど・・・俺たちは医務室に向かう。

「孫らしいな、後さあ前の戦争の時ライネスに着いて行った3人の中にジン ソードって居ただろ？」

「居ましたね、彼が居なかったらあの古代遺物<sup>アーティファクト</sup>を破壊できていたか分かりませんね・・・って、彼もソードですね」

「ああ、ジンが自分のことグラフトの孫だと言ってたからな、シルクとは兄妹か従兄妹だろうな」



「兄さんに会ったんですか!？」

「「おわ!!」」

急に大声で声をかけられたため、ライネスと2人して飛び上がるように驚いてしまった、

ちよっと恥ずかしい・・・

で？誰だ？急に離しかけてきたのは？

・・・シルクだった、ミーナと共に医務室から出て来て何処かに向かう途中のようだ。

「いつ!？何処ですか!？何してたんですか!？」

「ちょっと待て、まずは落ち着け・・・

で？シルクはやっぱりジンの知り合いか？」

まともに話が出来るくらいには落ち着かせて、まず確認する。

「はい、ジン ソードはアタシの兄です、とても大事なモノを届ける為に探しているんですけど、なかなか見付からなくて・・・兄さんはお爺ちゃんの作った魔剣を回収もしくは破壊する為に旅してるので、この大会に出る出場者の魔剣を確認する為に出てくるんじゃないか、と思ってアタシも出場してみたんですけど・・・」

「ジンは出て無かったってことか」

「はい・・・」

うわぁ、なんか落ち込んだよ、おい・・・

でも俺もあの後のジンの足取りなんて知らないからなあ、どうしたものかな・・・

「そうですか、でもすみません、僕達もジンさんが今どこに居るのかは分からないんですよ」

おいおい、ライネスそんな正直に話したらもっと落ち込んだじゃうだろ、でもそう答えるしかないんだよなあ・・・

「そう、ですか・・・」

「でも探し方は間違っていないと思いますよ」

「そうだな、俺がジンに最初に出会ったのは偶然だけど、二度目は戦争の時、あいつルージュの魔剣部隊を潰す為に来てたからな、魔剣の集まっている所で待ってればその内来るだろ？」

「そうですね、もしくはどこかに落ち着いてそういった噂を流してみてはいかがですか？

なんでしたらルージュがまた魔剣部隊を作ってるとか噂を流しましょうか？」

「ライネス、お前結構頭良いと思ってたけど・・・バカだろ？んな噂流したらルージュがまた戦争しかけるんじゃないかって疑われるぞ・・・」

「あ、そうでした・・・」

「ははっ、ありがとうございます。噂を流すって言う手は落ち着い

た後協会にでも依頼してみますね（あまり兄さんに迷惑かけたくないんだけど、こうも会えないと何らかの手を打たないといけないですね）」

「各地で魔剣を破壊してるんだろ？結構派手に動いてるみたいだし、噂を追っていきばいいだけじゃねえのか？」

「それが全然追いつけないんですよね、だから先回りしようとしてるんですけどね・・・」

まあ、やっぱり最初にやってるんだよな、一応確認で聞いただけだ。

「でも、この大会でグラフト ソードの魔剣を使ってる選手って居ないですからね、というか、魔剣はあたしぐらいしか使ってないんですよね、今回の先回りは失敗だったみたいだね」

「そうか、この先の試合は魔剣出てこないのか・・・まあ適当にやるけど・・・」

「あ、またあたしの魔剣持って行きますか？」

「いや、大丈夫だろ？問題ねえって」

「だからって油断しないで下さいよ、次の相手は英雄の剣術を使うかもしれないんですから・・・」

ライネスは心配するけど俺はあまり気にしていない、英雄だかなんだか知らないけど関係無いだろ？

「英雄の剣ですか？」

俺は気楽に構えているんだが英雄の剣術にシルクが反応した。

「ああ、ライネスが俺の次の対戦相手が、前の試合中に九薙とか呟いていたのを聞いてるんだ・・・まあ、どうでもいいけどな」

「クナギですか・・・それが本物で腕の立つ者なら厄介ですよ」

「シルクさんは九薙流について何か知っているのですか？」

「前に戦ったことが有るだけです。もっともまだ彼が英雄と呼ばれる前の話ですけどね、九薙の剣士が相手なら気を付けて下さい、あの時の彼以上の実力者ならアタシよりも速さは上です。更に魔法使いやアタシのような特異能力者でもないのに、風を繰る剣技を扱ったりしますから」

そうか、シルクより速いのか、次の試合は更に強化をかける必要がありそうだな、まあ、適当にやるだけだが・・・

「あ・・・」

「ん？ライネス、どうかしたか？」

「いえ、大した事ではないんですけど、僕の次の対戦相手の試合・・・終わったみたいです」

あ、ホントだ、ライネスの試合の次の試合が終わり、更に次の試合の選手が呼び出されていた。

「どんな相手が勝って来るのか確かめておきたかったんですけど・・・

・仕方ありませんね」

「はは、俺なんか自分の試合以外ほとんど見てないんだ、問題ねえ、でも氣い付けろよ」

「そうですね、油断はしませんよ」

俺が試合前に話した男の言っていた予言の内容も、まあ氣になるの  
で、ライネスには注意を促しておく、こいつの実力ならそう簡単に  
はやられないと思うんだけどな。

「それじゃあ、あたしも大会を最後まで見ていきますので、2人と  
も頑張ってくださいね」

「リョウイチさんの次の対戦相手も氣になるので、アタシも大会を  
最後まで見ていきます。」

ま、まだまだ修行中の身ですから、強い人たちの戦いを見て参考に  
させてもらいます」

ミーナとシルクと分かれて俺とライネスは来賓席、リアの所へ戻る。  
今日の全試合が終わり皆で宿に戻る、ライネスも来賓の一人の為宿  
も一緒だった。

しばらくリアと話しゆっくりしていたが、俺は明日の試合に備え早  
めに休む事にした。

英雄の使ったモノと同じ剣術を使う剣士、明日の試合もなかなか楽  
しめそうだ・・・

・・・はあ、何だこれ、誰もそんな事言っていなかったけど、わざとか？

翌日、試合の舞台<sup>リング</sup>に上がった俺は思わずため息をついていた。

### 第三試合2回戦

深紅の魔王

疾風の美少女剣士

リョウイチ

アカヤ

対

エリス

アサギリ

対戦相手、また女かよー！！

### 三章6話 急転、第三試合

審判の合図と共に俺もエリスもお互いに向かって駆け出した。

刀と拳、リーチ的には俺の方が不利だ、まあ、身体強化と鉄血アイアンブラッドでどうにかするけどな。

俺はまず刀を狙い拳を放つ、刀と拳じゃリーチで負けるけど刀を狙えばそれに関係無い。

前の試合から着けている手甲も、適当に買って来たにしては丈夫だ、刀ぐらいなら防げるだろう。

しばらく刀と拳がぶつかり合う音が会場に響く・・・やばいな、思った以上に早い、シルクの話だと更に早くなるんだよなあ、いっばいまで強化しないといけないかもしれないな。

「九羅の剣士か、確かに厄介だな・・・」

「あら？ばれてしまいましたか？」

「ん？何がだ？」

エリスが俺の呟きに反応し話しかけてくる、俺は拳と刀をぶつけ合っているながらもそれに答える。

「アタシが使う剣術が九羅流剣術だと言うことをです」

「いや、ライネスが前の試合でお前が自分で言ってたのが聞こえた

って言ってたぞ」

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？」

無意識か、こいつもある意味馬鹿だな。

「ま、まあ言ってしまったものは仕方ありません。ここからは遠慮無くやらせてもらいます」

俺たちは一旦距離を置き対峙する、とりあえずめいっぱい身体強化して拳に鉄血をかけておこう。  
アイアンブラッド

ライコウセツカ  
「雷光石火！」

つつっ！！更に加速した。強化しておいたおかげで見失わずには済んだけど・・・・・・・・！！

右側からの斬撃を右手の手甲で防ぐ、っち、さっきより斬撃が重くなってやがる！次は・・・・背後に回ったか！？

「九薙流、ソウナギ双薙！！」

振り向いた所へ振るわれた斬撃を左の手甲で受けるが、予想していた衝撃と違った衝撃が手甲を打ち、俺の手を弾き飛ばす。

何だ今の？衝撃が二回来たぞ、俺の強化した目でも相手が刀を2度振るっている様には見えなかった。ってことは、通常の斬撃にもう一発プラスして斬撃が放たれる技って思っておけばいいだろう。魔法なんてもののある世界だ、常識外の技が有ってもおかしくないだろう。



って、体勢を崩しながらのん気に考えている場合じゃない！

「九薙流、風薙！」  
カゼナギ

俺の隙について放たれる技、風の刃が俺を吹き飛ばす。

やばい、このままじゃリングアウトする！？

「魔剣武装！カオスアルマっうらあ！！」

とっさにミーナに貫った魔剣を魔装し上から自分に衝撃波を放つ。

俺はリングアウトする前にリングに叩き付けられる様に着地する、  
予め身体強化していたおかげでダメージは殆んど無いけど、こういうのはあまりやりたくないな・・・

「流石に、第三試合こいしまで来ると簡単には勝たせてくれませんか・・・  
九薙の技を隠さず使って行ってるんですけどね、ま、前の試合も簡単では無かったですけど」

「はは、楽しませてくれる、そうでなきゃ出た意味も無いけどな！」

どうも俺は後手に回ると面倒な事になるようなので、こちらから仕掛ける、鉄血アイアンブラッドを脚にかけ、一気に距離を詰め脳天目掛け脚を振り下ろす。

正面から真っ直ぐ突っ込んだぐらいなら反応できるか・・・刀で受け流される。

蹴り上げて上段に後ろ回し蹴り、受け流されるけど、そのまま逆の脚で回し蹴りを放つ、これも受け流されるのは予想済み、素早くしゃがんで、相手の足を払うように蹴る。

エリスはとっさに跳んで避ける、空中だ・・・

「風薙！」

「はっ！」

無防備になる事が分かっているから空中で風の刃を放って牽制してくる、でも今の俺は魔装中、衝撃波を放ち相殺し、まだ空中に居るエリスにサマーソルトキックをお見舞する。

強化状態の俺の蹴りをまともに受けそのまま場外に・・・

「センブウ旋風！」

行かなかった、リングアウトする前に刀を振りぬき、自身の周りに風を巻き起こして吹き飛ばされるのを止めた。まあ、そう簡単にはいかないか・・・

「今のは危なかったです」

「なんか余裕そうに見えんだけどな・・・」

「それでもありませんよ、それにしても早いですね・・・師匠以外でアタシより速い人初めてです」

「そうか？ここじゃごろごろ居るだろ・・・」

シルクとか結構早い、俺以外にもエリスより速い奴は居るだろう・・・

「ま、いきますよ！風薙！雷光石火！」

エリスが風の刃を放つと同時に駆け出す。

俺は風の刃に衝撃波を放ちエリスとは逆に駆け出す。

風の刃を放たれれば迎撃の衝撃波を放ち、また、こちらからも衝撃波を放つ。

お互いが高速で動きながらの撃ち合い・・・って、当たる訳がねえ・

さてどうするか・・・

俺たちは高速で動き続けているので、観客の中には俺たちが何やってるか見えていない者が多いだろう、それって試合としてどうなんだ？まあ観客を楽しませる為にやってる訳じゃねえからいいんだけど・・・

やっぱり接近戦だな、この俺が魔装した魔剣の衝撃波も相手を吹き飛ばすには申し分無いけど、エリスには当たらない。

俺は風の刃を掻い潜りながら少しずつエリスに近付いて行く・・・

「旋風！」

ちっ、あと少しといったところで、さっきエリスを吹き飛ばした時の技で周囲を風で薙ぎ払われる、喰らうと厄介なので距離を取りまたやり直した、戦闘が膠着している、面倒いな・・・

でもあの技、旋風か？周囲は薙ぎ払ってるけど上は空いてるよな、攻めて見るか。

「同じことばかり続けても勝てないだろう？そろそろ終わらせないか？」

「っ！でも、続けてるうちは負けません。（この間に何か手を考えないと・・・）」

「まあ、仕掛けさせてもらう！！」

狙いを悟らせないように動き回り前後左右から衝撃波を撃っていく。さっきと同じように風の刃を掻い潜りながら少しずつエリスに近付いて行く・・・

狙いはエリスが旋風って技を使う瞬間。

「っっ！旋風！！」

来た、今回は距離を取る為の後退は無し、エリスが俺に背を向けているうちに跳ぶ・・・

「・・・あれ？」

よし、俺を見失った、後は・・・上からエリスの頭を押さえリングに這い蹲らせる・・・試合だしな、殺るならここで頭を吹っ飛ばすけど・・・

「これで、俺の勝ち・・・でいいよな？」

「はい、アタシの負け・・・ですね」

『試合終了ーーーー！！勝者！リョウイチ アカヤ選手！！』

審判が俺の勝利宣言をして試合終了、九籙の剣士エリスか・・・確かに少し手古摺ったけど、強敵って程でもなかったな、エリスの動きもどこか鈍かったし俺みたいな素手の奴相手にするのは慣れてないのかな？まあ、勝ったんだしどうでもいいか。

次は・・・ライネスの試合か、昨日の男の言葉も気になるし一応見ておくか・・・

で？ライネスはどこだ？試合までまだ時間はあるけど、ライネスならもう来ててもおかしくないんだけどなあ？

不意に来賓席のリアと目が合ったので聞いてみる事にする、ここからだいたい距離があるけど強化して互いの声だけに集中すれば聞こえるだろう・・・

「あ、聞こえた・・・」

リアに向けて一人で喋っている俺の意図を理解して、それに即対応してくれる・・・やっぱ、リアとは相性がいいな、それはともかく、聞いてみるか・・・

「リア、ライネスの奴知らねえか？」

「リョウの試合の前まではここで試合を見てたよ、リョウの試合に次が自分だからって舞台に向かった筈だけど・・・そっちでリョウの試合を見てたんじゃないの？」

「いやそれが見当たらないんだよなあ・・・」

あ、俺がリアと話してるの、周りから見たら一人ではなしてるように見えるんだよな、周囲の視線が痛いなあ、リアの方も似たような状況か？

まあ、どうでもいい、それよりライネスだ、もう一度辺りを見回す、うん、居ない・・・

『そうだ、これも夢見の予知なんだけど、ルージュの王子が大会に参加している筈なんだ、彼のこと気にかけておいてくれないかな？放っておくと多分死ぬからね、今回僕はあまり干渉できないから・・・頼んだよ』

・・・昨日、男の言った言葉を思い出す。

「くそ！嫌な予感しかない！リア、俺ちょっとライネス探してくる！！」

リアにいつて俺は駆け出した。

来賓席から試合のリングまではだいぶ離れている、俺なら身体強化してショートカットできるけどライネスは普通の道を通っているだろう、来賓席からリングまでの道程をライネスを探しながら駆けて行く・・・

「！！」

立ち止まる、来賓席からリングまでの道程の中程・・・

物陰から僅かに見える液体に体が反応する・・・

それは、俺の心を掻き立てる、紅・・・

鼻につく紅の匂いは俺を更に掻き立てる・・・

物陰に横たわるのは、自らの紅に塗れ倒れ伏す・・・

「ライネス!!」

第三試合3回戦

法炎の聖騎士

四重の魔法使い

ライネス フレイムロウ

対

サダン クォーテット

ライネス フレイムロウ 不戦敗



### 三章7話 夢見の予言

そろそろリヨウの試合が始まりますね、その次の試合が僕の試合ですし、そろそろ移動しておきましょうか。

「あれ？ライネスさん、リヨウの試合見ないんですか？」

席を立ち会場へ行こうとする僕に気付き、ゴルドの来賓として来ているマテリアさんが声をかけてきた。

「いえ、僕の試合がリヨウの試合の後ですから、先に会場の方に向かっておこうかと、リヨウの試合は向うで見ますよ」

そう簡単に話し来賓席を後にした。

リヨウの試合は九雑の技、英雄と同じ剣術を使う者が相手かもしれませんが、これは是非近くで見えておかないといけませんね。世界を救った英雄の剣技、どれ程のものなのか興味があります。

「ライネス フレイムロウ」

ふと、名前を呼ばれた気がして立ち止まる、珍しく周りに人は居ません……

まあ、これから試合がありますし、そっちに皆行っているのでしょう。

「こっちだ……」

声のした方に目を向ける、今は試合に使う資材などが積んで置かれている為、通路からは上手く死角になる位置、ローブを身に付けそのフードで顔が分からない様になっている人物が居た。声からして男でしょうか？

「えっと、なんででしょう？」

ローブの男は通路の死角に入り込むように少し後退し言葉を発する。

「ルージュとゴールドで起こった戦争で、戦場に出た3人の王子の中で唯一生き残った王子……」

「……まあ、そうですが」

なんだろう？この男、凄く怪しいんだけど。

「本来ならあの戦いで3人共が命を落とすはずだった……」

しまった！ローブの男が物陰に隠れて行くので釣られて近付き過ぎた！

不意を突かれ僕は物陰に引き込まれる。

体勢を立て直すと僕は奥、通路側を塞ぐ形でローブの男が立っている。

逃げ道を塞がれてしまいましたか……不味い、どう考えても敵ですわね。

「不測の事態が多すぎる、我等の予定は狂いっぱなしだ……そろそろ、埋め合わせを行わなければ……先ずは、お前を殺しルージュを落とそう」

ルージュを落とす？あ！こいつ、兄さんを殺ったあの時のローブの男か！？

「『ストーンエッジ』」

つつ！！こんな所で攻撃魔法！！

ローブの男の持つ魔力が形を成していく気配を感じ取り焦る、通路から死角になっているここは、武器を振り回すのには問題ないぐらの空間はあるけれど、それほど広い訳ではない。しかも僕は今壁を背に追い詰められている状態、通路の側はローブの男が塞いでいる為、逃げる事も出来ない。凌ぐしかない！

剣を抜き飛んでくる石の刃を叩き落す、場所が場所だけに大きな魔法は使えないのが唯一の救いでしょうか？

「いったい何が目的なんだ！」

「・・・『ガイアランス』」

聞く耳無しですか、足元から石の槍が突き出てくる、これは・・・剣で防ぎきれるでしょうか・・・

「くっ！！」

僕の剣と石の槍がぶつかり、僕の方が押し負ける、石の槍は剣で受けることが出来たけど、僕は吹き飛ばされ背を壁に叩き付けられた。

息が詰まる、このまま倒れてしまいたくなりますけど・・・それは

出来ない、男を睨みつけながら周りを気にする事を止める覚悟をする・・・

男の放つ石の刃や槍を防ぎ、または避けながら呪文を紡ぐ。

「汝は秘めたる紅蓮の欠片

我が放つは咆哮する火球

纏いし炎を解き放て、爆ぜろ」

なんとか詠唱を完了することが出来た・・・後は放つだけです。周りの物も一緒に吹っ飛ぶでしょうけど、仕方ありません。

「ちっ、面倒な・・・」

「『フレイムボ・・・!!』」

男に向かって魔法を放とうとしたけれど、何だこれ？

背にしている壁と下以外の全方向から石の杭が先端を僕に向けた状態で取り囲んでいた。

「『ストーンメイデン』」

「くっ! 『フレイムボム』!!」

一部の杭が僕に向かって動き出したので、咄嗟にそっちに向かって中断していた魔法を放つ、けど駄目だ、数が多すぎるうえに無詠唱

の魔法では防ぎきれない程の威力が込められている！

一斉にではなく数回に分けて飛んで来る石杭を、剣で弾き体を捻り避けるものの何本かは身体を掠め、更に何本かは僕の身体に半ばまで突き刺さる。腕や足を犠牲に危ない箇所への被弾は免れることができた。

「白き奇跡の力

暖かな慈愛を纏う輝きのベール

光よ、我に癒しの祝福を・・・『ヒールライト』」

身体に刺さる杭を抜き、すぐさま治癒魔法を施す。しかし、その間もローブの男は待つてはくれない。

「治癒魔法か・・・そう言えば貴様は聖騎士だったな、神聖魔法が使えてもおかしくは無いか、しかし・・・」

文句を言いつつも攻撃の手は緩めない、石の刃や槍が次々と僕に襲い掛かる。

「回復されるのは面倒だ、潰しておくか・・・

其は最凶たる漆黒の影

聖なるモノを否定し負を好しとする

影に纏われし汝は、ただ滅び行くのみ・・・『カーススペル・不治の霧』」

黒い霧が僕の身体を包み込んだ後、僕の身体に溶けるように消えていく。

「な！」

治癒魔法が効かない！？ かけ続けていた治癒魔法が突然効力を発揮しなくなった。

どうなっているんだ？ これがさっきの魔法の効力なのだろうか？ とにかく不味い、傷の方はまだ完全には癒えていない、この状況で傷を治せなくなるってことは・・・

「『ストーンメイデン』」

僕を取り囲む石の杭、傷で動きの悪くなっている僕には凌ぎきれませんね・・・

「がああ！！」

石杭が次々と僕に突き刺さり僕の身体は床に磔にされてしまう、わざとなのか分かりませんが、杭は僕の急所を上手く外していました。それでも今の僕は治癒魔法を受け付けない身、これはもう絶望的・

「ふん、いい様だな、今楽にしてや・・・ん？・・・ちっ、誰か来たか？ まあいい、このまま放っておいてももう助かりはしないだろう・・・」

誰かがこちらに来ることに気付いたローブの男の気配が消える、僕を残して立ち去ったようです。けど・・・ほんとに不味い、身体は磔で動けないし治癒魔法も効かない、今から僕に掛けられた魔法を解いて治癒を施しても助かるかどうか・・・

「ライネス！！」

あ・・・この声は、リョウ？僕がローブの男と戦っている間に試合は終わったんでしょか？

僕自身が危険な状態だというのに、そんなどうでもいい事が頭に浮かんだ・・・

はは、本当に不味いですね・・・

## 三章8話 2人目

石の杭で床に磔にされたライネスを見つけ直ぐに助けを呼ぼうとしたが・・・

「治癒魔法が効かないから急いで助けを呼んできても駄目・・・」

まあ、手が無い訳じゃない、正直もう使う気は無かったんだけど・・・

どうやら、俺はライネスに死んで欲しく無いみたいだ。

「うち、詳しい説明をしている暇は無いか・・・なら択べ、このまま死ぬか、人じゃなくなったとしても生きるか・・・」

俺はリアに告げたのと同じ言葉をライネスに告げた。

リアは受け入れ俺と同じ存在になり、その後の結果として自由を手に入れた。

こいつは・・・ライネスはどうするだろうか？

「はは、それは・・・悪魔の契約・・・ですか？」

「似た様なもんだ、俺が規格外なのは知ってるだろ？時間が無い択べ・・・生きるか？死ぬか？」

「こんな状態で、そんな誘惑されたら・・・生きたいと、答えてしまいます・・・よ・・・悪魔と、契約・・・してでもね」



生きたい・・・一応ライネスはそう答えたって事でいいんだろうか？まあいい、始める・・・

俺は自分の指先を噛み切り溢れる血をライネスの口に含ませる。

「呑め契約だ、俺の血はお前の中に溶け込み、俺とお前の刻の流れを同化させる・・・」

ライネスの喉が鳴る、俺の血を飲み込んだ、これで・・・

「代価はお前が俺の糧となること・・・」

流れるライネスの血に口を付ける、血を一口飲みこれで契約は完了。

そうだ、杭を貫いておかないと・・・

「あがつ!!?!?何を・・・するんです・・・か?」

何の合図も無しに、ライネスの身体に刺さっている杭を引き抜いたものだから、ライネスが痛みにも身体を跳ねさせる。

でも杭を抜いたそばから傷口はゆっくりと治りだした。

出血多量だろうけど半吸血鬼化した今の生命力なら問題ないだろう。

「これでとりあえず死にはしないだろうけど・・・ずいぶん派手にやられたな、自己治癒だけじゃいつまでかかるか分かんねえな・・・よし、お前に掛かった魔法を解きに行くぞ、んで治癒魔法使った方が治りも早いだろう」

杭を全て抜きライネスを解放し、背中に背負い来賓席を目指す、ラ

イネスがどんな魔法を喰らったのか知らないけど、リアなら魔法なんて軽やかき消すだろう。

「って訳でいっちょ頼む」

「急に呼び出したと思ったら！ライネスさん！大丈夫ですか？！」

一応、人目に付かない所までリアを呼び出したことを褒めてもらいたいぐらいだ。

血まみれのライネスを背負ったまま、他の国の奴等の居る来賓席に突入してたら、大騒ぎになり大会どころではなくなるかも知れないっての・・・

「一応、大丈夫だ、リアと同じにしたからな」

「共血の毒？バンパイアギフトあれって副作用が心配だっていってなかった？」

「え？何ですかそれ？聞いてませんよ！」

何焦ってるんだ？死ぬより悪魔と契約する方がましなんだろう？副作用ぐらいでがたがた言うなよ。

それに前例は副作用どころか消魔の力を抑えられるようになった、プラスに働いているんだ、ライネスに関しても俺は副作用の事なんて全く気にしてなかったぞ。

あ、今ライネス以外と元気そうだな、治癒魔法は必要無いか？

「でもまあ、かけられた魔法は解いた方が良いだろ？」

「出来るのならお願いします。そうすれば自分で治療できますから・  
・」

「リア、頼む」

「う、うん・・」

リアの持つ魔法とか魔力を消し去る消魔の力、本当はあまり使いたくないんだろうけど・・

「一瞬で良い、ライネスにかかっている魔法さえ消してしまえばそれでいいんだ」

「・・分かった、一瞬だけね」

俺にはよく分からないけど、リアが消魔の力を一瞬ONにして直ぐにOFFにしたようだ。

ライネスが驚いた顔をしているけど・・これまでの俺とリアの話でなんとなくリアに特殊な力があることを察していたようで特に何も言ってこなかった。

「かけられた魔法が解けたのは良いのですが・・僕の魔力まで消えてしまってるんですけど・・」

「魔法的なものは問答無用で消すからね」

ああ、かけられてた魔法だけじゃなくライネスの魔力まで消しちまったか、これじゃ・・

「消魔の力ですか・・・これじゃ自分で治癒魔法をかけられませ・・・あれ？」

ライネスが自分で治癒魔法をかけることも出来ないか・・・  
血まみれのライネスを医務室に連れて行くと面倒な事になりそうだし、どうするかな・・・

「魔力が・・・ある？」

「は？今消えたとか言ってなかったか？」

「はい、確かに今、僕の魔力は完全に消えてるんですけど・・・他に、もう1つ別の魔力が僕の中にあるみたいなんです。それに魔力の質がもの凄く濃いどうして今まで気付かなかったのか不思議なくらいです。なんでしょう？この魔力？」

「俺に聞かれてもわかんねえぞ、魔法の事なんてさっぱりわかんねえからな」

「すみません、恥ずかしながら私もこの間まで魔法とは無縁だったので・・・」

ライネスの感じる魔力を俺もリアも全く感じない、まあ、魔力自体俺には理解できないんだけどな。

「もしかして副作用？」

「自分の本来の魔力以外の魔力を得る事がですか？」

「今回もいい方向に作用したって事かなあ？運が良かったと思  
つとけ」

「はあ・・・そうですね、リョウのやったことを考えても無駄でし  
ようね、深く考えない事にします」

なんか、ライネスの中での俺の扱いって酷くないか？まあ、自分で  
も俺が規格外だって事は自覚してるけど、なんとなく納得いかねえ。

「『ヒールライト』

ああ、この魔力、問題なく使えるようですね、しかも魔力の質が濃  
い・・・詠唱無しなのに普段程の効力が出ますよ・・・」

多分俺との契約が原因なんだろうけど、それでもいきなり得た未知  
の魔力を躊躇い無く使えたな・・・ある意味ライネスの度胸に感心  
する。

でも、契約で強化された治癒力と治癒魔法でライネスの服以外は回  
復中だ。

ミストがリアを探している声が聞こえたので、リアには来賓席に戻  
ってもらい、俺とライネスは人気の無い場所に隠れ密談していた。

俺は前の試合前に話した男の言ってたことをライネスに話し、ライ  
ネスが自身を襲った男のことを話し終えた辺りでライネスの治療が  
終わった。

「よし、完治しましたね、この大会のことも気になりますが、僕は  
急いでルージュに戻ろうかと思っています。多分、大会でも何か起こる  
と思いますが、僕を襲った男が、僕を始末した後ルージュを落とす  
と言っていたので急いで帰らないと」

「ああ、大会参加者も腕の立つ奴ばかりだ、ちょっとやそつとじゃどうこう出来やしねはずだから、こっちは何とかしとく、ライネスは自分の国を守れ」

「はい、ありがとうございます」

とりあえずライネスには簡単に吸血鬼の力をことを教え、上手く制御出来る様に頑張れと言っておく。

「適当ですね・・・」

「男に手取り足取りとか嫌過ぎる、まあ、時間も無いんだろ？」

「そうですね、力についての詳しい事は後日、ゴールドに聞きに行きます、ですから・・・」

「ああ、全部無事に終わらせてみせる、そっちもしくじるなよ」

ライネスは急用だと言って竜騎士に頼み竜でルージュに帰って行った。

こっちは明日準決勝だ、さて、何が起こるかな・・・

### 三章 9 話 天劍、準決勝

「ふーん、それでライネスさんにまで供血しちゃったんだ？ま、本人が了承したならいいのかな？」

夜、宿でリアに今日ライネスに供血した経緯を話す、それと、これから大会中に何か起こりそうだと言うことも話しておく、これでリアも何か有った時に上手く動いてくれるだろう。

「とにかく何か起こりそうなんだよね？分かった、気をつけておくわ」

「ああ・・・リアも含めて各国の重要人物が集まってるからな、殺られちまわないように頼む」

ライネスを襲ったのは魔法使いみたいだし、リアの力なら魔法使いをほぼ無力化できるな。

ま、今何が起こるか考えても仕方ない、明日も試合だし、今日はどう休むことにしよう。

『それでは準決勝第一試合を始めます!』

リングの上に立つのは俺と・・・

### 準決勝第1試合

深紅の魔王

奏天の冒険者

リヨウイチ アカヤ

対

リジア フリージア

フリージアの代表に挨拶をしに行った時に留守番をしていた男・・・

「よ、こんなトコまで残ってたんだな、さすが魔王ってか?」

「魔王って呼ぶな、自分で名乗った訳じゃねえ」

「つたく、ライネスが余計なこと言ったせいだな、今度絞めよう・・・」

「はぁ・・・まあいい、さっさと終わらせるぞ」

リジアは双剣使いのようだな、軽く装飾された剣を両手に持ち構えている、ふむ、来ないならこっちから行くぞ、身体強化して突っ込む。

俺は両の拳、リジアは双剣、拳と剣で打ち合う。

俺の繰り出した拳をリジアが剣で受け流す、その際に流れのまま腕を斬りつけて来るけど身体をずらしてかわす。追撃を拳・・・手甲



で受ける。

「ちっ……」

手甲が軋んだ、思ったより威力が有るな、あまりまともに受けない方がいいな。

こいつ相当な腕前だ、左右の剣が攻防を巧みに切り替え俺を襲う、少し変則的だが同じ双剣使いのソルダと訓練してなかったら付いて行けてなかったかも知れない。

俺も両手で手数是不変わらない、でもリーチが剣と拳じゃこっちが不利だ、だから足も使う。

防具は付けていないが鉄血で強化すれば問題無い。  
アイアンブラッド

「お前は動きに無駄が多いな、力は俺以上なのにもったいない……」

俺の戦い方は街の不良共を相手にしていた時の喧嘩レベル、動きに無駄が多いとか言われても仕方ないだろうな、それでも結構やってこれたんだが……リジアこいつはそうはいかないみたいだな。

強化状態の俺の攻撃が双剣によって受け流される、攻撃後の隙に双剣の攻撃が俺に迫り離脱、その繰り返しだ。

「ちっ、魔剣武装！」  
カオスアルマ

懐に忍ばせておいたミーナに貰った短剣を魔装、即衝撃波を放つ。

「カオスアルマか……万象を奏でる『風斬り』」  
それ

リジアは即座に右手に持つ双剣を振るう、すると、そこから鎌鼬が発生し俺の放った衝撃波を打消した。

「（今剣が碧色の光を帯びていた・・・）それも魔剣か？」

「だったらどうする？これもその力で取り込んでみるか？」

ああ、やってやらあ。

「今の俺は魔剣が相手なら負けない」

「さて、どうだろうな？」

余裕こいてられるのも今の内だ、一度魔装を解く。

「万象を奏でる『水流』」

水が頭上から俺に襲い掛かってくる、それを避けながらリジアに突っ込んで行く。

「万象を奏でる『雷撃』」

げ！ちよつと待て、今辺りは水浸しだぞ！

「ちっ！カオスアルマ魔剣武装！！」

上か！？雷が落ちてくる、もう一度魔装して衝撃波を放ち地面に落ちる前に全て消しきる事に成功する。

「くっ!!」

でも一息ついている暇は無い、俺が雷を消している間にリジアが側まで間合いを詰めて来ている。

「万象・・・双剣風華!!」

リジアの双剣が風を纏い高速で無数の斬撃を放つ、この距離では・・・避けられないか。

喰らう覚悟を決めて出来るだけ拳で弾きながら突っ込む。

「な、突っ込んで来やがった!？」

避けるか防ぐかすると思ってたのだろう、リジアが驚き戸惑ってるうちに剣を掴む事に成功する。少なからずダメージは有るがこれで・・・

「力を秘めし魔の刃・・・

今一時、この身体は汝を糧とする・・・

理を越え、朽ちたるこの身体に魔を宿す・・・

朽ちたるこの身体をを鞘とする・・・」

「くっ!しまった!」

「魔剣武装!」  
カオスアルマ

―バキン―

「あれ？」

妙な音と共に手が剣から弾かれる、どうなってるんだ？

―バター―

あれ？俺、倒れた・・・？

「お、おい？どうした？！」

ちょっと待て、身体・・・動かないぞ・・・

準決勝第1試合勝者

奏天の冒険者      リジア      フリージア

落ちていく意識の中、審判によるリジアの勝利宣言を聞いた・・・

「リヨウは大丈夫なの？」

試合中に気絶したりリョウイチは、闘技場の医務室のベッドで寝かされていた。今は試合後直ぐにリョウイチの元に飛んで来たマテリアがリョウイチの診察をした治癒士に話を聞いていた。

「全く問題ない、身体は健康そのもの、今はただ寝ているだけだから心配する必要無い」

試合中、リョウイチの体に付いた軽い傷は医務室に運ばれた時点で既に完治していた為治癒士はただ状態を確認しただけで何も治療を行っていない為、普通なら不安に思うのだろうけど、マテリアはリョウイチの異常な自己治癒力を知っているのですその言葉のみで安心して胸をなでおろした。

「まったく、急に倒れるから驚いたぞ、問題無いみたいだし後はアンタに任せるな」

リョウイチの試合相手だったリジアも急に倒れたリョウイチを心配して、共に医務室まで来ていた。

「はい、ありがとうございました」

「はは、俺はなんもしてないけどな・・・」

そう言ってリジアは医務室を出て行き、治癒士も怪我人が出たと呼ばれ出て行き、医務室にはリョウイチとマテリアだけとなった。

「まったく、何が起こるか分からないんだから・・・寝てる場合じゃないよ」

マテリアは穏やかな表情でリョウイチが目を覚ますまでずっと、そ

の寝顔を眺めていた。

### 三章10話 紅月の丘、法炎の公子

そこは紅い月映える夜の丘、相変わらず紅と白の花がちらほらと咲いている・・・

（お兄さん、大丈夫ですか？）

前回と同じ言葉と共に自称神様の分身が現れる。

「お前、前回の最後になんか意味有りなこと言ってなかったか？なんか出てくるのがあれで最後みたいな感じだったぞ？」

（あれ？聞こえてましたか？でも大丈夫ですよ、僕が消えるのはまだまだ先のことになりそうですからね、もっとも、今の僕はほとんど力を持たないお飾りの神代理ですけどね）

ふうん、まあどうでもいいか。

「それより俺が又この夢を見てるってことは・・・俺、又死にかけてるのか？」

（いえいえ、今回は身体には何の問題も無いですよ、眠っているだけです、ただ・・・）

はあ？魔剣武装カオスアルマの力が身体に馴染んでない？本来ならエルリオールに来る時に力を与えられる為、使う頃には身体に馴染んでいる特殊能力を俺はこの世界に来てから貰っている、そのせいで能力がまだ身体に馴染んでいないと言うことらしい。

（おまけに、お兄さんの対戦相手の使っていた双剣は天剣です）

天剣？　そう言えばミーナが魔剣鍛冶師の第一目標とか言ってたな魔剣を超えた剣、心剣にも匹敵する力を持っているとかなんとか・・・

（今のお兄さんじゃ天剣を天剣武装する事は出来ませんよ、今回みたいに剣に拒絶されて気絶します。力が身体に馴染むまでまだかかると思えますから気をつけてくださいね）

そうか、って事はさっきの試合俺は負けたって事で間違い無いな・・・  
・なんか納得いかないが、自分の能力をきちんと把握できていなかったせいだし仕方ないか。

「にしても、もっと早くに教えといってくれよな・・・」

（すみません、僕にもエルリオールに干渉するには制限がありますから、今回のように何らかの事情で意識を失った状態でかつ夢の中でしか話をする事もできないんですよ、普通に寝ているだけに人には一部の例外を除いては話しかけられません、神と言っても代理ですし、今は力をほとんど失ってますからね）

「まあいいか、他に何かあるか？」

（そうですね・・・あ、そう言えば又1つ世界を救ってくれましたね、ありがとうございます）

「は？」

何の事だ？　戦争の時の話しか？



（いえ、昨日の事ですよ、ルージュの王子を救ったでしょう？世界の読んだ予言には、この段階での彼の死がルージュの滅亡に繋がると有りますから、彼を救い国に戻した事は未来をいい方向に変える一手になりましたよ）

「そうか・・・」

俺はただライネスにまだ死んで欲しく無かったただけなんだけどな。いい結果になったならそれで良い。

「ああ、そうだ、俺と同じ世界から来たって男が接触してきたぞ、アイツのこと知ってるか？」

前の試合前に俺に接触して来た男のことを思い出し自称神代理なら知ってるんじゃないかと思い聞いてみる。

（僕は立場上あまりそういったことを話せないんですけど・・・）

「気にするな、知ってるならさっさと話せ」

（・・・やっぱり詳しくは話せません、でも、信用は出来る人物ですよ）

少し悩んだようだが、あの男が何者なのかって事は話してくれないようだ。

だが、信用出来る人物って事は・・・あいつの言ってたことは事実か、実際にライネスも放って置いたら死んでたしなあ・・・  
となると、あんまりここでのんびりもしていられねえな。

「んじゃ、とつとと戻るか・・・」

(はい、次に会うことが無いことを祈ってますよ)

「はは、まあ気を付けるさ」

そして、俺の意識は紅い月の浮かぶ夜の世界から遠退で行く・・・

目を覚ますと白い天井が見えた。

ここは・・・医務室か？まあそうだな、試合中に意識を失ったら当然運ばれるよなあ。

「リョウ、起きたの？」

すぐ近くでリアの声がして、そちらを向くとベッドの脇の椅子に座っていたのだろうが、俺が起きたのに気付いた為、身を乗り出しこ

ちらを覗き込んでいるリアが居た。・・・どうでもいいけど、ちょっと近くないか？

「ああ、俺、試合は・・・負けたんだよな？」

「うん、それと今日の準決勝はもう全部終わってるよ」

って事は、今日は何も起きなかったか・・・何か起こるとなると、明日の決勝戦中か、各国の来賓共が来賓席から出て来る授賞式中か？

「明日、決勝以外に三位決定戦が有るけど大丈夫？出られる？」

「それは問題無い、気絶したとは言え殆んど無傷だったからな、今まで休んでた訳だし今からでも行けるぞ、でもまあ、明日はあんまり消耗したくないんだよなあ・・・」

「今朝話してた、何か起こそうとしてる人がいるってやつ？」

「そう、だから明日の試合には出ないことにする・・・」

これで入賞は出来なくなったけど、まあいいだろう、暇潰しに出場しただけだからな、それよりも片付けないといけない問題がある、ライネスを殺そうとした奴、明日出て来るかな？出て来やがったらぶっ飛ばさないとなあ・・・

「それじゃあ一緒に来賓席で観戦してよっか？」

「そうだな、リジアの天剣にも興味があるし、決勝は一緒に観戦するか」

とにかく明日が勝負だな、何が起こるか分からないけど、さっさとぶっ潰してまた別の暇潰しを考えよう・・・

---

流石、飛竜による移動は早いですね、先刻フリージアを発った僕はいまルージュのフレイムロウ城上空まで戻って来ています。

上から見る限り何の変化も無いようです、僕を襲った男の言っていたルージュを落とすと言うのはまだ先のことなのでしょうか？

兎に角、竜騎士の男性に城の前に降ろしてもらおう事にします。

「兄様？まだ大会は終わってない筈ですけど・・・何か有ったのですか？」

城内を進んで行くも普段と変わり無い様子で、難無くエルの所まで辿り着けました。

「エル！無事ですか！？何か変わった事は起こっていませんか？」

「え？ええ、何の問題も有りませんよ、父様の調子もだいぶ良くなっ  
って来ていますし」

まだ、と言うことなのでしょうか？

思わず気を抜きそうになった所に爆発音と城を揺らす振動が響いて来た。

「え?! 何ですか! 今の音は?!」

「この音・・・父さんの寝室の方から!？」

僕は慌てて駆け出します。エルから今はだいぶ調子が良くなったと聞きましたけど、父さんも病み上がりの身、襲撃に対応できるとは思えません。急がないと・・・

父さんの寝室に着き目に飛び込んできたのは、破壊された壁と赤い炎に包まれ燃える父さんの寝ていた筈のベッド、馬車ぐらいの大きさをした黒い毛並みを持つ双頭の狼の魔獣、最近良く魔獣や魔物の襲撃が有りますね・・・

そして父さんは、その狼に自身の身の丈ほどの大剣を振り回し斬り掛かる・・・父さん回復しすぎなんじゃないでしょうか？

「ふん!! 畜生風情が! 私をどうにかできると思うなよ!!」

「父さん!!」

良かった、部屋はボロボロだけど父さんは無事、むしろ元気すぎるくらいだ。

「兄様! いったい何が・・・!!」

遅れて付いて来てたエルも状況を見て息を呑む。

「ライネスにエルナスか! いい所に来た!」

父さんが僕たちに気付き声を張り上げながらも魔獣に斬りかかりま

すが、父さんの剣は魔獣の体毛によって弾かれてしまい、全く傷を与えられていません。

アーティファクト  
この魔獣、戦場で古代遺物を守っていた奴と同種の魔獣でしょうか？

「襲撃ですか父様！！」

エルが現状を理解しようと問いかけますが、アレは聞くまでも無く敵、おそらくは僕を襲ったローブの男によるもの・・・僕は一足先に攻撃を開始します。

「我が内に眠りし紅き力に炎を灯す・・・」

マテリアさんに消された僕の魔力は殆んど回復していません、でも、リョウとの契約で得た紅い魔力チカラが有ります。

「汝、猛る灼熱の赤

我が手に集いし炎は槍となり

敵を貫け 『フレイムランス』！」

紅き魔力で生み出した炎の槍を魔獣に放ちますが、やはりこの魔力・・・僕の本来持つ魔力と質が違う、炎の槍は紅い魔力の影響で炎の大槍と成り魔獣の腹に突き刺さり炎を上げる。

「燃えるなら外でやっつけていろ！」

悲鳴を上げながら燃える魔獣を父さんが大剣を振りかぶり外に打ち出しました。やはり回復しすぎではないでしょうか？良い事なんですけどね。

僕は下で苦痛に暴れる魔獣に止めを・・・

「汝、灼熱する赤

雄々しき姿は円柱

天より貫け朱き焰よ 『フレイムフォール』」

炎の柱が魔獣に降り注ぐ、炎は魔獣を包み込み燃やし尽くさんと燃え上がる。

「兄様、城内のほかの場所にも魔獣が出現しているようです」

エルに向き直ると、兵士が報告にを終え駆けて行く所でした。もう一度外を見渡すと城内のいたる所で戦闘が行われているようです。

「あの魔獣に武器による攻撃は通りません、魔法の使える者を向かわせて下さい！ 僕も直ぐに向かいます！」

駆けて行く兵士の背中に呼びかける、兵士は「了解しました」と返事をして駆けて行きます。

「さて、僕も行きます。エルは父さんに付いていて下さい」

「ライネス、あれはいった何なのだ？」

「詳しい事は僕が予定より早く帰ってきた理由も含めて後で話します」

城内で暴れる魔獣に対処すべく、僕も駆け出します。

フリージアで魔法を使った時感じましたが、リョウとの契約で得

た紅い魔力による魔法の行使は、本来の僕の魔力で魔法を行使するよりも威力が上がるようです。

アーディファクト  
古代遺物を守っていた魔獣を倒した時のように高位の魔法を使わなくても魔獣に対応できています。これなら城内の魔獣を片付けるまでは持ちそうですね・・・

リョウとの契約で得た命と力、未来の為に存分に奮いましょう！！



**三章 11話 魔獣襲撃、決勝は？（前書き）**

久々の更新、放置二ヶ月か・・・

### 三章 11話 魔獣襲撃、決勝は？

3位決定戦は不戦敗を申し出たのからいよいよ決勝戦なんだが・・・この空気、試合が始まる前から何か有るって言ってる様なものだぞ。

そして、試合開始と共にリングに獣が降り立った、リジアは反応が送れリング端まで吹き飛ばされたが、相手の魔法使いの方は試合開始後直ぐに飛び退き難を逃れている。

「来たか、でもまあ、あれは攪乱だろうな」

「ライネスさんの聞いた話だと、狙いは私達なんだよね？」

そう、リングに魔物が降って来たけど、狙われているのは闘技大会の来賓として招かれている各国の主要人物達。

だから、リングで暴れる魔物の対処等は他の人に任せ、俺達は待っていた。

今ここにいるのは、各国の来賓と数人の護衛。

まあ、この護衛の奴等に来賓の守りは任せるとして、俺は敵の迎撃に専念しよう。

どこから来るかと身構えていると、リングの方で変化があった。

誰かが空に向け魔法を放った。空を見ると羽を持った魔物が魔法に打ち落とされていた。

「上か・・・」

そう言や、今リングだ暴れている魔物も上から降ってきたんだよな  
あ、撃ち落されてるのは運んできた魔物って訳か。

お、何人か羽の魔物を倒しに行ったみたいだな、よしよし、これなら俺はこっちに集中できる。

「来賓の方々、此処も危険ですので避難して下さい！」

避難を促しに来た見覚えの有るローブの男に俺は迷わず殴りかかった。

「ッ！！『アースシールド』！」

俺の拳は男の防御魔法に阻まれる、まあ簡単に当たるとは思っていない。

「待ってたぜ」

男の顔が忌々しげに歪む。

「チッ、またお前か。とことん邪魔してくれるな・・・」

「邪魔なのはお前の方だ、この辺りで捕まっとけ」

「断る！」

まあ当然だな、男が手を振ると周囲の物の影から魔物が数十匹出現する、その内の4体が俺の方へ向かって来た。ワーウルフって言うのか？俺に振り下ろされた爪を弾き、膝に蹴りを叩き込み骨を砕く、これで行動不能、そうしている内に男が部屋の隅の物影に移動する。

「計画は練り直しだ、今回は退く、精々死なないことだな」

「チッ！待ちやがれ！！」

俺はこいつが何度か影を使って姿を消すのを見ている、おそらく影を基点に移動できる魔法か何かだろう、また逃げられる！

俺以外の騎士達も、突然影から現れた魔物から周囲の者を守るので手が一杯の様で男を追えない。

俺に襲い掛かって来た2体目、1つ目の犬の目玉を殴り潰して男を追おうとするが、同じ型の3体目4体目に阻まれる。

「くそ！」

男が影に溶けるように姿を消した・・・くそ、また逃げられた。

捕り逃したイラつきを目の前の2匹の魔物にぶつけ、纏めて殴り潰す。

「リヨウ、こっちも片付いたわ、向うの応援に行っても大丈夫よ」

他の魔物はリアや護衛の騎士が片付けたようだ。

まあ、逃げるための時間稼ぎだったんだろう、そう強力な奴は居なかったみたいだ、けど・・・リングの奴は別格みたいだ。リジアや他の参加者も戦っているのに手古摺っているようだ。

「ああ、犯人には逃げられちゃったけど・・・アレはどうにかしとかなないと、手伝って来る」

ローブの男も逃げたしこっちは問題無いだろう・・・俺はそう言うて飛び出した。

まず、暴れる魔物の脳天に強化した蹴りを叩き込む。

「ようリジア、手古摺ってるな」

魔物が地面に叩き付けられている内にリジアの隣に移動した。

「リョウイチか、厄介な事にこいつ魔法が効かないんだよ魔物って言うより魔獣の類だな、図体でかいから攻撃も当たれば即退場だしな、責めあぐねてる」

「魔法が効かないって事は力押しか・・・」

相手も魔法が使えないのであれば純粋な力比べ、体格差が有ろうと負ける気はしない、まあ、魔法を使われると厄介なんだけどな・・・見た目（黒い巨大狼）的に無いだろう。

魔物の攻撃が強力過ぎて守りは意味が無いみたいだ、動きの速い者が魔物を攪乱し、隙を見て攻撃力の高い者が攻撃を加える、といった戦法を取っている様だけど、リジアの言うように効力はイマイチだ。

「お前の剣も駄目か？」

「撃てるが、奴の前でかき消される」

「じゃあ、意味が無いな、分かった、俺が殺る」

身体強化は全開、魔物相手に遠慮する必要は無い、正直大会中全力でやれてたわけじゃないからな、溜まったストレスの解消をするのにこの魔物は利用させてもらおう。

アイアンブラッド  
「鉄血」硬化し手甲は捨てる、相手が人じゃないなら逆に邪魔になる。

「寝てろ・・・」

立ち上がった魔物を有無を言わず再び叩き伏せる、反撃なんてさせない。

「お前無茶苦茶するな・・・アレを叩き伏せるってどんな力だ？」

「んなこと言ってる場合か？俺が潰してる間なら攻撃し放題だぞ」  
今のうち

「おおお、そうだな、みんな！今の内だ潰すぞ！！」

各々の武器を手に魔物に群がる参加者達、魔物への攻撃は任せよう、俺なんでもないようにやってるけど、この魔物を叩き伏せるの結構しんどいんだよなあ、強化も全開で使ってるし・・・

「ガアアアア！！」

「だから寝てろって・・・」

立ち上がろうとする魔物を叩き伏せることを続ける。

まあ、これで片付くだろう。

「これで終わりだ!!」

リジアが双剣を魔物に突き立てる。

幾度にも亘る攻撃で魔物はようやく力尽きた。

やっと終わったか・・・

「まだみたいよ」

「あ？リア、まだなんかあるのか？」

「この魔物を運んできた羽を持った魔物・・・」

「何人か迎撃に出てっただろ？」

「うん、羽の魔物は迎撃出来るんだけど、運んで来る大型の魔物が・・・」

「「ああ・・・」」

なるほど、今倒したのと同じようなのがいたら手古摺るな、こっちも俺が足止めて何とか倒したって所だしな・・・

「しゃあないな・・・」

犯人逃げちまったってのに、まだ、終わらないか・・・

### 三章 12話 出来るならさっさとしろよ・・・

街の外には街を守るように巨大な地の壁が出来ていた。

誰かが魔法でやったのか？これならあの大型の魔物相手でも暫らくは持つな・・・っと、早く助けに向かわないとな、外の魔物も魔法を無効化するなら厄介だ。

「でもこれ、俺以外は壁を迂回して行かなきゃならないんじゃないのか？」

援軍の到着が遅れるのが分かっているでも壁<sup>これ</sup>を出さないと耐えられない状況って事か？

身体強化は解除していない、俺はそのまま壁を飛び越える。

「おお、結構やばいな、数が多い、前の戦法も負傷者が多すぎて無理か、それに時間はかけられないな・・・」

奇跡的に死人はいないみたいだが負傷者が結構いるな、地の壁は魔物の街への侵入を防ぐが同時に迎撃に出た者の退路も断つ・・・精神的にもきついだろうに、よく持ち堪えた。

「早く片付けないと死人が出るな、全力で行く・・・<sup>ブラッドドライブ</sup>血を燃やせ！」

俺の中の人の血が燃える、身体能力が馬鹿みたいに跳ね上がる。

「ブラッドドライブ、一応俺の切り札だ。長くは持たないからな、速攻で片付けさせてもらう」



手近に居た一体の横っ腹に回し蹴りを叩き込む、倒さなきゃいけないんだけど、最初の一撃は他の魔物も巻き込んで吹き飛ばす為に加減する。

吹き飛んだ魔物は他の魔物も巻き込んで吹っ飛んで行き、劣勢だった戦況に少しの余裕を生む。

「んじゃ、消し飛べ!!」

手当たり次第弾いていく、俺の跳ね上がった力は魔物の身体の段った部分を吹き飛ばす。飛び散る血肉に俺の身体が赤く染まっていくけど気にしている時間は無い、はぁ・・・また、あのふたつ名が広がるんだろぅなぁ・・・

「な! いったい誰!？」

迎撃に出ていたうちの一人か? でも、まぁ、その質問に答えている時間も惜しい。

「んなことより! どんどん落とせ! 俺の力が続いているうちに殲滅するぞ!!」

「時間制限付き!？」

化物的な力を発揮している俺を、今はとりあえず味方だって認識してくれば良い、混乱してないでもう少し残ってる空の奴等を落とすしてくれ。

正直ここに居る魔物全部を俺一人で倒すのは無理だ、そこまで力が持たない、傷を負わせれば他の奴等も戦い易くなる、だから能力が切れるまで出来るだけ多くの魔物を攻撃し、後は他の奴等に任せよ

フラッドドライフ

う・・・

闘技場で戦っていた者たちを引き連れ、先に迎撃に出た人たちの援軍に向かったリヨウを追った。

でも、私たちはフリージアの街を出たところで足止めをされてしまった。

「これは・・・」

「『アースウォール』か？それにしてもこの規模は、大魔法級だぞ！！」

向こうに行くには凄く遠回りをしないといけなくなる、でも、供血者の力で強化すればこれ位跳び越えられるんじゃないかな？

私はリヨウが離宮の屋根の上に飛び上がったのを思い出しながら考える、試してみる価値はあるのかな？

リヨウに教わり練習した方法を思い出し身体に強化をかける、これで私の身体能力は格段に向上する。

「リジアさん他のみんなと『アースウォール』を迂回して向うに向かってください！私はここを越えて先に行きます！」

それだけ言って思い切って跳躍した。

「な！ゴルドの姫さんもリヨウイチと同じか！！チッ！続ける奴は続け！それ以外は迂回して向うへ向かうぞ！」

私が壁を飛び越えるのに続いて、何人かが各々の力を使って壁を越えて来る。

でも、壁の向うの戦闘は終わりにかけていた。

多くの負傷者がいるけど魔物の殆んどが身体のだこかを吹き飛ばされ、若しくは切り裂かれ絶命していた。

「これって、リヨウがやったの？」

リヨウなら可能ね、私の身体強化以上の力を持ってるんだし・・・この身体強化の力、使ってみて分かったけど、完全に規格外なのよね、今までの常識を打ち砕く身体能力、そんじょそこの魔物に負ける筈無い、それがリヨウの使う物になれば更に規格外の中の規格外となる・・・

「はあ、はあ・・・リア、悪い、少し残っちゃった」

突然体から赤い煙を立ち上らせているリヨウが私の隣に現れる、どれだけ身体能力が上ってるの？私の視力も強化されてるんだけど・・・本当に突然現れたようにしか見えなかった。

「血を消費しすぎた、ブラッドドライブはもう使えない・・・てか、もうしばらく動けそうに無い」

宣言通りその場で倒れ動かなくなるリヨウ。

「後、任せた・・・」

任されたわ。

まだ敵は残っている、リヨウの活躍に咄然としている者たちをリジアさんが纏め殲滅に向かった。

私はリヨウのマネでもしましょうか。

誰かの作った防壁（地の壁）を跳び越えて何人かの援軍が来た、その中にリアも混じっている、供血者の能力を上手く使いこなしているようだ。

俺の方は・・・あゝ駄目だ、能力の使いすぎだ、ブラッドドライブ身体<sup>の</sup>血が足りない。

そろそろ使用を止めないとぶっ倒れるな・・・

とりあえずリアのどこまで行くか。

「はあ、はあ・・・リア、悪りい、少し残っちゃった」

おお！？俺、思った以上に疲労してるなあ・・・

「血を消費しすぎた、ブラッドドライブはもう使えない・・・てか、もうしばらく動けそうに無い」

まあ、俺がリングでやった魔物の足止めならリアも出来るし、もう大丈夫だろ・・・

「後、任せた・・・」

俺はここで休ませてもらう、地面に倒れながら後を託してみる、まあ頑張ってくれ。

リジアがみんなを纏めて残った魔物の殲滅に行ったな。

リアは身体強化を使い、さっき俺がやった魔物の足止めを行っている。

あ、あれはエリスか？三回戦で戦った剣士・・・凄いな一人で魔物を相手取っている、周囲に斬り刻まれた魔物が数体転がっている。てことは、その数体を倒したってことか・・・

「せんぷうそう旋風槍！」

おあ？誰か壁を越えて降りてきたな、風を使って落下の衝撃を和らげたようだ。

「あれ？リヨウイチさん？大丈夫ですか！？」

なんだ、シルクか。

「あゝ、大丈夫だ、能力の使い過ぎでぶっ倒れてるだけだ」

「ちょっと無理して壁を越えてきましたけど、もう終わりそうですね」

だな、丁度今、最後の一体をリジアがぶった斬ったところだ。

「にしても、今まで何度も魔物に襲撃されているが・・・この世界じゃ魔物って操れるものなのか？」

「この世界？ いえ、人に魔物を操ることなんて出来る訳無いんだけど・・・」

人じゃなかったら出来る奴もいるんだろうな・・・ってことはあのローブの奴、人じゃないのか？

まあ、どうでもいいか、次ぎ会ったらぶっ飛ばすだけだ。

「終わったの？」

「ああ、リアお疲れ」

やれやれ、やっと終わったな、限界まで能力を使っても倒しきれないとか数多すぎだろ。

「いや、まだみたいだ・・・あっちの空見てみる」

リジアが疲れた顔でやって来てのたまう・・・  
言われた通り見上げてみると・・・

うわあ、さっきと同じくらいの数の魔物が向かって来てないか？

「おいおい、もう身体強化以外は使えねえぞ・・・」

「私もまだ力を使うのに慣れてないから、全力の身体強化はもう無理よ・・・」

「魔法の効かない敵の相手はキツイんだけどな・・・」

「アタシは今来たばかりだからまだいけますけど、さすがにあの数は・・・」

えー、結構やばい状況だな、つーか、この国を滅ぼせるぐらいの規模じゃねえか？大会の為に強者が集まってるからってやり過ぎだろこれ？

「しかたねえ、もう少し頑張るか・・・」

身体を起こし強化をかける

「なら僕は 詠う・・・」

「は？」

強化した俺の聴覚に微かに声が届く・・・誰だ、詠うとか言ってる奴は？

「「ええっ!？」」

落ちた、大型の魔物もそれを運んでいた羽の付いた魔物も例外無く突然何かに切り裂かれ撃墜された。

「なに・・・え？え？何が起こった!？」

「落ち着け、誰がやったか知らねえけど、どうやら終わったみたいだし、いいんじゃないか？てーか、終わってくれ、結構限界なんだよ・・・」

見渡す限りでは、もう生きている魔物は居ねえな。

「なんて終わり方だ、てゝか、こんな事が出来る奴が居るなら最初にやれよ・・・」

さきほど声のした方、防壁の上を見上げる、そこにはもう今の攻撃を放ったと思われる者は居なかった。

「どこの誰だか知らないが、助かったんだからいいんじゃないか？」

「まあ、そうだけどな、疲れた・・・」

刀を鞘に納め防壁から降りた男は近くで待っていた女性の下へ向かった。

「お疲れ様です」

「うん、やっぱりこれだけの規模の力を使うと疲れるね・・・それに、僕としてはもっと早く手を貸したかったんだけど・・・」

「仕方ないですよ、後の未来を変えるならこの瞬間以外は悪い方向にしか変えられません」

「分かってはいるんだけど・・・持ち堪えてくれた彼らには感謝しないかね」



「深紅の魔王さんも彼女と共に居る2人も予想以上の働きをしてくれましたしね」

「リョウイチ君は本当に僕と同じニンゲンか疑わしいけどね？」

「ふふ、そうですね、あの力は魔物に近い物を感じます」

「ま、僕の例も有るし気にしなくても大丈夫だよ、彼の心は正しい方向に傾いている」

2人は人知れずその場から去っていった。

今回の迎撃戦、襲撃した魔物の半数近くを殲滅した男はそれを誰にも知られる事無く戦場を去っていた。

**三章12話 出来るならさっさとしろよ・・・(後書き)**

ブラッドドライブ

血流爆発↓血を燃やせ に変更。

やっぱり、他に良い言葉があれば変えます。

そして三章完結としておきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5089n/>

---

エルリオール～異界の勇者達?～

2011年11月15日12時46分発行